

復次に(戊)と(申)とは圓融の上より立論して一即一切、一切即一で、萬象の相即相融して不二なるを示し心佛衆生三無差別の極致を道破したのである。また最後の(癸)は慈悲同情の上より立論して一切衆生と吾人との同一體を道破したのである。

復次に(甲)と(乙)とは萬有は一體なりと假定して其活用を示したものである、即ち萬法一に歸するとせば其一とは何物ぞや、呼んで心と爲んか、呼んで物と爲さんか、神とせんか、佛とせんか、法身とせんか、眞如とせんか、若し物なりとせば心は如何にして生じたるや、若し心なりとせば物は如何にして存在するや、若し神なりとせば其面目は如何、若し佛なりとせば其相好は如何、若し法身なりとせば有形なりや無形なりや、若し眞如なりとせば如何にして生滅ありや。此等の難關を自由に透過する事ができれば決して趙州や南泉を怪しむとはなからう。

四十六、萬物一體と道德的行爲。禪學は一科の倫理學たるに止るのでない、故に其萬有一體を説くに方りて、或は主觀よりし、或は客觀よりし、或は斷惑の工夫よりし、

或は無我忘己の境界よりし、或は圓融論よりし、或は唯心論よりし、或は宗教的信念の上よりする。されば其立言は哲學宗教の疆域に屬するもの多く、吾人が生平の倫理實踐に疎きの感を生ぜしむるを免れぬ。然るに王學は其主なる目的を吾人が倫常の上に置くを以て其萬物一體論も亦哲學的にあらずして吾人が日常の行爲に切實なるものがある。

萬有一體の説は夙に莊子と佛教とに見えて儒教にて之を採用したのは陳搏の如き三教一致を宗旨としたる學者の唱道にかゝるのである。而して宋儒の祖と謂ふべき周濂溪が老莊と禪とを加味して儒教を説くや、程明道は周子が心學の骨髓に悟入して始めて明かに天地同根萬有一體の觀念を明かにするに至つた。乃ち彼が識仁篇に

仁者^{△△△△△△△△△△△△△△△△}は渾然として物と體を同^{△△△△△△△△△△△△△△△△}うす。

といひ、又

仁者^{△△△△△△△△△△△△△△△△}は天地萬物を以て一體と爲^{△△△△△△△△△△△△△△△△}す、己れに非るなし……故に廣く施して衆を濟ふ

は聖人の功用なり。

又

大人は天地と其徳を合し、日月と其明を合す。
といひて仁愛の上より萬物一體を説いたのである。

想ふに道德の理想は、萬有一體の信念を中心とし根本として居る、何となれば古今の道德的事項に就て觀察する時は、昨是今非、時と處とに従つて道德的事項にも變化がある。故に西歐の道德とする所にして東亞の悖徳とするものあり、今人の背徳とする所にして古人の徳行とするものもある。然れども古今を通じ東西に亘りて道德的行爲には一貫の理法がある。即ち一切の道德的行爲は必ず社會的にして同時に利他の功を含むの一事である。如何なる賢哲、如何なる雋傑の行爲なりとも單に個我の爲めにするものは毫末も彝倫上の價値は無い。加之、單に個我を目的として發したる行爲は假令社會的にして利他の功を含むとするも道德上の評價は極めて低い。果して道德が社

會的のもの、利他的のものであるとすれば天地同根萬物一體の觀念は道德の淵源にして同時に道德の究竟せる極致と謂はねばならぬ。總て社會的にして利他的なる行爲は自己と他人との間に親密なる同情の連絡によりて生ずる。例せば慈母は其愛兒の苦樂を以て己れ自身の苦樂として痛切に感受するので、此同情の連絡があつて始めて恩愛と稱する家庭的の徳行が起る。同様に孝子は其怙恃の快苦を以て己れ自身の快苦として痛切に感受するので始めて孝行と稱する社會的徳行を起すのである。故に慈母の個我は愛兒をも含有して一體と爲し、孝子の個我は兩親をも含有して一體と爲すを見る。かくして自己の家庭に屬する人のみにあらず、他人をも親愛して其幸福を増進し其苦患を除却せんと努むる仁人は他人の憂喜苦樂を直ちに自己の憂喜苦樂として感ずるので當該仁人の個我の中には多くの他人をも含みて一體と爲しつゝある。されば釋尊の如く廣く一切衆生を矜愍し、一草一木の微に至るまで之を愛護する者は天地間の有生無生一切の萬物と同體となるのである。是を以て社會が進歩發達して道德の標準が愈々

高まる時は萬物一體の觀念は愈、明かとならざるを得ぬ。

四十七、仁愛より見たる萬有一體論。程明道の萬物一體論を承けて之を熾んに唱道したるは王陽明である。陽明が萬物一體論には三種の著眼點がある。彼が大學問に。

大學は昔儒以て大人の學と爲す。敢て問ふ大人の學は何を以て明德を明かにするに在る乎。陽明子曰く大人は天地萬物を以て一體と爲す者なり。其天下を視るや猶ほ一家の如く、中國猶ほ一人の如し。若し夫れ形骸を問て、爾我を分つ者は小人なり。

大人は能く天地萬物を以て一體と爲すや之に意あるに非ず。其心の仁も是の若し其天地萬物と而も一と爲るや豈惟た大人のみならんや。小人の心と雖も亦然らざるは莫し。彼れ顧みて自ら之を小とする耳。是の故に孺子の井に入るを見て必ず怵惕惻隱の心あり、是れ仁と孺子と一體たり。孺子は猶ほ類を同する者なり、鳥獸之哀鳴、斛觶を見て必ず忍びざるの心あり。是れ其仁と鳥獸と一體たるなり。鳥獸は猶ほ知覺ある者なり。草木の摧折を見て必ず憫恤の心あり。是れ仁と草木と一體たるな

り。草木は猶ほ生意ある者なり。瓦石の毀壞するを見て必ず顧惜の心あり。是れ仁と瓦石と一體たるなり。是れ一體の仁なり、小人の心と雖も亦必ずこれあり、是れ乃ち天命の性に根して自然に靈昭不昧なる者なり。是の故に是を明德と謂ふ。

とあるは第一の著眼點で己れの欲せざる所は人に施す莫れてよ同情の念を本として有情非情一切の萬物を同體と觀るのである。這は己れを推して人に及ぼし、類推演繹して萬物一體の仁を説いたのであるから、仁惠慈愛の精神に基づいた一體論で科學的の論據があるのではない。禮記に

聖人は天下を以て一家と爲し、中國を一人と爲すに耐ゆ。

とあるは陽明が説の萌芽たるに近い。

又曰く

吾の父を親しみ以て人の父に及ぼし以て天下人の父に及び、而して後、吾の仁、實に吾の父、人の父と天下人の父と一體たるなり。實に之と一體たり而して後、孝の

明德始めて明かなり。吾の兄に親み以て人の兄に及ぼし、以て天下人の兄に及ぶ、而して後吾の仁、實に吾の兄、人の兄と天下人の兄と一體たるなり。實に之と一體たり而して後、弟の明德始めて明かなり。君臣や、夫婦や、朋友や、以て山川鬼神鳥獸草木に至るまで實に以て之を親しみ吾が一體の仁を達するに有らざる莫し。然る後、吾の明德始めて明かならざる莫し。真に能く天地萬物を以て一體と爲すなり。寔に陽明の言の如く、吾の父に親み得る人にして人の父に親み得ざる理はなく、吾の兄を敬ひ得る人にして人の兄を敬ひ得ざる理はない。従つて吾が兩親を敬愛し、吾が妻子を愛撫し得る人にして人の兩親を敬愛し、人の妻子を愛撫し得ざる筈はないのである、吾が兩親を愛敬する心情も人の兩親を愛敬する心情も同一である。吾が妻子を愛撫する心情も人の妻子を愛撫する心情も同一である。然るに一方に及んで他方に及ばざる所以は己れを推して他に及ぼさざるに由る。仁人君子といふも別に衆人と異りたる心情を有するのではない、但己を推すの一事あるのみである。

四十八、生欲と萬有一體觀。凡そ人類の慾望中最も強烈なるものは生命を維持せんとする慾望である。故に他の所有慾望は此猛烈なる生欲に衝突する時は忽ち消散し去る然るに此生欲たる獨り人類に止まらずして一切の禽獸より、草木に及び、無情の瓦礫に至るまで其成形を失はざらんとする性向を有しつゝある。換言せば生を好み死を惡むは萬有一般の通性にして有情と悲情との差別は無い。ざるを小人は我生の貴きを知りて人の重んずべきを知らぬ、己れが生を遂げんとするに汲々として己れを推して人の生を遂げしむるを知らぬ。是に於て乎、横逆悖戾至らざるはない。之に反して大人君子は我生の重んずべきを知り、之を推して人の生を貴び、我生を遂ぐると同時に人の生を遂げしめ、禽獸草木より以て瓦石沙礫に及ぶ。是に於て乎、仁恕愛感至らざる所は無い。果して然れば私心邪慾の萌芽は個我の存續を遂げんとする生欲より生じ、博愛仁恕の胚胎する所も亦此個我を維持せんとする生欲を推して人に及ぼすにある。毫釐の差千里の隔を爲すとは此事であらう。陽明はいふ

夫れ人は天地の心にして天地萬物は本來吾と一體なる者なり。生民の困苦荼毒は孰れか疾痛の吾身に切なる者に非る。吾が身の疾痛を知らざるは是非の心なき者なり、……良知の人心に在るは聖愚を問つるとなく、天下古今の同うする所なり。世の君子は唯だ其良知を致すとを務むれば則ち自ら能く是非を公けにし、好悪を同うし人を見ると猶己れを視るが如くし、國を見ると猶ほ己が家を視るが如くし、天地萬物を以て一體と爲す……古の人、能く善を見ては管に己れより出づるが若くするのみにあらず、民の饑溺を見ると猶ほ己れの饑溺するが如し。一夫も其所を獲ずんば己れ推して之を溝中に納れたる若くなる者は故らに是を爲して天下の己れを信ぜんとを求むるにあらず。其良知を致して其自ら快きを求むるを務むるのみ。後世良知の學明かならず、天下の人、外は仁義の名を假り、内は以て私利の實を行ひ、詞を詭はりて以て俗に阿ねり、行を矯めて以て譽を求め、人の善を掩ひ襲ひ取て己が長と爲し、人の私を許きて竊かに以て己がて直爲す。忿を以て相勝ち猶ほ之を義に徇

ふと謂ふ。險を以て相傾け猶ほ之を惡を疾むと謂ふ賢を妬み能を嫉みて猶ほ自ら以て是非を公にすと爲し、情を恣まにし慾を縱まにして猶ほ自ら以て好惡を同じくすと爲し、相凌ぎ相賊ひ、其一家骨肉の親よりして既に彼此藩籬の隔なきと能はず。況や天下の大と民物の衆とに於てをや。又何ぞ一體として之を視んや。僕誠に天の靈に頼て偶々良知の學に見るあり、以爲らく、必ず此に由て而して後天下は得て治むべし。是を以て斯民の陷溺を念ふ毎に之が爲に戚然として心を痛ましめ、其身の不肖を忘れて此を以て之を救はんとを思ふ。

於戲、世に人類救済の福音なるものあらば、开は天地同根、萬物一體の福音であらねばらぬ、此の福音は塵世苦痛の叫喚を變じて天國妙樂の歌謠となし、惡魔邪鬼の人心を變じて慈神悲佛の恩寵に浴せしむるに足る。救済とは他なし、吾人が羸穢なる性情を矯正して溫雅清高ならしめ、吾人が愚劣闇昧なる根機を一新して理智の光明を發揮せしめ、個我の妄執を一掃して萬物一體の仁を體認せしむるに外ならぬ。吾人の要

する所は、此の如き活潑々地の救済で、死後靈魂の救済の如きは吾人の關する所でない。

四十九、拔本塞源論。陽明が有名なる拔本塞源論は萬有一體の第二の著眼點を示す。

夫れ聖人の心は天地萬物を以て一體と爲す。其天下の人を視ること外内遠近なく、凡そ血氣ある皆其昆弟赤子の親、安全にして之を教養し以て其萬物一體の念を遂ぐるを欲せざる莫し。天下の人心、其始め亦聖人に異る有るに非るなり。特に其有我の私に問てられ、物欲の蔽に隔てられ、大なる者は以て小に、通ずる者は以て塞がり、人各、心あり其父子兄弟を視ると仇讎の如くなる者有るに至る。聖人之を憂ふるあり、是を以て其天地萬物一體の仁を推して以て天下に教へ、之をして皆以て其私に克ち其蔽を去て以て其心體の同然に復ると有らしむ。其教の大端は……所謂道心惟れ微、惟れ精、惟れ一允に厥中を執るなり。其節目は即ち……父子親あり君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信ある五つの者のみ……蓋し其心學

純明にして以て其萬物一體の仁を全うするとあり、故に其精神流貫し、志氣通達して人己の分、物我の間である無し。之を一人の身に譬ふるに目に視、耳に聽き、手持ち足行き以て一身の用を濟す。目は其聰なきを耻ぢず而して耳の涉る所、目必ず營む。足は其執る無きを耻ぢずして手の探る所、足必ず前む。蓋し其元氣充周し血脈條暢す、是を以て痒癢呼吸感觸神應し、言はずして喻るの妙なり。此れ聖人の學至簡至易、知り易く従ひ易く、學、能くし易く、才、成り易き所以の者は正に大端惟だ心體の同然に復るに在て知識技能は與に論ずる所に非るを以てなり……幸とする所は天理の人心に在る終に混ぜべからざる所あり、而して良知の明、萬古一日なれば即ち其吾が拔本塞源の論を聞かば必ず惻然として悲み、戚然として痛み、憤然として起つあり、沛然として江河を決するが若くにして禦ぐ可らざる所の者あらん。夫の豪傑の士、待つ所なくして與る者に非れば吾れ誰と與にか望まん。と論じたるは良知即ち先天的是非を知る所の吾人の靈智は萬人の同じく具ふる所であ

るが物欲の蔽を蒙り、物我の間てを見る私心の爲に其本然の性態を發揮するがてきぬ。而して聖人の學は心學なれば吾人が有我の私を除き、物欲の暗雲を掃ふて心體の同然に復らしむるに外ならぬといふにある。开は禪に謂ふ所の本心は靈々昭々たるも煩惱の塵垢の爲に汚されて其妙徳を顯はすとがてきぬ、若し此妄念の闇雲を掃蕩せば自性清淨の心月は直下に現はるる。且つ此心月たるや衆生にありても増さず、佛にありても減せず、凡聖迷悟同一心性であると謂ふと同じい。藥山禪師に參じたる李翱は禪を會して

性は清明なるもの、聖人凡人共に異なるなし。聖人は清明の鏡に塵なきが如く、寂然として昧まらず、物至れば之に應じ、事至れば明を知る。

清明の性は天地に鑒む、外より來るに非るなり。

と言うてゐる。斯く王學と禪學とは其揆を一にする。要するに拔本塞源論は吾人が心體の清明昭々たるは萬民同じく然る所なりとの見解より萬物一體を説いたのである。

五十、科學的萬有一體觀。陽明が萬有一體論は倫理的觀察點より更に一步を進めて物質的、科學的見地より之を論じてある、勿論科學的見地といふも今日西洋科學のやうに精密なる論證をするのではない、單に萬有は一元氣より生成したるものなれば、物質的に同體なりといふのである。

朱本思問ふ、人には虚靈あり、方に良知あり、草木瓦石の類の如きも亦良知ありや否や。先生曰く人的の良知就ち是れ草木瓦石的の良知なり。若し草木瓦石に人的の良知なくんば以て草木瓦石と爲るべからず。豈唯だ草木瓦石のみ然りとせんや。天地も人的良知ならくんば天地と爲すべからず。蓋し天地萬物は人と原是れ一體なり其發竅の最も精なる處、是れ人心一點の靈明なり。雨露風雷日月星辰、禽獸草木、山川土石、人と原只一體なり。故に五穀禽獸の類は皆以て人を養ふべく、藥石の類は皆以て病を療すべし。只此一氣を同するが爲の故に能く相通するのみ。

といひたるは極めて奇抜なる見解である。何となれば、禽獸の肉が能く人を養ふ所以

は彼等の身體と吾人のそれと同性の物質より成立するを證すべく、五穀の能く吾人の食餌となり吾人の血肉を形成する所以は彼等が吾人と同性の物質より成立するを示すに足る。是に於て乎、動植二物の一體なるを見る。次に藥石の如き無機物質も能く吾人の病患を療じ、吾人の毀傷せる形軀を補ふとせば無機物質も吾人の如き高等なる有機體と化するを得ることを立證する。果して然れば覆載間の萬物は有機體と無機體とに論なく、動物と植物とに論なく一體なると昭々として明かである。

且つ陽明が上述の立言は萬物有心の汎心論を説くので、即ち人に良知あるのみに非ずして草木にも瓦石にも天地にも雨露風雷にも良知がある。併し萬有に齊しく良知あるは事實なるも人心は其發竅の最も精なる者て他は其塵なるを免れぬといふのである。程子の語にも

天地の間、獨り人のみ至靈と爲すに非ず。自家の心便ち是れ草木鳥獸の心なり。但だ人は天地の中を受け以て生るゝのみ。

とある。蓋し精神とは自發的活動の異名に外ならぬので、自發的活動は有機體の最高等なる人類より下は無機體の最劣等なる物に至る迄一として具有せざるはない。されば天には天の心あり、地には地の心あり、山川土石には山川土石の心あるべき筈である。禪も亦萬物有心を説く、されば道元禪師は

草木瓦礫を認めて無情とするは不徧學なり、無情を認めて草木瓦礫とするは不參飽なり。

と道はれて金石土芥の微に至るまで無情にあらざるを示してある。

五十一、身・心・一・件。陽明は汎心論を説くのみにあらず更に進んで身心の合一を示し、靈肉の不二なるを道破してゐる。开は九川との問答に

只身心意知と物と是れ一件なるを知るを要す。九川疑て曰く物は外に在り、如何ぞ身心意知と是れ一件ならんや。先生曰く耳目口鼻四肢は身なり、心に安んぞ能く視聽言動せん。心、視聽言動せんと欲するも耳目鼻口四肢なくんば亦能はず。故に心

な○け○れ○ば○身○な○く○、○身○な○け○れ○ば○心○な○し○。○但○だ○其○充○塞○の○處○を○指○し○て○之○を○言○へ○ば○之○を○身○と○
謂○ひ○、○其○主○宰○の○處○を○指○し○て○之○を○言○へ○ば○之○を○心○と○謂○ふ○。○心○の○發○動○の○の○處○を○指○し○て○之○を○
言○へ○ば○之○を○意○と○謂○ふ○。○意○の○靈○明○の○處○を○指○し○て○之○を○知○と○謂○ひ○、○意○の○涉○著○の○處○を○指○し○て○
之○を○物○と○謂○ふ○。○只○是○れ○一○件○な○り○、○意○未○だ○懸○空○的○あ○ら○ず○、○必○ず○事○物○に○著○く○、○故○に○意○を○
誠○に○せ○ん○と○欲○せ○ば○則○ち○意○の○在○る○所○に○隨○ふ○。○某○の○事○に○し○て○之○を○格○し○、○其○人○欲○を○去○り○而○
し○て○天○理○に○歸○す○れ○ば○則○ち○良○知○の○此○事○に○在○る○者○、○蔽○な○く○而○し○て○致○す○を○得○、○此○れ○便○ち○是○
れ○誠○意○的○の○工○夫○な○り○。○九○川○乃○ち○釋○然○と○し○て○數○年○の○疑○を○破○る○。

とある。身心を二元と爲し靈肉の差別を妄執して『心常身滅』てふ不合理なる信仰を有するは古今東西の士人が十に八九まで免る能はざる所で、千古に傑出せる學者宗教家と稱する輩も多くは此頑夢の中に彷徨したものである。況や一般の凡愚なる衆氓をや。然れども身心不二は動かすべからざる現前の事實で、身心に關する科學の進歩は愈其不二合一を立證するに傾きつゝある。既に身心にして不二なりとせば物質と精神とは

同一存在なると論ずる迄もない。是に於て乎、身心不二論は其儘物心合一論となる。此點に關する詳細の論議は予が『禪學新論』を參考せんとを讀者に乞はざるを得ぬ。物心の合一を信ぜざる者は身體より獨立したる精神ありと妄想し、精神の依處として靈魂を假立し、幾多の妖怪談を附加して以て前後を糊塗し、神秘主義を唱へ、妄想憶説を逞うして愚俗の凡情に迎合せんとする。これ寧ろ憐れむべきである。夫れ身心不二の理に達せざれば二種の病的思想を生ずる。第一には唯物主義の病弊、第二には唯心主義の病弊である。唯物主義の病弊は宇宙には唯だ物質のみ存在して精神は都無なりと獨斷し、人間を以て快樂のみを追求する動物と誤認し、専ら自利主義を主張するに至る。這是膚淺なる哲學者、輕佻なる文學者に見る所の病弊である。次に唯心主義の病弊は宇宙には唯だ精神のみ在りと速斷して、物質の客觀的存在を否定し、從て客觀的眞理の存在を疑ひ、其極遂に闇黒なる壞疑に陥るに臻る。此の如きは決して溫健中正の思想ではなす。

吾人は陽明が一元的思想の透徹充實して、能く舊來の迷執を脱したるを喜ぶと同時に禪學の物心合一論の愈々眞理なるを確信するのである。

五十二、一了一切了。吾人は常にいふ、一法に通ずる時は一切の法に通じ、一理を透見する時は萬理を透見するとを得と。何となれば一葉の水の上に浮ぶ所以は鐵艦の大洋に駕する所以で、一果の樹枝より落つる所以は大塊の諸惑星と共に太陽を廻る所以である。茲に一個の茶碗ありとせん、當該茶碗の存在する所以を知らば之を載する所の盆の存在する所以を知るべく、盆の存在する所以を知らば盆を容る室の存在する所以を知るべく、室の存在する所以を知らば全家屋の存在する所以を知るべく、全家屋の存在する所以を知らば市街の存在する所以を知るべく、市街の存在する所以を知らば市街を容るる一國の存在する所以を知るべく、一國の存在する所以を知らば全國の存在する所以を知るべく、全國の存在する所以を知らば全地球の存在する所以を知るべく、全地球の存在する所以を知らば我太陽系の存在する所以を知るべく

我太陽系の存在する所以を知らば他の太陽系の存在する所以を知るべく、他の太陽系の存在する所以を知らば全宇宙の存在する所以を知るべきである。一言に道は茶碗の存在する所以は宇宙の存在する所以である。されば茶碗の水を盛る、盆の茶碗を載する、室の盆を容る、家の室を有する、家の市街を形成する、市街の一國に於ける一國の全地球に於ける、全地球の太陽系に於ける其理は皆一である。故に太陽の萬物を照すも、地球の萬物を載するも、大虛の衆物を容るも、風の吹くも、雷の鳴るも、雨の沾ほすも、氷の寒さも、火の熱さも、草の緑なるも、花の紅なるも、禽獸蟲魚の生息するも、人類の高等なる生活を營むも同一理法に外ならぬ。此點より觀察する時は萬有は平等にして一體であると謂はねばならぬ。之を陽明の立言に徴するに

問ふ人心、物と體を同うす、吾身の如きは原と是れ血氣流通的、之を同體と謂ふ所以なり。若し人にありては便ち異體にし了る。禽獸草木は益々遠し而るを何ぞ之を同體と謂ふや。先生曰く爾ち只だ感應の機上に在て看よ、豈但だ禽獸草木のみなら

ん、天地と雖も也た我と同體的、鬼神も也た我と同體的なり。

とある。以ふに此一段は感應上より同體を説かんとするので、詳言せば天地洄寒なれば人獸草木皆之に感應して萎縮し、天地溫暖なれば人獸草木皆之に感應して繁殖し、天地の一進一退は萬有の榮枯盛衰と感應し、外物の榮枯盛衰は人心の憂喜苦樂と感應するの理によりて萬物一體を説くのである。故に吾人が一法を以て一切法を推すの論と同説である。又云く

請ひ問ふ、先生曰く爾ち看よ、這個の天地の中間、甚麼なは是れ天地的の心ぞ。對て曰く嘗て聞く人は天地的の心と。曰く人又甚麼をか心と做す。對て曰く只是れ一箇の靈明なり(先生曰く)知るべし、天に充ち地に塞る中間、只這箇の靈明あり、人只形體の爲に自ら間隔し了る。我的の靈明は便ち天地鬼神的の主宰、天に我的の靈明ある没くんば誰か他の高きを仰ぎ去らん。地に我的の靈明ある没くんば誰か地の深きに俯し去らん。鬼神に我的の靈明ある没くんば誰か他の吉凶災祥を辨じ去らん。

天地鬼神萬物、我的の靈明を離卻せば便ち天地鬼神萬物ある没くし了らん。我的の靈明、天地鬼神萬物を離卻せば亦我的の靈明ある没し。此の如きは便ち是れ一氣流通的、如何ぞ他と間隔し得ん。

とあるは人類は精神を以て靈明とし、天地は覆載を以て靈明とし、鬼神は吉凶災祥を辨ずるを以て靈明とするので一氣流通するを見るといふのである。

五十三、平等即差別。上述の如く萬有の一體を論ずる時は平等の一方面に偏倚して動もすれば惡平等の弊に陥り、君臣上下の別を無視し、貴賤貧富の差別を没卻して社會主義の如きものと爲るの虞れがある。然れども平等と混同とは決して日を同うして論ずべきものでない。例せば男女平等と男女混同とは氷炭の相違がある。男女平等とは男女は其天賦の資質の異なるに隨て分業を爲し、天職を守り、相親み相和して其間に貴賤の別を見ぬのである。男女混同は之に反して男子の爲す所は女子も之を爲し、女子の爲す所は男子も之を爲し、男子にして官吏ならば女子も亦官吏となり、男子にして軍

人たれば女子も亦軍人となる權ありといふのである。然れば女子にして子を生まば男子も亦子を生まざるべからず、女子にして庇髮を結はゞ男子も亦庇髮を結ばざるべからずといふに至る。陽明の萬有一體論は此の如き混説ではない、平等即差別の妙を示すのである。されば

問ふ大人は物と體を同うせば如何ぞ大學に又箇の厚薄を説くや。先生曰く、惟是れ道理自ら厚薄あり、比へば身は是一體にして手足を把て頭目を捍くが如し、豈是れ偏に手足を薄うするを要せんや、其道理此の如くなるべし。禽獸と草木と同く是れ愛的、草木を把て禽獸を養ひ去る又忍び得。人と禽獸と同く是れ愛的、禽獸を幸して以て親を養ふと祭祀に供し賓客を燕すると心又忍び得。至親と路人と同く是れ愛的、簞食豆羹の如き得れば即ち生、得ざれば則ち死す、兩つながら全きと能はざれば寧ろ至親を救ふて路人を救はず、心又忍び得。這是の道理此の如くなるべし。我身と至親とに至るに及ては更に彼此厚薄を分別することを得ず。蓋し以て民を仁し物

を愛する皆此れより出づ。此處にして忍ぶべくんば更に忍びざる所なし。大學に謂ふ所の厚薄は是れ良知上自然的の條理にして踰越すべからず。此れ便ち之を義と謂ふ。這箇の條理に順ふ便ち之を禮と謂ふ。此條理を知る便ち智と謂ふ。是這の條理を終始す便ち之を信と謂ふ。

とある如く、路人と至親には之を遇する差等あり、禽獸と人類とは之を待つに道を異にし、禽獸と草木には之を使ふに法を別にし、草木と土石には之を用ゆるに其法を異にするは當然の理にして毫も萬物一體の仁愛に矛盾するのではない、否斯く愛には偏黨なきも物の異なるに隨て之を處するの法を異にするは眞の平等である。即ち小兒には賓を遇するの法あり、大人には大人を遇するの法あり、賓客には賓客を遇するの法あり、路人には路人を遇するの法あり、禽獸には禽獸を遇するの法がある。小兒も大人も同じく待遇し、賓客も路人も均しく待遇し、禽獸も人間も同じく處理するは平等ではない混同である。故に平等中に差別あるのが眞の平等と謂ふべく眞の公平と謂ふ

べきである。

問ふ良知は一のみ、文王は彖を作り、周公は爻を繋げ、孔子は易を賛す。何を以て各自ら理を看ること同じからざるや。先生曰く聖人何ぞ能く死格に拘し得ん、大要良知の同じきに出づれば便ち各説を爲すとも何の害あらん。且つ一園の竹の如き、唯此枝節を同するを要せば便ち是れ大同なり、若し枝々節々を拍定し、都て高下大小一様なるを要せば、便ち造化の妙手にあらず。汝が輩唯良知を培養し去るを要す、良知同じければ更に異處あるを妨げず。汝が輩若し肯て功を用ゐざれば筭を連ぬるも也た曾て抽き得ず、何れの處にか枝節を論し去らん。

便ち知る、良知は同じく平等なりと雖も人各其能に従て説を爲すの差別あるを妨げず、平等とは一園の竹、節々枝々、高下大小を同じくするが如き死平等ではない、枝節の形状を同する平等の中に高下大小の差別を具するが造化の妙手である。大智和尚の云く

諸佛未だ出世せざるに常轉法輪あり、山は築かずして高く海は決せずして深し。已に出世に及びて終に本分を以て人に説せずといふと無し、苦瓜は根に連て苦く甜瓜は蒂に徹して甜く豈安排を假らんや。唯だ一等地に於て根源を識破せば物々全眞頭々玄極ならん。

萬有一體とは山を崩して野となし、陸を平けて海に等しからしむるが如きを謂ふのではない、萬有一體なるが故に山は高く海は深く、甜瓜は甘く、苦瓜は苦いので、森羅萬象の差別が其儘一體平等なる眞如の妙相である。

之を要するに王禪二學の萬有一體の大觀念は人類道德の淵源で、此觀念を實現したものが仁義禮智、忠信孝悌等、家庭と國家と社會に對する所有道德的となるのである。而して此觀念たるや平等の一方面に偏したる僻見ではなく、平等中に差別を捨てざる穩健中正の思想なるは吾人の信じて疑はざる所である。

第五章 王禪二學の良知說

五十四、良知說の由來。吾人は前章に於て王禪二學の萬有一體觀を略叙するに中りて陽明が屢々良知なる文字を用ゆるを見た。故に便宜の爲め本章に於て王禪二學の良知說を比較論評しやうと思ふ。陽明が良知の說は王學の正法眼藏とする所て全學系の精髓であるから、先づ彼が良知に悟入せる由來を述べねばならぬ。

明の弘治十八年孝宗皇帝晏駕、武宗皇帝十善の實位を襲ぐ。帝は極めて暗愚の主にして閹人劉瑾等の八人を寵任したれば號して八黨といふ。彼等は武宗が東宮たりし時より左右に隨侍し、最も帝の心を得、遂に政權を横まにするに至れるなり。

是に於て閣老劉健は臺諫と謀を合せ之を放逐せんと企たるも密計漏洩して、劉瑾等の勝訴となり、却て劉瑾は司令官に任ぜられ、威權全く其掌中に落ち。劉健は逐斥せられ忠直の内臣王岳は殺され瑾が勢力は中外を傾け、公卿も目を側つるに至れり。

正徳元年南京の科道官、載銑、薄彥徽等上疏して言ふ、皇上政を新にす宜しく君子に親み小人を遠くし、宜しく大臣を輕斥し閹等を任用すべからずと。劉瑾等之を聞て大いに怒り、奏して曰く銑等の表言狂妄なりと、乃ち之を捕へて獄に下し勘問せしむ。王陽明は此時兵部主事の官にありて時事の日に非なるを見て憤慨に耐へず滿腔の忠誠を披瀝して上疏以て銑等を救はんとす。其略に曰ふ、臣聞く君仁なれば則ち臣直なり、今銑等は言を以て責と爲す。其言如し善ならば自ら宜しく嘉納すべし。則ち其れ未だ善からざれば亦宜しく包容し以て忠讜の路を開くべし。今赫然として命を下し拘囚せしめらる。陛下に在ては少しく懲創するに過ぎず、怒て之を絶つに意あるに非ず。下民無智にして妾りに疑懼を生ず。臣竊かに之を惜む。是れより後宗社の安危に關する事ありと雖も亦將に口を緘ちて言はざらんとす。伏て乞ふ前旨を追回し銑等をして舊に仍て職に供はり、聖徳無我の公を明かにし、臣子敢言の氣を作さしめんと。

陽明は此上表の爲に劉瑾の怒に觸れ捕へられて訟獄に下され、廷杖四十を受けたるが、瑾は心腹の人をして杖を監せしめ特に力を加へしめられたれば陽明幾んど死して後に甦り、貴州龍場の驛丞に貶謫せらる。時に其齡三十五歳なりき。

明年陽明將に龍場に赴かんとする時、劉瑾は心腹の人を二路に遣はし其後に尾して彼の言動を伺察せしむ。既にして杭州に詣り大暑に値ひ勞を積み病を致したれば暫く勝果寺に息ふ。

勝果寺に居ること兩月餘にして一日午後陽明は廊下に納涼しつゝあり、僮僕は皆外に出去りて居らざるに方り、二人の大漢ありて腰に刀刃を懸け、口に北音を吐き、外より突入して王子に謂て曰く、官人は是れ王主事なりや否や。陽明應へて曰く然り。二漢曰く某等言の相告ぐべきありと。即ち引て門外に出し之を挾んで同しく行く。陽明何れに往くかを問へば二漢但だ前行せば便ち知らんと曰ふ。陽明病中に在るを以て辭するに步履する能はざるを以てす。二漢曰く前去亦遠からず、我等左右

より相扶くるも可なりと。彼れ廻ち已むを得ずして其之く所に任す。

行くこと約三里許にして背後に復た二人ありて追逐して至る。陽明其面貌を顧みれば頗る相熟知するに似たり。二人曰く官人我等を識るや否や、我等は乃ち勝果寺の鄰人、沈玉、殷計なり。素より官人は乃ち當世の賢者なるを聞く。平時敢て見ゆるを請はず、適二漢あり挟み去るを聞く、恐くは官人に利あらざらん、特に追ふて此に至る。官人の下落を看んのみと。時に二漢色を變じて沈殷二人に謂て曰く、此は朝廷の罪人なり、汝等何ぞ親近するを得ん。二人曰く朝廷已に其官を謫す、又何を以て罪を加へんやと。

二漢陽明を扶けて又行く、沈殷又之に従ふ。天色漸く黒き頃、江頭の一空室中に至る。二漢密かに沈殷二人に謂て曰く吾等は實に主人劉公(瑾)の命を奉じ來りて王公(陽明)を殺さんとす、汝等は相干る没きの人なり、速かに去るべし、必ず相隨はざれ。沈玉曰く王公は今の賢なり、其をして刃下に死せしむるは亦慘ならずや、且

つ屍を江口に遺さば必ず地方を累さん、此事決して行ふべからず。二漢曰く汝の言亦是なり。乃ち腰間に於て青索一條長さ丈餘なるを解き、陽明に授けて曰く爾ちに自ら縊るを聽す如何ん。沈玉又曰く繩上に死すると刃下に死すると同一の慘なり。二漢大いに怒り、各、刀を抜て手に在り、聲を厲まして曰く此事完たからざれば我等以て復命する無し、亦必ず主人の手に死せん。殷計曰く足下必ず怒を發せされ、王公をして夜半自ら江中に投じて死せしめば既に屍を全うせしめ又地方を累さず。足下も亦以て事を了りて歸り報ずべし、豈妙ならずやと。二漢相對して低語し少頃ありて即ち刀を收めて鞘に入れて曰く此の如くなれば可なるに庶幾からんのみと。沈玉曰く王公の命は此夜に盡さん、吾等且く酒を沾ひ共に飲み其れをして酔ふて忘れしめんと。二漢亦之を許して陽明を室中に鎖す。

陽明沈殷二人を呼て曰く我れ今夕固より必ず死なん、當に一たび家人に報じ吾屍を收むるを煩はすべし。二人曰く尊府に報せんと欲せば必ず官人の手筆を得て方に信

に准ずべし。陽明曰く吾袖中に偶々素紙あり、筆なきを奈何せん。二人曰く吾當に酒家に於て之を借るべし。沈玉一漢と同じく市中に往き酒を沾ひ、殷計一漢と陽明を門外に守る。少頃にして酒を沾ふ者已に至る。一漢門を啓く、身邊に各、椰瓢を帶ぶ。沈玉滿酌して陽明に送り、覺えず涙下る。陽明曰く我れ罪を朝廷に得、死は自ら吾が分なり、吾自ら悲まず、汝何ぞ必ず我が爲に悲んやと瓢を引て一飲して盡す。殷計も亦一瓢を獻ず、彼れ復た之を飲む。陽明酒量甚だ弘からざれば辭して曰く吾飲むと能はず、既に高情あり幸に遠客に轉進せよ、吾れ尙ほ家信を作らんと欲すと。沈玉筆を以て陽明に授く、陽明紙を袖中より出し、筆を援て詩一首を寫す。

學道無成歲月虛

天乎至此欲如何

生曾許國慙無補

死不忘親恨有餘

自信孤忠懸日月

豈論遺骨葬江魚

百年臣子悲何極

日夜潮聲泣子胥

更に一首の詩を作り次に絶命の辭を書す。二漢は文理に通ぜざるも但だ陽明の手に揮毫を停めざるを見て相顧みて驚嘆し以て天才と爲す。陽明且つ吟じ且つ寫し、四人互に相酬勸し各酩酊して將に夜半に及ばんとする時、雲月朦朧たり。二漢酒興に帶著して陽明の水に投ぜんとを逼る。是を以て彼は先づ二漢に向て其全屍の徳を謝し、然る後逕ちに江岸に造り、沈殿二人を回顧して曰く必ず我家に報ぜよ、必ず我家に報ぜよと言ひ託りて沙泥中より歩みて江に下る。二漢乃ち岸上に立て遠くより之を望むに物の水に墮つるの聲あるを聞き、陽明已に江に投ずと思ふ。一響の後寂然として聲なければ立つと多時にして心を安ずる能はず。遂に歩歩下灘を擗り來るに灘上に脱せる雲履一雙あるを見、又紗巾の水面に浮ぶを見る。曰く王主事果して死せりと。二物を取り以て去らんと欲す。沈玉曰く一物を留めよ。二漢遂に履を棄て只紗巾を撈して之を携へて歸り去る。

陽明の弟王守文は殷沈二人より彼が絶命の詞及び二詩を得、果して其兄の親筆なる

を認め痛哭して止まず。又人ありて江邊の二履を拾ふて官に報じたれば衆人轟傳して陽明眞に溺死すと爲す。陽明の父龍山公人を遣はして江邊遺履の處に到り、漁舟に命じて屍を撈すると數日を累ねるも一も得る所なし。門人之を聞く者皆悼惜せざる無し。惟だ徐愛のみは言ふ先生必ず死せず、天陽明を生す、千古の絶學を倡へんとす、豈是の如くにして已まんやと。

却説陽明果然として水に投せず、獨り江邊に下りて雙履を脱し留めて證見と做し、又紗巾を將て水面に抛棄し、却て石塊を取り江心に向て抛ち去り、江灘に沿うて去り、其已に遠きを計りて身を岸坎の下に藏し、次日一箇の小船に赴き七日後、江西の廣信府に至り、行て舟山縣に達し、其夜復た一船に搭じ一日夜にして福建の北界に到着す。時に巡海の兵士等彼が狀貌商賈に似ざるを見て疑ひ之を拘せんとす。陽明曰く我は乃ち兵部主事王守仁なり、罪を朝廷に得るに因て廷杖を受け、貶せられて貴州龍場驛の驛丞と爲る。自ら罪の重きを念ひ、引決せんと欲し、身を錢塘の江中

に投ず。一異物に遇ふ、魚頭人身、自ら巡江の使者と稱す。言く龍王の命を奉じ前み來て相迎ふ。我隨て龍宮に至る、龍王、階を降りて迎接して言く、我異日前程尙ほ遠し、命當に死すべからず。酒食を以て相待ち即ち前の使者を遣はし我を送りて江を出づ。倉卒の中一舟に附して此に至り、我を送りて岸に登らしめて亦見えず。知らず此處錢塘を離るゝ多少程途ある。我れ江中より此に至る纔かに一日夜のみと。兵士其言を異として酒食を以て之を欺待し、即ち一人を馳せて往て有司に報ぜしむ。陽明は事の官府に涉り身を脱する能はざるを恐れ、潜かに遁れ去る。

それより山徑無人の處に従て狂奔するこ三十餘里にして一古寺に至る。天已に昏黒なり。乃ち寺を叩き投宿せんとす。寺僧禁約を設け夜客を留めて歇宿せしめず、寺傍に野廟あり久しく廢す。虎其中に穴す、行客知らずして誤りて此廟に宿すれば虎に遭うて啖はる。次早に寺僧其行囊を取りて自ら利す、以て常事と爲す。陽明既に寺に入るを得ず、乃ち野廟の中に就て宿す、飢疲已甚し、神案下に於て熟寢す。夜半

に群虎廟を遶りて環行し大に吼ゆ、敢て入る者なし。天明に寂然たり。寺僧虎の聲を聞き以爲らく夜來の客は已に虎腹を厭かしむと。相與に廟に入り其囊を簡んと欲す。陽明夢尙ほ醒めず、僧疑うて死人と爲し、杖を以て微しく其足を撃つ、陽明蹶然として起つ。僧大いに驚きて曰く公は常人に非ず、然らざれば豈虎穴に入りて傷かざるあらんやと。依て彼を邀へて寺に過り朝餐を畢りて殿後に至れば一老道者ありて打坐するを見る。陽明近づいて之を視れば乃ち先きに鐵柱宮に見ゆる所の道者にして容貌儼然として昨の如く毫髪を差へず。因て與に對坐し問て曰く我今劉瑾と難を爲し幸に餘生を脱す。將に姓を隠し名を潜め世を避くるの計を爲さんとす。知らず何れの處か以て相容るべき、望むらくは乞ふ指教せよ。道者曰く汝親の在るあらずや、萬一人あり汝死せずと言はば劉瑾の怒り爾の父に逮はん。誣るに北は胡に走り南は越に走るを以てせば何を以て自ら明さん。汝進退兩つながら據るなし。乃ち一詩を示す

二十年前已識君

君將性命輕毫髮

寰海已知誇令德

英雄自古多磨折

今來消息我先聞

誰把綱常重一分

皇天終不喪斯文

好拂青萍建大勳

陽明其言に服して謫處に赴かんと決意し一絶を殿壁に題す。

險夷原不滯胸中

夜靜海濤三萬里

何異浮雲過大空

月明飛錫下天風

道者銀一錠を出して贈る、陽明此盤纏を得て乃ち間道より武夷山に遊び、鉛山に出で、上饒を過ぎ、復た婁一齋を見る。一齋陽明を留めて一宿せしめ助くるに路費數金を以てす。陽明逕ちに南京に往き龍山公を省觀す。父子相見る意外に出づ枯木再花の如し、喜びに勝へず、居ると數日、即ち辭して貴州に往く。

貴州龍場の地は州の西北に在り。萬山叢棘の中、蛇虺堆を成し、魍魎晝見はる。瘴

癘蟲毒、苦み言ふべからず。夷人の語言又皆缺舌にして辯じ難し。居に宮室なく、唯だ土を累ねて窟と爲し其中に寢息するのみ。陽明初めて至るや夷人之を謀殺せんと欲し、之を神に卜す、不吉なり、夜夢に神人告て曰く此れ中土の聖賢なり、汝輩當に小心にして敬事し其教訓を聽くべし。是に于て中土往年亡命の徒にして能く夷語に通ずる者あり。夷人之れを央して陽明に通語し、日に食物を貢し親近歡愛する骨肉の如し。陽明乃ち屋宇を建立し、名づけて龍岡書院と曰ふ。之を翳するに檜竹を以てし、之に蔭くに卉藥を以てし、日夕其中に諷吟し、漸く夷語を習ひ、乃ち教ふるに禮義孝悌を以てし、息心開導して略、倦怠の色なし。之を久うして家信を得たり、言ふ劉瑾陽明の死せざるを知り、且つ父子南都に相會するを聞て益々大いに悲忌し、旨を矯めて龍山公を勸し致仕して郷に歸らしむと。陽明曰く瑾の怒り尙ほ未だ解けず、得失榮辱皆度外に付すべし。惟だ生死の一念自ら省るに未だ超脱する能はず。乃ち居後に於て石を鑿ちて榔と爲し、晝夜其中に端坐し、胸中灑然として將

に身を終らんとするが如し、夷狄患難俱に之を忘る。僕人其憂に堪へず、毎々病を患ふ、陽明輒ち之を寛解し、又或は詩を歌ひ曲を製して相與に諧笑し以て其意に適せしむ。因て思ふ設し古聖人をして此に當らしめば必ず此より進むものあらん。吾今終に未だ排遣の二字を免るゝ能はず。吾れ格致の工夫に於て未だ到らざるなり。忽ち一夕夢寐の間、豁然として大悟す。陽明此時其齡三十七歳なりき。

五十五、王子が良知の確信。王子が良知の説は上記の如く千辛萬苦の間に體驗證入した所で、世の輕浮なる學者が西人の糟魄を舐りて一夜に唱へ出したる議論とは大いに其撰を異にする。即ち彼は一たび廷杖の下に殆んど死して後に甦り、再び炎熱と病患に斃れんとして之を免れ、三たび刺客の毒刃に舐らんとして之を脱し、四たび江中に投じて魚腹に葬られんとして之を遁れ、五たび餓虎の餌食とならんとして之を免れ、六たび龍場の瘴毒に斃れんとして幸に之を遁るゝを得たのである。斯く浮世の艱苦を備さに嘗め盡したれば人間の榮辱得失毀譽窮達の如きは灑然として胸中より洗ひ去る

とを得たるも生死の一念のみは心頭に滞りて離るゝ能はず、常に煩悶の種子となりたるも石槨の中に端坐工夫して遂に之を解脱し豁然として大悟の妙境に入つたのである。故に陽明自らいふ

吾が良知の二字は龍場より以後、便ち已に此意を出す。只是れ此二字を點じ出さずして學者と言ふに多少の辭説を費却す。今幸に之を見出し、全體を洞見す。眞に是れ痛快、手の舞ひ足の蹈むを覺えず。學者之を聞て亦多少尋討の工夫を省却す。學問の頭腦此に至りて已に是れ説き得て十分に下落す。但た恐くは學者肯て直下に承當せざるのみ。又云く
某良知の説に于て百死千艱の中より得來る。是れ容易に見得して此に到るに非ず。此は本是れ學者究竟の話頭なり。已むを得ずして人の與めに一口に説き盡す。但だ學者之を得る容易にして只把りて一種の光景と做して玩弄し此知に弧負せんとを恐るゝのみ。

と、以て如何に陽明が良知に重きを置き、之を以て學問の頭腦とし、孔門の正法眼藏とするかを知るに足る。又いふ

這の些子(良知)看得し透徹せば他の千言萬語に隨て是非誠偽、前に到れば便ち明かなり。合し得るは便ち是、合し得ざるは便ち非なり。佛家の心印を説くが如く相似たり、眞に是れ箇の試金石、指南針なり。

と、然れば良知は祖師の心印に同じく百行の標準と爲り、萬般の事變に處する指南針である。

陽明が良知の二字は世人の熟知する孟子の

人の學ばずして能くする所の者は其良能なり、慮らずして知る所の者は其良知なり。孩提の童も其親を愛するを知らざるは無し、其長ずるに及んでや其長を敬するを知らざるは無し、親を親むには仁なり、長を敬するは義なり。他なし之を天下に達するなり。

とあるに基づいてゐる。而して致良知の三字は大學の致知を致良知と解したるより出てたのである。

陽明は良知の説を以て孔孟の心印を得たるものと思惟し、武宗皇帝の正徳十六年彼が五十歳の時より致良知の三字を掲げたるも其悟入は三十七歳龍場謫居の日にあるのである。されば彼が良知説に對する確信は極めて深大にして往聖に繼ぎ來學を開く。

と稱し、

眞に是れ箇の千古聖傳の秘、這裏に見到せば百世以て聖人を俟て惑はず。

と公言し、

今我が良知の二字は實に千古聖賢相傳ふる一點の滴骨血なり。

といひ、

致知の二字は乃ち是れ孔門の正法眼藏なり。此に於て見得して眞的ならば直に是れ

諸を天地に建て悖らず、諸を鬼神に質して疑ひなく、諸を三王に考へて謬らず、百世以て聖人を俟て惑はず、此を知る者は方に之を道を知ると謂ふ。此を得る者は方に之を有徳と謂ふ。此に異て學ぶ即ち之を異端と謂ふ。此を離れて説く即ち之を邪説と謂ふ。此に迷うて行ふ即ち之を冥行と謂ふ。千魔萬怪ありて前に眩瞽變幻すと雖も自ら之に觸れて碎け、之を迎へて解くべし。太陽一たび出て鬼魅魍魎自ら其形を逃る所なきが如し。

と大言して憚らざるは彼が金剛不壞の大確信を見るに足る。

五十六、陽明の良知と禪の自性清淨心。然れば良知とは如何なるものぞと言ふに、孟子の

是非の心は人皆これあり。

といふ是非の心にして、良心と同意に解せらる。孟子に

人に存する者と雖も豈仁義の心なからんや、其良心を放つ所以の者亦猶は斧斤の木

に於けるが如し、且々にして之を伐らば以て美を爲すべけんや。

とある良心で、仁義の心、人に忍びざる心、など孟子はいうてゐる。即ち學ばず教へられずして自爲に是非善惡を辨ずる神の作用を良知と謂ふたのである。

夫れ心の本體は即ち天理なり、天理の昭明靈覺は所謂良知なり、君子の戒愼恐懼は惟だ其昭明靈覺なる者の或は昏昧放逸にして非僻邪妄に流れて其本體の正を失ふあるを恐るゝのみ。

と明言し、

良知は只是れ是非の心、是非は只是れ箇の好惡、只好惡就ち是非を盡し了るといひ、

心の虚靈明覺は即ち所謂本然の良知なり。

と説くに徴すれば陽明の良知とは吾人が精神の本體、靈々昭々として晃耀たる太陽の如く廓然無私なる大虚の如く、玲瓏透明なる珠玉の如きものである。されば宗密禪師の

一切の有情皆本覺の真心あり。無始より已來、常住清淨にして昭々として味まらず、了々として常に知る。

といふ所の自性清淨心なると火を見るより明かである。六祖大師が

菩薩戒經に云く我本性も自ら清淨なりと、善知識、念々の中に於て自ら本性清淨を見、自修自行して自ら佛道を成ぜよ、

と言ひ、天桂禪師の

鏡に喩ふるも亦爾り、敢て鏡を取るには非ず。其靈明にして而して能く物を照すを資て以て人々本具圓明の心本來物なくして善く萬法に應じ胡漢相現じ、照鑑差ふとなく外より入るにあらず内より出るに非ずして分毫も錯まらず、移し現じ將ち來るに比喩するのみ。

と云ふに見ば王學と禪學とは同一心體を説けるとが知れよう。

加旃、陽明が良知の説は

業既に程明道によりて提舉せられ、

天に在ては命たり、義に在ては理たり、人に在ては性たり、身に主としては心たり、其實は一なり。心は本善なり、思慮に發すれば則ち善あり不善あり。

と云ひ、また

蓋し良知良能もと喪失せず。

といひ、また

良知良能皆由る所なし、乃ち天に出づ、人に繫はらず。

といふて心體の本善なるとは道破せられてある。然れば陽明は

孔孟既に歿してより此學傳を失ふと幾んど千百年、天の靈に頼て偶々復た見る、あり、誠に千古の一快。

と自稱し、

天の靈に頼て偶々良知の學に悟るあり。

と誇耀するが如きも良知は決して新しい學説ではない、禪の自性清淨心、程子の天理、象山の本心が改頭換面し來つたに外ならぬ。

五十七、王禪の同轍。良知は既に心の靈明昭覺なるもの、故に陽明は之を大虛に喩へまた之を明鏡に譬へて、

良知は常に覺り、常に照す、常に照せば則ち明鏡の懸りて物の來る者、自ら其妍媸を遁るゝ能はざるが如し。

良知は昭明靈覺、圓融洞徹、廓然として大虛と體を同うす。

といふてゐる。而して良知は自然に是を是とし非を非として錯るとは莫い。

良知の體は洞然明白にして自然に是を是とし非を非とす。

といふは三祖大師の信心銘に

但憎愛なければ洞然として明白なり。

の格言に似たるを見る。

良知は心の本體、即ち前に謂ふ所の恒照なる者なり。心の本體は起なく不起なく、妄念發すと雖も、而も良知未だ嘗て在らずんばあらず。但だ人存するを知らざれば則ち時あつては或は放つのみ。昏塞の極と雖も良知未だ嘗て明かならずんばあらず。と説くは六祖大師の

人の性は本淨し、妄念に由るが故に眞如を蓋覆す、但だ妄想なければ性自ら清淨なり。

といひ、また

智は日の如く慧は月の如し、智慧常に明かなれども外に於て境に著すれば妄念の浮雲に蓋覆せられて自性明朗なるとを得ず。若し善知識に遇ふて眞正の法を聞けば自ら迷妄を除て内外明徹にして自性の中に於て萬法皆現す。

といふに異る所はない。陽明は良知の作用を論じて

知は是れ心の本體、心自然に知を會す。父を見ては自然に孝を知り、兄を見ては自

然に弟を知り、孺子の井に入るを見ては自然に惻隱を知る、此は便ち是れ良知なり外に求むるを假らず。若し良知の發する更に私意の障礙なければ即ち所謂惻隱の心を充たせば仁勝て用ゆべからず。然れども常人に在ては私意の障礙なき能はず、須く致知格物の功を用ゐて私に勝て理に復るべき所以なり。

といひ、又

童子の先生長者を畏るゝを知るが如き此は亦是れ他の良知の處。故に嬉戯の中と雖も先生長者を見了れば便ち揖を作して恭敬し去る、是れ他能く格物し以て師長を敬するの良知を致し了る。

といひて良知は自然に是非を鑑照する明德なるを主張してゐる。

果して然れば王學に所謂良知は禪の所謂自性、本心にして、王學に所謂私意、私欲は禪に所謂妄念、迷想である。前者は明鏡止水に譬へられ後者は塵垢泥沙に喩へらる、又前者は大虛日月に比せられ後者は浮雲烟霧に較べらるる所、古今同一轍である。故に陽

明は孔孟の正傳を得たりと言はんよりは佛祖の要機を獲得し、少林の心印を得たりと謂ふが適評であらうと思ふ。

五十八、**良知と佛性の普汎**。陽明の説に由れば良知は極めて普汎なるもの、萬人の齊しく具ふる所である。盜賊と雖も良知を備へざるはない。

良知の人にある……泯滅すること能はず、盜賊と雖も亦自ら盜を爲すべからざるを知る、他は賊を做すと喚べば他還た忸怩たり……只是れ物欲遮蔽す。良心内に在て自ら失ふを會せず、雲の日を蔽ふが如し、日何ぞ失ひ了らん。

洵に陽明の言ふが如く、如何なる惡漢も是非の心なき者はない、但誘惑に勝つ能はず、私心を制する能はざるが爲に惡を爲すのである。然れば則ち良知は人に由りて淺深厚薄があるのではない。故に

孟子云く夫れ道は大路の若く然り、豈知り難からんや、人の由らざるを病むのみ。

良知良能は愚夫愚婦と聖人と同じ、但惟だ聖人は能く其良知を致し、愚夫愚婦は致

す能はず、此に聖愚の由て分るゝ所なり。節目時變、聖人夫れ豈知らざらん、但専ら此を以て學を爲さず。而して其所謂學は正に惟た其良知を致し以て此心の天理を精察し、後世の學と同じからざるのみ。

といひ、また

夫れ良知は即ち是れ道なり。良知の人心に在るは但だ聖賢のみならず、常人と雖も亦此の如くあらざる無し。

といひ、或は

蓋し良知の人心に在る、萬古に亘り、宇宙に塞がり而して同じからざるなし。

といひ、

是非の心は慮らずして知り、學ばずして能す、所謂良知なり。良知の人心にある聖愚の間て無し。天下古今の同じき所なり。

又

性は善ならざるなし、故に知は良からざる無し。良知は即ち是れ未發の中、即是れ廓然大公、寂然不動の本體、人々の同く具する所の者なり。但だ物欲に昏蔽せられざる能はず、故に須く學び以て其昏蔽を去るべし。然れども良知の本體に於ては初めより毫末も加損あるべからず。

といひ、

良知は原聖人と一般なり、自己の良知を體認し得て明白ならば聖人の氣象は聖人に在らずして我に在り。

といふが如きは禪に

一切衆生大小異りと雖も其心全く差別なし。器を以て水を盛るに方圓大小長短の器に隨ひ、衆色に順ずるなり、或は月の光、壁のひまより照す光は小なり、隙の大小に隨ひて光も大小あり。水上に浮べる月、水の大小に隨て影差別あり。自他心平等なること是を以て知るべし。

と論じ、

愚人と智人と佛性本と差別なし、只迷悟同じからざるに縁る、所以に愚あり智あり。と説き、

悟らざれば即ち佛是れ衆生、一念悟る時は衆生是れ佛……何ぞ自己の心より頓に眞如の本性を見ざる……若し自心を知れば見性して佛道を成ず。

といふに對照せば陽明の良知は禪の佛性にして、陽明の聖賢は禪の佛菩薩、陽明の衆人は禪の一切衆生、陽明の物欲は禪の煩惱妄想なると論ずる迄もない。然れば良知の普汎にして賢不肖の差別なきは佛性の普遍にして一切衆生に通ぜる無きと同意義である。

五十九、良知の體段。良知は吾人の精神全體に對して如何なる關係を有するか、思ふに陽明の意は良知は精神現象の全部にはあらずして精神の主體と爲り、根蒂と爲り、靈源と爲りて精神現象の奥底に横る作用である。

故に

人孰か根なからん、良知は即ち是れ天植の靈根なり。

と、便ち知る、良知は精神の靈根にして枝末ではない。是れ一。

心の本體は天理なり、天理の昭明靈覺は所謂良知なり。

と、便ち知る、良知は心の本體の靈昭たるもので暗昧なる作用ではない。是れ二。

夫れ良知は即ち是れ道なり。

と、乃ち知る、良知は人心の正道にして放僻邪侈の病なきものである。是れ三。

良知の人心に在る萬古一日の如し。

と、乃ち知る、良知は不變不易にして時處に應じて變化するものでない。是れ四。

良知は是れ未發の中、即ち是れ廓然大公、寂然不動の本體。

と、便ち知る、良知は喜怒哀樂の情の未だ發せざる中庸にして虛廓玲瓏、大公至正、靜定不動のもので、愛憎苦樂の情感ではない。是れ五。

心の本體は即ち是れ天理なり、天理は只是れ一箇、……天理は原自ら寂然不動。と、便ち知る、良知は天理にして人欲ではない。是れ六。道心とは良知の謂ひなり。

と、便ち知る、良知は道心にして人心ではない。是れ七。道は即ち是れ良知、良知原と是れ完々全々。

と、便ち知る、良知は本來完全にして漸次發達するものでない。是れ八。是に由に之を觀れば陽明は吾人の精神を大別して二段と爲し、本體——枝末、天理——

人欲、昭覺——暗迷、道心——人心、中和——過不及、不變——變易、完全——不完全とし、前者を以て良知と名つけたのである。這は禪に吾人の精神を大別して悟心——迷心、真心——妄心、靈覺——無明等とするに異らぬと思ふ。陽明が良知を詠じたる詩に

箇々人々有仲尼

自將聞見苦遮迷

而今指與眞頭面

只是良知更莫疑

問君何事日憧々

煩惱場中錯用功

莫道聖門無口訣

良知兩字是參同

人々自有定盤針

萬化根源總在心

卻笑從前顛倒見

枝々葉々外頭尋

無聲無臭獨知時

此是乾坤萬有基

拋却自家無盡藏

沿門持鉢效貧兒

良知即是獨知時

此知之外更無知

誰人^カ不^レ有^レ良知^ニ在^ニ

知^ニ得^ル良知^ヲ 卻^テ是誰^ニ

知^ニ得^ル良知^ヲ 卻^テ是誰^ニ
若^ク將^テ痛癢^ヲ從^テ人^ニ問^フ

自家^ノ痛癢^ヲ自家^ニ知^ル
痛癢^何須^レ更^ニ問^フ爲^ス

とあるが、箇々人々仲尼ありといふは禪に人々具足、箇々圓成といひ、人々盡く佛性の在るありといふに同じく、萬化の根源總て心にありとは禪に心生ずれば種々の法生ずと言ふに同じく、自家の無盡藏を抛却して門に沿ひ鉢を持して貧兒に效ふといふは禪家自己の寶藏を抛却して他國の塵境に去來すといふに同じく法華經の譬喩である。自家の痛癢自家に知るといふは禪に所謂冷暖自知と言ふに異らぬ。

六十、良知の包容。良知は先天固有のものにして其是非を辨じ、善に就き惡を避くるは火の熱し、風の動搖し、水の沾ほし、地の物を生ずると同一理で、花の紅なる、柳の緑りなる、鳥の飛ぶ、獸の走る、魚の泳ぐ、皆先天固有の性に出づると一般であ

る。故に良知なくば天は其蒼々の色を失ふべく、良知なくんば日は其晃々の光を喪ふべく、良知なくんば月は其玲瓏の美を亡ふべく、良知なくんば春は百物を生ずる能はず、良知なくんば秋は百穀を熟する能はず、良知なくんば花は爛漫たるに由なく、良知なくんば雪は繽紛たることなきに至る。故に王子は

草木瓦石に人的良知なくんば以て草木瓦石と爲るべからず。豈惟だ草木瓦石のみ然りとせんや、天地に人的良知なくんば亦天地と爲るべからず。

といふのである。良知は吾人の心内に備はれる天理の昭明靈覺なるものなれば獨り人心にのみ局するにあらずして萬有に共通なる普遍の性、遍通の理である。されば良知は性と謂ふも可、命と謂ふも可、理といふも可、天と謂ふも可、造化と謂ふも不可でない。故に

良知は造化的精靈なり、這些の精靈、天を生じ、地を生じ、鬼を成し、常を成す。皆此れより出づ。眞に是れ物と對なし。人若し他を復し得て完々にして少しも虧欠

なくんば自ら手の舞ひ足の蹈むを覺えず。知らず天地の間、更に何の樂か代るべきあらん。

といふのである。便ち良知は天地の母、萬有の父、宇宙の本體にして、造化の樞紐なれば太極とも謂ふべく、眞如とも法性とも謂ふべきである。斯くして陽明より見れば良知も、理も、命も、天も、性も、眞如も、法性も、皆一物の異名たるに過ぎぬ。されば

天に先ちて天違はず、天は即ち良知なり。天に後れて天の時を奉ず、良知は天なり。と明言してゐる。

良知は天なり命なり理なりと謂ふも凝然たる死物ではない、大活動なる生命である、故に

先生曰く、亦是れ天地間の活潑々地此理に非る無し。便ち是れ吾が良知的流行して息まず。良知を致すは便ち是れ必ず事あるの工夫、此理惟だ離るべからざるのみに非

ず、實に得て離れざるなり。往くとして道に非る無く、往くとして工夫に非る無し。

良知の流行は一瞬時も停る時はない。

天道の運は一息の或は停ると無し。吾心の良知の運も亦一息の或は停ると無し、良知即ち天道なれば之を亦と謂ふは即ち猶ほ之を二とするが如し。

といふのである。更に良知の宇宙に充塞流行するを説いて

問て曰く此知恐くは是れ方體なき的、最も捉摸し難し。先生曰く良知は即ち是れ易、其道たるや、屢遷り變動して居らず、六虚に周流して上下常なく、剛柔相易へて典要を爲すべからず、惟だ變の適く所、此知如何ぞ捉摸し得ん。見得透する時は便ち是れ聖人なり。

と云うてある。是の如く廣大無邊なる良知なれば禪に所謂心性の廣大なると殆んど同様で、榮西禪師の

大なる哉心や、天の高きは極むべからず、而るに心は天の上に出づ。地の厚きは測

るべからず、而るに心は地の下に出づ。日月の光は踰ゆべからず、而るに心は日月光明の表に出づ。大千沙界は窮むべからず、而るに心は大千沙界の外に出づ。其れ大虚か、其れ元氣か、心は大虚を包て元氣を孕む者なり。天地我を待て覆載し、日月我を待て運行し、四時我を待て變化し、萬物我を待て發生す。大なる哉心や。吾れ已むとを得ずして強て之を名けて是を最上乘と名け、亦第一義と名け、亦般若實相と名け、亦一眞法界と名け、亦無上菩提と名け、亦楞嚴三昧と名け、亦正法眼藏と名け、亦涅槃妙心と名く。

と説くに對照せば、陽明の所謂良知は榮西禪師の心又は我と同じく、陽明の所謂天命、理、道の文字は禪師の最上乘、無上菩提、正法眼藏等の名目に相當するを見るであらう。

陽明の良知は萬善を包容して漏す所は無い、されば

夫れ唯だ有道の士、眞に以て其良知の昭明靈覺、圓融洞徹、大虚と體を同うするを

見るあり。大虚の中何物かあらざらん。一物も能く大虚の障碍を爲す無し、本自ら聰明睿知、本自ら寛裕溫柔、本自ら發強剛毅、本自ら齊莊中和文理密察、本自ら溥博淵泉、而して時に之を出す。本富貴の慕ふべき無く、本貧賤の憂ふべきなく、本得喪の欣感すべく、愛憎の取捨すべきなし。蓋し吾の耳にして良知に非れば則ち以て聽く能はず。又何ぞ聰耳あらん。目にして良知に非れば則ち以て視る能はず、又何ぞ明あらん。心にして良知に非れば則ち以て思と覺とをなす能はず、又何ぞ睿知あらんや。然れば則ち又何ぞ寛裕溫柔あらんや。又何ぞ發強剛毅あらんや。又何ぞ齊莊中和、又何ぞ文理密察あらんや。又何ぞ溥博淵泉、而して時に之を出すあらんや。故に凡そ富貴を慕ひ、貧賤を憂ひ、欣感得喪、愛憎取捨の類、皆以て吾が聰明睿知の體を蔽ひ、而して吾が淵泉時出の用を窒くに足る。此の如き者は明目の中、之を翳するに塵沙を以てし、聰耳の中之を塞くに木楔を以てするが如し、其疾痛鬱逆、將に必ず速かに之を去りて快と爲さんとす何ぞ能く時刻に忍ばんや。故に凡そ

有道の士、其富貴を慕ひ、貧賤を憂ひ、欣感得喪、取捨愛憎に於けるや、目中の塵を洗ひ、耳中の楔を抜くが若し。其富貴貧賤得喪愛憎の相値ふに於ける、飄風浮靄の太虚に往來變化して太虚の體、固より常に廓然として碍げなきが若し。

と言つてゐる。されば良知は虚廓洞徹にして太虚の萬象を包容して餘りあるが如く萬善齊しく具有して寛裕溫柔の徳あり、聰明睿知の徳あり、齊莊中和の徳あり、文理密察の徳あり、發強剛毅の徳あり、溥博淵泉の徳あり、萬徳圓滿の體である。开は提婆尊者の

無相三昧は形満月の如く、佛性の義は廓然虚明。

と曰ひ、明教大師が

廣大靈明は道より至れるは莫く、神徳妙用は心より至れるは莫し。

と云ひ、

夫れ心と道と豈二ならんや……心の大なる至れり。幽は鬼神に過ぎ、明は日月に

過ぎ、博大にして天地を包み、精微にして隣虚を貫く。

といひ、

心は聰明睿知の源なり……聖人は人の自ら其心を信ぜんを欲する所以なり。其心を信じて之を正しくする時は則ち誠の常たり、誠の善たり、誠の孝たり、誠の忠たり、誠の仁たり、誠の慈たり、誠の和たり、誠の順たり、誠の明たり。誠に明かなれば則ち天地を感じしめ、鬼神を撼かし、死生變化を更て獨り得。是れ直ち天地を感じしめ鬼神を動かすのみにあらず、將た又聖人の大道を致さんとする者なり。

と云ひ、黄檗和尚の

佛と衆生と一心異なるなし、猶ほ虚空の雜なく壞なきが如し。大日輪の四天下を照すが如し。日昇の時、明天下に徧くして虚空は未だ曾て明かならず、日没の時、暗天下に徧くして虚空未だ暗からず。明暗の境、自ら相凌奪するも虚空の性は廓然として變ぜず。佛及び衆生の心も亦此の如し。

といふに見ば禪者は陽明に先ちて心を以て太虚の靈廓なるに比し、聰明睿知孝忠仁慈等萬善皆其中に具はるを説くことが知れやう。

六十一、行爲の準則。社會の事情たる複雑し、錯綜し紛糾して到底一準ならしむることはできぬ。従つて甲の是とする所にして乙は之を非とするあり、丙の可とする所にして丁の不可とするもある。されど紛淆錯綜せる社會の實務に當りて、快刀亂麻を斷つが如く吾人に去就を決せしむる者がある。开は吾人の良知、良心に外ならぬ。世には良心に此の如き明斷ありや否やを疑ふ者も少くないが吾人の道徳的行爲は皆自ら正善なりと確信したる行爲で、換言せば良知の指導に従ふに外ならぬ。古への野蠻人が老いたる親を殺し、病める同胞を捨てたのは彼等の良知が現代の吾人のそれの如く明確ならざるの致す所で、彼等は親を殺し、同胞を捨つるを以て不義不仁とは思はなかつたのである。現代に於ても甲の道義とする所にして乙の之を悖徳とするとは往々ある。开は甲乙各、教育の程度を異にし、智力の發達外圍の境遇、修養の淺深、習慣風俗宗教

等に影響せられて良心の判斷も自然に遲速銳鈍の別を生ずるに由る。換言せば良知を致すの工夫に於て熟したる者と未熟なる者とあるに由て良心の判斷に差別を生ずるのである。

然れども斯く良知の判斷に差別ありと雖も良知を以て頼むに足らぬと思ふは大なる誤りである。何となれば現代の倫理學者の信ずる如く幾多の研究材料を聚めて倫理の標準を發見し得たりとするも、這是當該學者が倫理的行爲の標準と信じたる者に依憑して善惡を判別して行爲を發動すれば彼の良心に満足するといふに外ならぬ。

又倫理學者は道徳家ではなく、單に古今の倫理學說を比較研究したり、世界の倫理的事項を考究して一個の學說なるものを立つるに止まりて、自ら之を實踐する者でない場合もある。此場合に於ては當該學者は何に依て行動するかと言へば依然として自家の良知が満足するやう進退する外に致方は無いのであらう。

果して然れば快樂主義の人にあれ、理性主義の人にあれ、巧利主義の人にあれ、利己

主義の人にあれ、一般生々主義の人にあれ、實際に道德的行爲をなすに當りては直接に自己心上に於て正善なるを確證し、良知の指導に一任して、毫も私欲妄念の障礙なきを要する。是を以て陽明は良知を以て吾人が人生なる霧海の南針としたのである。孔子は知らずして作すと無し。顔子不善あらば未だ嘗て知らずんばならず。此は是れ聖學の眞血脈路なり。

孔子は事の是非曲直を知らずして妄りに作すとは無い、必ず良知の鏡に照して妍媸を辨じて之を行ふ、故に心の欲する所に從て矩を踰えぬやうになつた。顔回は不善あらば必ず之を知りて物欲の闇雲の爲に良知の天日を覆はれなかつた、是を以て亞聖の徳を成したのである。陽明は良知を以て百行の繩墨とし

是非の兩字は是れ箇の大規矩。

と曰ひ、良知を評して

佛家の心印を説くが如く相似たり、眞に是れ箇の試金石、指南針。

と云ひ、良知の太陽にして光輝を發する時は邪惡は雲の如く消ゆるとし、

人若し這の良知の訣竅を知らば他の多少の邪思枉念に隨て、這裏一たび覺むれば都て自ら消融す、眞箇是れ靈丹一粒、鐵を點じて金と成す。

と説いた。又彼は良知を以て導師に比し

這の良知は還た是れ徧的の明師。

といひ、良知を權衡に喩へて

自己の上に就て眞切に體認せずんば無星の稱を以て輕重を權り、未開の鏡を以て妍媸を照すが如し。

といひ、良知を百行の準則なりとして

良知は是れ爾が自家底の準則。

というてゐる。且つ良知に向つて行動する時は天を怨みず人を尤めず、精神の安立を得て、解脱安樂の妙境に入るといふのである。されば

人若し他(良知)の完々全々に復り得て少虧欠なくんば自ら手の舞ひ足の蹈むを覺えず。知らず天地の間、更に何の樂あつて代るべき。と曰ひ、また

會稽は素と山水の區と號す。深林長谷歩みに信せて皆是なり。寒暑晦明、時として宜しからざる無し。完居飽食、塵囂擾すなし。良朋四集し、道義日に新たなり。優なる哉、游なる哉、天地の間、寧ぞ復た是れより樂しき者あらんや。孔子曰く天を怨みず人を尤めず下學して上達すと、僕二三の同志と方に請ふ斯語を事とせんとす。というた。以て陽明が安心立命を想見するとかてきやう。此に到りては陽明の學は惟だ倫理を説くのみではない良知を以て天地の終始を盡し、人生の眞義を闡明して天人合一の安心を得るに竟る。是を以て王心齋が樂學歌に

人心本自樂 自以私欲縛 私欲一崩時
良知還自覺 一覺便消除 人心依舊樂

樂是樂此學

學是學此樂

不樂不是學

樂便然後學

學便然後樂

樂是學

學是學

嗚呼天下之樂何如此學

天下之學何如此樂

とあるは實に斯道の樂みを陳べ盡して餘蘊がない。

六十二、致良知とは何ぞや。良知とは宇宙に充塞する靈々昭々たる天理の人心に宿れるもの、詳言せば宇宙には劃一齊整、萬古不變の法則あり、僞らず飾らず天真獨露の誠實あり、錯らず失はず内外透徹の靈智あり、相依り相助くる同情同感の仁愛あり。洵に宇宙は一大靈妙の體である。而して此宇宙の靈智は陽明の所謂天理で、靈智の人心に感應したものが即ち是非を辨ずる良知である。故に良知の人心に於けるは大小精粗の別はない、凡聖迷悟均しく純乎たる良知を具へてゐる。陽明は此良知を稱して聖と謂ふこと恰も禪に心性を呼んで佛と謂ふが如くである。乃ち

人の胸中各、箇の聖人あり、只自ら信じ及ばずして都て自ら埋倒し了る。

と云ひ、

王汝止出遊して歸る、先生問て曰く遊んで何をか見るや。對へて曰く滿街の人都是れ聖人なるを見る。先生曰く備ち滿街の人は是れ聖人なるを見る、滿街の人備ちが是れ聖人なるを見るに到ることたらん。又一日董羅石出遊して歸り先生に見えて曰く今日一異事を見る。先生曰く何の異ぞ。對へて曰く滿街の人都是れ聖人なるを見る。先生曰く是れ亦常事のみ、何ぞ異とするに足らんや。

というて、人々箇々聖人の良知あるを示した。這は華嚴に

奇なる哉、奇なる哉、一切の衆生皆如來の智慧徳相を具す。

と曰ひ、禪者が

我手は佛手と何を異らん。

と云ひ、又

無位の真人、汝等の面門に出入す。

といふに異なる所はない。良知は之を大にしては六合に充ち之を小にしては卷いて懐ろに入るのて、

此良知の妙用方體なく窮盡なき所以なり。大を語れば天下能く載する莫く、小を語れば天下能く破る莫し。

と陽明のいひたるは、即ち禪に

細には無間に入り、大には方處を絶す

と説くに同じいのである。

果して然れば人に凡聖あり、智愚、賢不肖の別るゝ所以は如何といふに良知を致すと致さざるとに由るのである。良知を致すとは王子が大學の致知の二字を致良知と解釋して程子が

知は吾の固より有する所然れども致さざれば之を得る能はず。

の語に基づきて王學の骨子としたので、

致良知は是れ學問の大頭腦、是れ聖人人を教ゆるの第一義といふ、又

致知の二字は眞に是れ箇の千古聖傳の秘。

と稱してある。然れば良知を致すとは如何なるとかといふに

只是れ知を致す。曰く如何んが致す。曰く爾ち那の一點の良知、是れ爾ちが自家の準則、爾ちが意念の著く處、他、是は便ち是と知り、非は便ち非と知る更に他を瞞ずると一些も得ず。爾ち只他を欺くを要せず、實々落々、他に依著して做し去らば善便ち存し惡便ち去らん。他の這裏何等の穩當快樂ぞ。

とあつて、自己の良心を欺かず瞞せず、之を準則として各々の行爲を發するが致良知である。詳説せば

心の發動には不善なきと能はず、故に須く此處に就て力を著くべし、便ち是れ意を誠にするに在り。一念發して善を好む上に在るが如きは便ち實々落々に善を好み去

り、一念發して惡を惡む上に在れば便ち實々落々に惡を惡み去る。意の發する所既に誠ならざる無ければ即ち其本體如何ぞ正しからざるあらんや。工夫誠意に到て始めて落著の處あり、然るに誠意の本は又知を致すに在り、所謂人知らずと雖も己れ獨り知る所の者、此れ正に是れ吾が心の良知の處。然るに善を知り得て卻て這箇の良知に依て便ち做し去らず、不善を知り得て卻て這箇の良知に依て便ち做さずして去らざれば則ち這箇の良知便ち遮蔽したる、是れ知を致す能はざるなり。吾が心の良知既に擴充到底する能はざれば則ち善を好むを知ると雖も著實に好み了るこゝと能はず、惡を惡むを知ると雖も著實に惡み了ると能はず。然れども亦是れ懸空的に知を致すにあらず、知を致すは事實上に在て格す、意、善を爲すに在るが如きは便ち這件の事上に就て爲し去り、意、惡を去るに在れば便ち這件の事上に就て爲さずし去る。惡を去るは固より是れ不正を格し以て正に歸す。善を爲すは則ち不善を正し了る、亦是れ不正を格し以て正に歸す。此の如くなれば則ち吾心の良知は

私欲の蔽なし。

故に致良知とは吾人が本心の寶鑑を刮磨し、私欲の塵垢を去ることとて、神秀大師の所謂

時々に勤めて拂拭せよ、塵埃を惹かしむる莫れ。
と云はれたに異らぬ。

六十三、致良知と北漸。致良知の工夫に熟するあり未だ熟せざるあり、是に於て乎、聖愚天淵の別を生じ、生佛雲泥の差を見るのである。されば愚不肖は磨かざる璞の如く賢聖は磨ける玉の如くて其本性は元來同一なる發光體である。更に譬へば

聖人の知は青天の日の如く、賢人は浮雲の天日の如く、愚人は陰霾の天日の如し。とあつて、良知なる天日の光體は晴天も、曇天も、風雨陰霾の日も同一であるが私欲の障蔽の多少に依りて明暗の別がある。昏黒の夜半と雖も多少黒白の辨ずるを得る如く、如何なる愚不肖と雖も是非の心はある。故に人一たびすれば己れ之を百たびし、

人十びすれば己れ之を千たびする時は愚不肖者も聖域に入るとができる。

人皆以て堯舜と爲るべし。

と謂ふ所以はこゝにある。

是を以て生知安行の人生は其致知に於ける秦鏡を發くが如く、學知利行の人は其致知に於ける古鏡を磨くが如く、困知勉行の人は其致知に於ける生鐵を鑄るが如くである。されば陽明が修行は一超直入如來地の頓成を欣ばずして

學者聖人に超入するの理なし

といひ、人々其分に應じて漸修漸進すべしと教へる。

我輩の致知は只是れ各分限の及ぶ所に隨ふ。今日良知見在此の如くなれば只今日知る所に隨て擴充到底し、明日亦開悟あらば便ち明日知る所に從て擴充到底す。

といふより見れば彼は六祖大師が南頓の宗風よりは寧ろ神秀大師が北漸の衣鉢を襲ぐに意あるをしるに足る。

想ふに神秀大師が心を明鏡に譬へて塵埃を惹かしむる莫れと謂ひたるは工夫の最も親切實落の所で亘古亘今不朽の言である。而して六祖大師の本來無一物、何れの處にか塵埃を惹かんと謂うたのは心地の虚廓靈昭の所を指して謂うたので、神秀と六祖と矛盾したる論を立てたのではない。陽明の語にて言はゞ本來無一物、何れの處にか塵埃を惹かんとは

天理の人心にあるは古に亘りて終結あるなし。

良知は原と是れ精々明々。

天理の昭明靈覺は所謂良知なり。

とあるに同じく、本來虚廓玲瓏の體であるから塵埃の存する筈はない。然しながら如何なる寶鏡も拂拭の功を虧く時は塵垢の障蔽を免れぬ、故に陽明は

如今念々良知を致して此障礙窒塞を將て一齊に去り盡せば則ち本體已に復す。

というたのである。斯く陽明の工夫は一物一物の上に就て漸次に良知を致すと雖も、

其心證する所の良知は宇宙を該羅する天理と異なる所はない。故に漸修漸進して心證したる個々の致知を室内の空に喩へ、宇宙に充塞する天理を大虚の空に譬へてある。

只許多の房子牆壁の爲に遮蔽せられて天の全體を見ず、若し房子牆壁を撤去すれば總て是れ一箇の天なり。眼前の天は是れ昭々の天、外面又是れ昭々の天にあらずと道ふべからず。此に于て便ち見る一節の知は即ち全體の知、全體の知は即ち一節の知にして、總て是れ一箇の本體なるを。

陽明は頓悟漸修並び用ゐて學問の要とした。錢德洪は漸修の工夫を等閑にするを歎じて、

師既に致して音容日に遠し。吾黨各己見を以て説を立て、學者稍本體を見れば即ち好んで徑超頓悟の説を爲して復た身を省み己れに克つの功なし。一たび本體を見て超聖以て足を跂つべしと謂ひ、師門の誠意格物爲善去惡の旨を視て皆相鄙めて以て第二義と爲し、事爲を簡略し、言行を顧る無く、甚しき者は禮教を蕩滅し。猶

ほ自ら以て聖門の最上乘を得たりと爲す。噫亦已に過てり。

と痛嘆してゐる。禪に

理は頓に悟るべくも事は漸に修すべし。

てふ語に竝せ鑑みば、漸修の工夫を忘るゝものは王禪二學の大罪人である。

六十四、靜的工夫と禪の入定。王子が爲學の工夫は萬里一條鐵にして二も無く三も無い、唯だ良知を致すの一乘法あるのみである。併し致知の工夫を強ひて分類したならば動的工夫と靜的工夫の二となる。靜的工夫とは宋儒の靜坐澄心、禪の坐禪觀法に髣髴たるもの、切磋砥礪して外馳の心を防ぎ、又は明窓淨几に對して古聖先賢と語るのである。次に動的工夫とは事上練磨と稱して社會百般の實務に當りて事々物々に就て自己の良知を致すのである。王子が自ら靜的工夫を用ゐたるは徐愛が

先生夷に居る三載、困に處し靜を養ひ、精一の功、固より已に聖域に超入す。

といひたる如く龍場謫居の時、石槨の中に入れて日夜に靜坐し遂に省發したのて昭かて

ある。又動的工夫を用ゐたるは彼が年譜四十七歳の條にある如く三涇の巨賊を剗定せんとて兵馬倥傯の際に方りて

山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し、區々が鼠竊を剪除するは異とするに足らず、若し諸賢にして心腹の寇を掃蕩して廓清平定の功を收めば此れ誠に大丈夫不世出の偉績たり。

と門人に告げ、又四十八歳の條に大賊宸濠を破りて偉勳を奏したる時の如き、

士友に對して學を論じて輟まず、諜者走りて前軍の利を失へるを報ず、坐中皆怖るゝ色あり……先生神色自若たり。頃らくして諜者走りて賊兵大に潰ゆと報ず、坐中喜べる色あり……先生神色自若たり。とあるにても知れよう。

靜的工夫は何の爲にするかといふに榮辱得喪等の爲に胸襟の寧靜を破られ、見聞聲色に心を奪はれて己れに迷ふて物を逐ふの病を治する爲である。されば

日間の工夫、紛擾を覺ゆれば靜坐せよ。
と教へ、

初學の時は心猿意馬拴縛し定らず、其思慮する所多くは是れ人欲一邊なり、故に且く之をして靜坐せしめ思慮を息めしむ。

と曰ひ、思慮の紛擾を靜定する方便としたのである。又聲色に心を奪るゝを戒めて眼の視んと要する時、心便ち色上に逐在し、耳の聽かんと要する時、心便ち聲上に逐在す。

と曰ふて其病痛なるを示した。蓋し王子が所謂物を逐ふの語は朱子が己れを忘れて物を逐ひ、外を貪り内を虚くするの語と同じく楞嚴經にありて禪門の常用語である。禪には聲色の繫縛を離るるといひ、王學には物を逐て心を喪ふの病を去るといふ、其旨とする所は一つである。王子が

吾輩功を用ゆるは、唯日に減ずるを求めて日に増すを求めず。

と道ひたるは日に人欲を滅して天理に復するの意で、老子に道を爲むる者は日に損す、日に損して又損すとあり、禪に煩惱を斷じて菩提を證するとあるを合併して用ゐたのであらう。

九川が靜坐して念慮を屏息せんとすれば愈擾亂を加ふ如何にすべきかと問た時、陽明は

念は如何ぞ息むべき、只正なるを要す。

といひ、無念の時あるべきとの問に對へて

先生曰く實に無念の時なし。

とある。又劉君亮が山中に在て靜坐せんとした時

汝若し外物を厭ふの心を以て之が靜を求め去らば、是れ反て一箇驕惰の氣を養成し了る。と誡め、又

靜坐の事は坐禪入定を欲するにあらず 放心を求むるの一段を補はんと欲す。

といひ、

姑く之に靜坐を教ふ……之を久うして漸く靜を喜び動を厭ひ流れて枯槁に入るの病あり。

といひ、

只箇の沈空守寂を做し得て一箇の癡騷漢を學び成す。

と道破して靜的工夫が沈空守寂の弊に流るゝを警戒し、又外物を厭ひ活動を忌むの病に箴砭を下したのである。

是を以て王學者の禪を解せざる者は往々懸空守寂、槁木死灰を以て禪と爲し、外物を厭ひ活動を忌むのが禪であると誤解する。开は禪に無念無想などの語あるより懸空にして思慮を閉息すると思ふたのであらう。六祖壇經に無念を説明して

何をか無念と名く、若し一切の法を見て心染著せざる是を無念と名く。用（無念の心用）即ち一切處に徧くして一切處に著せず、但だ本心を淨むれば六識をして六門

より出でしむるも六塵の中に於て染なく雜なく來去自在にして通用滯りなし、即ち是れ般若三昧、自在解脱なるを無念の行と名く。當に念をして絶せしむべきは即ち是れ法縛即ち邊見と名く。

とある。然れば無念とは吾人の本心が淨潔にして假令精神が色聲香味等の外物に觸るゝも之が爲に染汚せられずして自在なるをいふので、思慮を杜絶するは卻て無念ではなく法縛である。以て槁木死灰を以て禪に擬するの妄なるとが知れやう。

又外物をうて只管に遁世し去るを禪と誤解する人もある。されど禪の歌に

坐禪せば四條五條の橋の上

ゆき來の人を深山木に見て

とあつて動中靜を觀するをも究竟とはせずして更に

坐禪せば四條五條の橋の上

ゆき來の人を其儘に見て

と訂正したるに見ば彼等の誤解は渙然として融消し去るであらう。

六十五、**動的工夫と禪の修行**。次に王子が爲學の工夫は事上磨練、即ち日常萬般の實務に當りて良知を致すを主意とする。故に一屬官が簿書訟獄の事が繁雜を極めて學を爲す能はずと言ひたる時、王子は簿書訟獄を離れて懸空に學を講ずべきにあらずと示し、官司ある者は官司の上に於て良知を致すが實學なる旨を説いた。抑も工夫の第一は志を立つるにある。志を立つるとは

箇の必ず聖人たるの心を立つるを要す、時々刻々、須く一棒一條痕、一擱一掌血なるべし。

必ず聖人たるの志とは禪にて謂はゞ成佛作祖の菩提心を發するので、吾人が進修向上の第一門頭である。

良知上に些子の別念を留め得て掛滯せば便ち必ず聖人たるの志に非ず。とあるから良知の純一なるのが聖人たるの志で、換言せば、

只念々天理を存するのを要す、即ち是れ志立つるなり。

とあるから、人欲を去つて天理を存するに外ならぬ。

人欲を去つて天理を存するには吾人の情を放縱ならしめてはならぬ。喜怒哀樂が發して節に當らねばならぬ。故に

須く平日常色を好み利を好み名を好む等の……私心を掃除蕩滌し……此心の全體廓然として純ら是れ天理なるべし。方に之を喜怒哀樂未發の中と謂ふ。

とある。されば喜怒等の情の發動に過不及あれば私心となる。畢竟するに

視聽言動より以て富貴貧賤患難死生に至るまで……其要は只中和を致するにある。

吾人の心情を擾動せしむるのは聲色貨利を最も甚しとする。故に陽明は

人の色を好むが如きは色鬼の迷はすなり、貨を好むは貨鬼の迷はすなり、怒るべからざる所を怒るは怒鬼の迷はすなり、懼るべからざるを懼るは懼鬼の迷はすなり。といひて、聲色貨利を鬼に譬へた。然れども聲色貨利が吾人を迷はすではない、吾人

の心が自ら迷ふのである。是を以て

只聲色貨利上に於て 能く良知を致し得ば……即ち聲色貨利の交りも天則流行に非るなし。

と曰ひ、佐藤一齋も、

外物も亦天地間の物なり、豈能く累を爲さんや、蓋し我自ら累するなり。と道うた。

動的工夫は事々物々に就て良知を致すといふも事々物々の上に心を掛滞せしむるのではない。千變萬化の事情に遭遇して心體の天理を失はぬをいふのである。

理に循へば即ち萬變は酬酢すと雖も未だ嘗て動かず。欲に従へば即ち稿心一念と雖も未だ嘗て静かならず。

故に工夫熟すれば便ち動静一枚となる。見聞言動を排遣して心の静定を求むるのでは決してない。

専ら良知を致すを以て事と爲せば……見聞酬酢千緒萬頭と雖も良知の發用流行に非る莫し。

此の如くなれば六合の間到處として快心の地ならざるは無い。是れ六祖大師の所謂一切處に於て行住坐臥、一直心を行す。

るのである。此心地に至らんには念々醒覺して省察克治の功を用ゐねばならぬ。省察克治とは自己の過ちを省察して私心を克治するのである。古人が

聖人は過ち多し、賢人は過ち少し愚人は過ちなし。蓋し過ちは學んで後に見ゆ、學ばざる者は冥行妄作して以て常と爲し、復た過ちを知らず。

と言ひたる如く蒙愚の人は冥行妄作して反省するを知らぬけれども、聖賢は常に省察して克己の工夫を怠らぬ。陽明は此工夫を説いて

常に猫の鼠を捕ふるが如く眼を一にして看著し、耳を一にして聽著し、纔かに一念の萌動するあらば即ち與に克ち去て斬釘截鐵、姑くも他の方便を容與すべからず。

というた。これ即ち戒慎恐懼の意で、猫の鼠を捕ふるの喩は宋朝以來禪者の常套語で、斬截釘鐵も禪錄に常に見る所の俗語である。要は念々省察し刻々警醒し、時々反觀して自己の私欲を克ち去るのである。這是禪に謂ふ所の廻光返照で、常惺々の工夫として緊要なる修行である。

王子が爲學の工夫は上述の如く動的工夫と靜的工夫の二種に分たるゝも、是れ亦禪の修行法より脱化したものであらう。靜的工夫は禪の

諸縁を放捨し萬事を休息して、善惡を思はず是非に管せず。

純ら精神を調攝するの法で、動的工夫は十二時中、喫茶喫飯、運水搬柴の間にも禪心を失はぬやうにする、所謂

行も亦禪、坐も亦禪、語默動靜體安然。

といふに異らぬ。朱子曰く

某、名寺中に畫く所、諸祖師の人物を見るに皆魁偉雄傑、其れ傑然として立つある

此の如く、其氣貌此の如くなれば則ち世の所謂富貴利達聲色貨利、如何ぞ此を籠絡し得て住めんや。

と、以て從上の祖師の造詣を想見すべきである。

第六章 王禪二學の性論

六十六、王學の性善と禪の本性清淨。吾人は既に前章に於て陽明が學問の骨髓たる良知の説を略叙し畢りたれば之より進んで彼が性に關する意見を述べて禪の性論との異同を明かにしやうと思ふ。古來支那の學者は種々なる性説を提唱して人をして適從する所を知らざらしむるものがある。孟子の性善説、荀子の性惡説、楊雄、司馬光の善惡混在説、蘇東坡、胡五峯の善惡共無説、王充の善惡變化説の如きが其主要なるものである。想ふに古への學者は性なる文字の定義を下さず、又善惡なる文字の意義をも定めずして汎爾に論を立つるが故に其江河を決したるが如き滔々たる幾千萬言の論議も、捉空捕影、要領を得るに苦しむ場合が多い。是を以て吾人は先づ王子が謂ふ所の性とは如何なる意義かを攻覈せねばならぬ。陽明の語に

心の本體は即ち是れ性なり、性は即ち是れ理なり。

とあれば性とは心の本體で其枝葉たる作用ではない。世人の所謂性なるものは人心自然の傾向を指す場合が多い、孟子か孺子の井に入らんとするを見て皆怵惕惻隱の心ありと道うて、仁の人心に固有なるを論じたのは人心は自然に此の如き傾向を有する者と信じたのである。同様に荀子が人生れて利を好むあり是れに順ふ故に爭奪生じて辭讓亡ぶ、生れて耳目の欲ありて聲色を好むあり是れに順ふ故に淫亂生じて禮義文理亡ぶと道うて之を以て人性の惡なる證驗としたのも人心は自然に此の如き傾向があると信じたに外ならぬ。故に孟荀二家の論は各、一邊に偏したる説で、必ず水掛論に了るべき運命を有してゐる。

王子の意は之に反して性の字に體の義を含ましむるは恰も禪に性の字を體の義に使用するに同様である。即ち禪には

心性、本性、佛性、法性、自性。

など熟字して皆體の義に用ゆるを常とする。王子は

心の體は性なり、性の原は天なり。

と言ふより見れば天にありては命、物にありては理、人にありては性、其名は異れども同一の理體を意味するのであらう。さればにや

性は一のみ、其形體より之を天と謂ひ、主宰や之を帝と謂ひ、流行や之を命と謂ひ、人に賦するや之を性と謂ひ、身に主たるや之を心と謂ふ。心の發するや父に遇うては便ち之を孝と謂ひ、君に遇うては便ち之を忠と謂ふ、此れより以往、名窮りなきに至る只一性のみに。

というた。果して然れば天として惡なるはなく、命として邪なるはなく、帝として正ならざるはなく、理として曲れるは無いと一般、性として善ならざるは莫いと推考せざるを得ぬ。故に

至善は性なり、性は元と一毫の惡なし。

と曰ひ、又

性に不善なし。

人の性は善なり。

というて孟子の説に賛同したのである。這是禪に所謂自性清淨心で、六祖大師の

我が本性元と自ら清淨なり。

といひ、明教大師の

大なる哉心や、變化に資り始めて清淨常若なり。

と云ひ、また

心と曰ひ道と曰ふは名のみ。中と曰ひ妙と曰ふは語のみ。名と語と異りと雖も至靈なるは一なり。

と言ひしに一如するを見る。

六十七、善惡の判別。心の本體にして至善ならば如何にして邪惡を生ずるや、これ大なる疑問である。孟子は性善を唱ふるも既に性善なりとせば如何にして邪曲は生ずる

か、これ孟子の對ふる能はざる所である。同様に起信論には一切の諸法は悉く眞如より緣起すと稱す、然らば何故に無明は生じたるか、是れ亦論主の應答に苦しむ所である。惻隱羞惡が人心の固有する所なりとせば好色貪利も人心の固有にはあらざるか、前者を固有とし後者を固有にあらざるとするは背理なる獨斷に外ならぬ。

人類の性情を分析するに大段二つに分たるゝを見る、一は社會的性情、他は個體的性情である。後者は軀殼的の個我保存を目的とせる生欲に根蒂し、前者は種族的社界我の生存を目的とせる生欲を淵源とする。されば後者は褊狹にして前者は廣溥、後者は私曲にして前者は公正、後者は利己的にして前者は利他的、後者は向下的にして前者は向上的である。例せば前者は孝悌忠信、仁義禮讓、人道博愛等と爲り後者は好色貪利、爭鬪酷虐、殺人放火、強盜騙欺等となる。然り而して苟も狂病、喪心、白痴ならざる以上、人類は必ず此等二種の性情を具へざるは無い。

是に於て乎、古へより性を論ずるもの、社會的性情に重きを置く時は性善説となり、

個人的性情に重きを置く時は性惡説となり、二者を軒輊せざる時は善惡混在説となり、

二者の竝進又は相殺に著眼する時は善惡共無説となる。陽明は此點に注目して

性に定體なし、論に定體なし、本體上より説く者あり、發用上より説く者あり、源頭上より説く者あり、流弊の處より説く者あり、總て之を言へば只だ是れ這箇の性但し見る所に淺深あるのみ、一邊を執定せば便ち是ならず。性の本體は原是れ善なく惡なし、發用上は原是れ以て善を爲すべく、以て不善を爲すべし、其流弊は是れ一定の善、一定の惡。譬へば眼の如し、喜ぶ時の眼あり、怒る時の眼あり……總じて之を言へば只是れ這箇の眼なり。怒る時の眼を見得して就ち未だ嘗て喜ぶ時の眼あらずと説く……皆是れ執定す、就ち是れ錯りなるを知る。孟子の性を説くは直に源頭上より説き來る、亦是れ箇の大槩此の如くなるを説く、荀子性惡の説は是れ流弊上より説き來る、未だ他を盡く不是なりと説くべからず、只是れ見得して未だ精しからざるのみ。

と明言してゐる。茲に陽明が性の本體を無善無惡といひ、性善を源頭上より説くと評するの當否は後段に譲るとして、兎に角彼の評言は大いに事實に的中するを覺ゆ。即ち孟子は人類の社會的性情を主として論を爲し、荀子は個人的性情を主として立言したのて何れも一面の眞理たるを失はぬ。

人類は社會的と個人的との二種の性情を固有するとせば

絶對的に個我のみの福利を計る行爲……………甲

絶對的に社會我のみの福祉を計る行爲……………乙

二我共通の福祉を計る行爲……………丙

二我共通の傷害を計る行爲……………丁

以上四種の場合がある。甲の場合を道德とすれば絶對的利己主義で、乙の場合を道德とすれば絶對的利他主義、丙の場合を道德とすれば二利圓滿主義、丁の場合に狂亂的行爲にして無價値なるとは謂ふ迄もない。

然れども社會は個人を離れて成立すると無く、個人は社會を離れて成立するは不可能にして二者は相融互入するものなれば、絶對的に個我の爲にのみし、絶對的に社會我の爲にのみするは不可能と謂はねばならぬ。何となれば社會の福祉は個人に波及し、個人の慶運は社會に響應するからである。故に二利圓滿の行爲は道德的にして佛敎に自利利他兼濟を説くは之が爲である。

然れば何より善惡の別を生ずるかといふに吾人が個我に執著する結果、社會我の慶福を犠牲にして其生欲を遂げんとする、是に於て邪惡の行爲を起すに至る。之に反して個我の福祉と並立して社會我の幸慶を計り、若しくは個我の利益を犠牲にして社會我に貢献する時は道德的行爲となるのである。

六十八、至善説。果して然れば人性は善惡混在すと謂ふを事實とすべし、何故に王子は性善と道ひ、又は無善無惡といふて含糊の言を爲すかとの疑ひが起るのであらう。依て吾人の意見を開陳して次に王禪の性論を品評して見やう。

吾人の見解によれば世に邪曲なるものは無いのである。世人の謂ふ所の悪なるものは善の下級に屬するものである。善にも種々の階級がある、萬有一體の大觀念に原づきたる仁愛の如きは最も高等なるもの、一切衆生を同胞と觀たる慈悲の如きは其次にして、人類を一體としたる博愛の如きは又其次、人種の同じきものを一體としたる愛の如きは又其次、一國民を打して一體としたる同情の如きは又其次、一市、一町、一村を連絡するに同胞的親愛を以てするは又其次、一家族を以て一身の如くするは又其次、夫妻、親子のみを同體の如く感ずるは又其次である。而して皆其善たるに於ては一つである。

却説世に所謂惡人なる者を見るに皆個我を執して自己と爲し、軀殼的生欲を遂げんが爲に社會の損害を顧みざる輩である。故に善の最下級に位するを見る。今盜賊を以て之を例せんに彼は自己又は其家族を養はんが爲に他人の資産を盗用するのである。故に如何なる凶賊も其妻子の財を奪ふものは無い。然れば彼は其妻子に對しては義人たり、君子たる行ひをしてゐる。單に他人に對して凶惡なるに止まる。詳言せば盜賊の善は其行ふ所極めて小さく其良心の行はるゝ範圍が極めて狭きのみである。盜賊の行爲を以て愛國者のそれに比較するに當該愛國者にして自國の爲に生命財産を犠牲にするも他國民に對して恐るべき大害を與へたりとせば彼の行爲は盜賊のそれと五十歩百歩である。即ち彼の善は其行はるゝ所僅かに一國に限るからである。されば愛國者の愛國にして善なりとせば盜賊の愛妻愛子も善なりと謂はざるを得ぬ。

盜賊にして妻子と自己とを同體一身と感ずるの心を擴充して隣人に及ぼし、更に擴充して一國一社會に及ばしめば善人君子として青史に其名を垂るべき人物となるのである。然れば義人と惡漢との相違は萬有一體觀の廣狹、即ち社會我的觀念の淺深に由るのである。

以上の見地より人性を善と言ふので、惡の存在を認めずして、世に所謂惡とは善の未だ進歩せざるもの、劣等の善と見るのである。前に謂ふ所の社會的性情と個人的性情

とは善にも非ず、悪にも非ず、否、共に善なる性情と謂はねばならぬ。既に善のみにして悪の之に對する無しとすれば善の名も亦ない、便ち是れ無善無惡となる、其無善無惡なる一體の所を至善と謂ふのである。王子が性の本體は原是れ無善無惡的なり、發用上や原是れ以て善と爲すべし、以て不善と爲すべし。

と道うたのは本體上より觀察すれば上述の如く至善で、惡と對するのではない。併し發用上よりすれば善も惡もあるといふのである。王子が四句教に

無_レ善無_レ惡是心之體 有_レ善有_レ惡是意之動

知_レ善知_レ惡是良知 爲_レ善去_レ惡是格物

とある。第一句の無善無惡は至善の異名で、至善は性なり、元と一毫の惡なし故に至善と曰ふ。之に止まる是れ其本然に復るのみ。

とあつて、人の性は本體上皆善にして不善と對するのではない、故に至善である。

善なく惡なきは理の靜、善あり惡あるは氣の動、氣に動かざれば即ち善なし是を至善と謂ふ。

と明言してある。乃ち知る王子の性善とは心の本體の至善なるをいふとを。

蓋し王子が至善即ち無善無惡の説は禪より得たものであらう。蘇東坡、李翱等の禪者は皆王子に近似したる説を爲し、六祖大師も

一には善、二には不善、佛性は善に非ず、不善に非ず、是を不二と名く。

といひ、又

心量廣大なると猶ほ虚空の如く邊畔ある無し、亦方圓大小なし……善なく惡なし頭尾あるなし。

といはれた、而して佛性といふも心體といふも禪にては同一物を指すが故に、心性の無善無惡なるを説いたのである。

六十九、善惡不二迷悟一心。禪は善惡一心迷悟不二を宗とする、一心迷へば横逆凶暴至らざる所なく、一心悟れば百善萬德備はらざるはない。善も一心、惡も一心、迷も一心、悟も一心である。故に善を以て性とすれば惡も亦性と謂はねばならぬ。程明道の善は固より性なり、惡も亦性と謂はざるべからず。

とは善惡一心の禪意を得たものである。陽明も明道の如く善惡を一物なりと見て、問ふ先生嘗て謂ふ善惡是れ一物と如何ぞ只一物と謂ふや。先生曰く至善は心の本體、本體上才かに當を過ぐる些子なれば便ち是れ惡なり、是れ一箇の善あつて卻て又一箇の惡ありて來て相對するにあらず。故に善惡只是れ一物。

というてゐる。然れば陽明は過不及を以て善惡の標準を立て、中和を以て善とし本體上に過不及あるを惡とするので、明道の善惡皆天理なり之を惡と謂ふは本と惡に非ず、但だ本性上に於て過と不及との間のみ。

の論に循うたのである。

性は一のみ、仁義禮知は性の性なり、聰明睿知は性の質なり、喜怒哀樂は性の情なり、私欲客氣は性の蔽なり。質に清濁あり、故に情に過不及あり、而して蔽に淺深あり。私欲客氣は一病にして兩痛、二物に非ざるなり。

と道ひしに見ても知れやう。陽明の意を察するに仁義禮知は至善なる性の本體より出づ、而も氣質に清濁あるが故に智愚の別を爲し、喜怒哀樂にも過不及を生じ、私欲客氣の蔽を免れぬ。是れ善惡ある所以である。

今情に就て之を考ふるに同じく一個の憤怒なるも、公憤は善にして私憤は惡である。同じく一箇の恨みなるも君父の仇を恨むは善にして罪人が官吏を恨むは惡である。更に欲望に就て之を見るに國家の福利を希ふは善にして他人の災害を希ふは惡である。私欲客氣も畢竟は精神の中和を得ずして過不及あるより生ずるものである。されば禪の善惡一心迷悟不二の説と陽明の善惡は一物にして過不及によりて途を異にするの説

は二致があるのではない。

是に由て之を觀れば性を善とし情を惡とするも亦不通の論である。王子が

喜怒哀懼愛惡欲、之を七情と謂ふ。七の者俱に是れ人心に有るべき的……自然の

流行に順へば皆是れ良知の用、善惡を分別すべからず。

と云うたのは其意を得たのである。明教大師が

夫れ心の動くと逆順あり故に善惡の情生ず。

と道うたのも此意に外ならぬ。従つて人心と曰ひ道心と云ふも作用に順逆があるのみ
て其心たるは一である。

心は一のみ未だ人に雜らず之を道心と謂ふ、雜ふるに人偽を以てする之を人心と謂
ふ。人心の其正を得る者は即ち道心、道心の其正を失ふ者は即ち人心、初めより二
心あるに非ず。

と王子の道破したのは迷悟不二、煩惱即菩提の禪意に契ふを見る。

禪より之を觀れば迷悟不二、善惡一心で、迷もなく悟もなく、單に妙心清淨なるのみ、
善もなく、惡もなく、單に眞性の靈昭なるのみである。されば宇宙は妙心の現する所、
萬象は眞性の形成する所にして、至善ならざるなく、至妙ならざるなく、至極ならざ
るは莫い。禪の無善無惡とは此絶對至妙の地を指して謂ふのである。

陽明は無善無惡の説を爲すも彼が所謂無善無惡は告子と佛氏とに異ると自白してゐる
告子のとは暫く置く、佛氏の説に就ては陽明も未だ『觀て精しからず』の評を免れぬ。
何となれば彼は

佛氏は無善無惡の上に著在して便ち一切都て管せず。以て天下を治むべからず。
と獨斷した。這是善惡を思はず是非を管せずなど一切の二邊を蕩滌する禪の工夫を誤
解したのであらう。是れ陽明が明師に參じて禪を會せず、徒らに耳食を事としたるに
基くのである。

七十、**王學の無善無惡と禪**。王子の無善無惡論が禪と同轍なるとは左の事實に憑ても

推測せらるゝ。陽明が年譜に嘉靖六年九月陽明起つて思田を征せんとする時、錢緒山と王龍溪と學を論じた。龍溪先づ王子の四句教を擧て曰く

無_レ善無_レ惡是心之體 有_レ善有_レ惡是意之動
知_レ善知_レ惡是良知 爲_レ善去_レ惡是格物。

緒山曰く、

此意如何ん。

龍溪曰く、

此れ恐くは未だ是れ究竟の話頭にあらず、若し心體是れ無善無惡と説かば意も亦是れ無善無惡的の意、知も亦是れ無善無惡的の知、物も是れ無善無惡的の物。若し意に善惡ありと説かば畢竟心體還た善惡の在るあらん。

龍溪の意を察するに體用一源、顯微間てなき王子が一元的立言よりせば、心體と意用とは一物でなければならぬ、故に心にして無善無惡ならば意も知も物も透徹して無善無

惡の至善ならざるべからず。惡固より無ければ善もあるべからず。廓然瑩朗にして至妙至玄なるべしといふので彼が自證自悟した所である。故に彼は四句教を權法と認め、言詮に滯らず、他の脚跟に従つて轉ぜずと自信する所全く禪僧の風がある。然るに緒山は之に反對して曰く

心體は是れ天命の性、原是れ無善無惡的、但し人には習心ありて意念上に善惡の在るあるを見る。格致誠正修は此れ正に是れ那の性體に復するの功夫、若し原善惡なくんば工夫亦説くを消_ぬわす。

緒山の意を察するに性體は無善無惡なるも、人の好惡に習ふと久しき爲め意念の發動に過不及ありて善惡を生じたのである。故に善を爲して惡を去るの功夫を以て性體に復るを要す、若し絶對的に無善無惡ならば工夫も無用となるといふのである。

二子の議論の相違は吾人が屢々引用したる六祖大師と神秀大師との偈文の相違に酷肖するを見る。即ち神秀大師は緒山の如く

身是菩提樹 心如明鏡臺
 時々勤拂拭 勿使惹塵埃

というて悪邪の塵埃を蕩滌して明鏡の本體に復歸せんとする工夫に重きを置き、性體の明鑑上に好悪の習心によりて塵垢が附著したれば之を楷磨するの功を用ゐねばならぬといふ。また六祖大師は龍溪の如く

菩提本無樹 明鏡亦非臺
 本來無一物 何處惹塵埃

というて性體は廓然瑩朗として明鏡も塵垢も、善も悪も、菩提も煩惱もない。本來大虚の如き絶對無限の至妙至玄のものであるというた。梁の武帝と達磨との問答に、武帝が如何なるか是れ聖諦第一義と問た時、達磨は廓然無聖と答へた。第一義、即ち絶對至善の本體には凡も聖もない、迷も悟も善も悪もない。既に聖すら無い、况や凡をや、既に悟さへない、况や迷をや、既に善さへ無い、况や悪をや、何を好み、何を悪

まん、何をか取り、何をか捨ん。斯く本體上より見來りて迷を斷じ、私欲を離れるが英靈の衲僧で、六祖大師の如きは其人である。

次に神秀大師の意は、人心は兎角私欲客氣の煩惱に蔽はれ易き者なれど、其本體は清淨にして明鏡の瑩然たるが如くである、故に戒慎恐懼して塵垢を去るの工夫を等閑にしてはならぬといふのである。されば六祖大師は本體を看取する證悟を先きとし、神秀大師は本體を昧ます私欲の上に工夫の手を下すを先きとする。前者にして後者の工夫を缺く時は空疎の病に陥る弊あり、後者の用心なくんば凝滯の病に染むを免れぬ。二者は相表裏して始めて禪の眞面目を發揮するに足る。是を以て五祖弘忍大師も神秀上座の偈を見て

此偈に依て修せば大利益あらん。

と道うたのである。後世闇證の禪者が神秀大師を誦るが如きは、自ら其盲愚を立證するの外何の効果もない。

却説緒山と鹽溪との論も右の六祖と神秀との場合の如く、決して矛盾する筈は無い。六祖と龍溪とは其轍を同うし神秀と緒山とは其揆を一にしてゐる。さるを二人共に一邊に執著して相譲らず、遂に疑ひを決せんが爲に王子に請問するととなつた。

依て夜に入りて客皆散じ去りて陽明將に内に入らんとするに方り、二人袂を連ねて其師を伺候したれば、陽明は天泉橋上に席を移して二人を引見し、二人は各、其思ふ所を擧げて正されんとを悃請した。時に陽明の曰く

二君の見、正に相資けて用を爲すに好し、各、一邊を執すべからず。我が這裏、人を接する原此二種あり。利根の人は直に本源上より悟入す、人心の本體は原是れ明瑩にして滯る無きの、原是れ箇の未發の中なり。利根の人は一たび本體を悟る、即ち是れ工夫。人已内外一齊に俱に透り了る。其次は習心在るありて本體蔽を受くるを免れず。故に且く意念上に在て實落に善を爲し惡を去るを教ふ。功夫熟して後、渣滓去り得て盡る時、本體明かにし盡し了る。汝中(玉龍溪)の見は是れ我が這裏利根の人を

接する。德洪(錢緒山)の見は是れ我が這裏其次の爲に法を立つる。二君相取りて用を爲さば則ち中人上下皆引て道に入るべし。若し、各一邊を執せば眼前便ち人を失ふあり、便ち道德に於て各未だ盡さざるあり。

と、以て王子が、二者の見處を合して始めて完全なる證悟功夫とするのが知れよう。陽明が此一段の斷言は、千歳未了の公案を決するに足る。佐藤一齊が

文成(陽明)の無善無惡は即ち所謂至善にして、禪家の無善無惡と同じからず。

と評したのは、一齊が禪を知らざる證據で、王子の説が卻て禪より出てたるを覺らざる過ちである。

七十一、**本來無一物**。吾人は前節に於て惡は小なる善、幻釋なる善、未だ發達せざる善なるを論じ、既に惡なければ從て善も亦無く、絶對至善なるを道破した。想ふに禪を會せざる者は吾人の論を以て禪意に背くものと爲すかも知れぬ。依て少しく解説を試みやう。佛教には一切衆生悉く佛性ありと唱ふれば、佛教は本來性善説をとるとは

何人にも明かてあらねばならぬ。何となれば、佛性の善なるべきは謂ふ迄もないからである。

併し、禪に所謂佛性は、善惡相對の善にあらずして絶対的至善である。故に六祖大師は佛性は善に非ず、故に不二と謂ふ。

と示された。

煩惱即菩提は禪の常套語であるが、煩惱妄想にして其儘菩提なりとせば、菩提の名も亦無く、絶対的の眞性あるのみである。永嘉大師が

無明の實性即佛性、幻化の空身即法身。

といふも此意に外ならぬ。さるを、禪に疎き者は、本來無一物、不思善不思惡などの語に轉ぜられて、無一物とは空蕩にして物なしと思ひ、不思善不思惡とは懸空に思索すると思ふ。

既に無明なければ之に對する眞如の名も無い、既に迷ひなければ之に對する悟りの名

も無い、既に惡なければ之に對する善の名も無い、是れ即ち無一物である、不思善不思惡である。されば無一物とは不二絶対の異名である。

釋尊は一切衆生を皆善人と見て常に善男子善女人と呼び、惡人に對しては愚人狂人の名を用ゐられた。惡人とは智識の不充分なるもの、若しくは狂病のもので、眞の惡人は存在せぬのである。六祖大師も何人に對しても善知識と呼んだ、以て禪が人性を至善とすることが知れやう。明教大師は

佛は一切衆生一心覺源清淨の理を證得す。

というた。唐の復禮なるもの眞妄の偈を作りて、天下の學者に問て曰く

眞法性本淨、妄念何由起、從眞有妄生、此妄何所止、無初即無末、有終應
有始、無始而無終、長懷惜此理、願爲開玄妙、折之出生死、

學者それ此公案を透るを得ば、禪の性論を知ること之を掌に指すが如くならん。

性説副論

甲。心即理

七十二、陸象山の心即理。吾人は既に陽明が性論と禪の性説との關係を論じ了りたれば、因みに王子の心則理説及び知行合一説の何たるかを見て此章を結ばうと思ふ。心即理説は陸象山が學問の骨子で、彼が宇宙は便ち是れ吾心、吾心便ち是れ宇宙と達觀したのが其起原である。彼は心と理とを一とし、此心と此理とは、古今に亘り十方に貫いて不變不易なりとし、東海聖人ありて出るも、此心同じく此理同じ、西海聖人ありて出るも、此心同じく此理同じ、南海北海聖人ありて出るも、此心同じく此理同じ、千百世の上、千百世の下、聖人ありて出るも、此心同じく此理同じと道破したことは、吾人が上章に記した如くである。彼は此心と理とを以て、道德の基礎とするの意見を抒べて

古へ聖賢の言は大抵符説を合するが如し。蓋し心は一心なり、理は一理なり、至當

一に歸す、精義二なし。此心此理實に二あるべからず、故に夫子曰く吾道は一を以て之を貫く。孟子曰く夫れ道は一のみ。又曰く道二つ仁と不仁とのみ。是の如くなれば即ち仁たり、之に反すれば則ち不仁たり。仁は即ち此心なり此理なり。求むれば則ち之を得其理を得るなり。先知は此理を知るなり。先覺は此理を覺るなり、其親を愛するは此理なり。其兄を敬するは此理なり。孺子の將に井に入らんとするを見て怵惕惻隱の心あるは此理なり。羞つべきの事は則ち之を羞ち、惡むべきの事は則ち之を惡むは此理なり。是は其是たるを知り、非は其非たるを知るは此理なり。宜しく辭すべくして辭し、宜しく遜るべくして遜るは此理なり。義も亦此理なり。というた。されば象山にありては、理と謂ふも心と謂ふも道と謂ふも、同一物を意味するのである。然れども彼が謂ふ所の心とは私欲の心には非ずして、本心の至正大中なるをいふのである。彼の言に

孟子曰く、慮らずして知る所の者は其良知なり、學ばずして能くする所の者は其良能

なり。此は天の我に與ふる所の者、我固より之れあり、外より我を鑠すに非るなり。故に曰く萬物皆我に備はる、身に反して誠なれば樂み焉より大なるはなし。此れ吾が本心なり。所謂安宅正路なるものは此れなり、所謂廣居正位大道なる者は此れなり。

とありて、象山の所謂本心とは孟子の良知良能にして陽明の良知と同一なることが知れる。孟子が天下の廣居に居り、天下の正位に立ち、天下の大道を行く、富貴も淫するはず、貧賤も移す能はず、威武も屈する能はずと公言した如く、良知に従ひ、本心を守り、道心を準則するは、便ち廣居に居り正位に立ち大道を行く所以であるといふのである。象山の本心とは宋儒の天理と通説せるもの、其私心とは宋儒の人欲と通説せるものに外ならぬ。

人類は、太初地球上に發生したる當時より、社會的の生物で、孤立獨棲するものでない。従て其社會的の屬性を固有して彼此相依り相助けて生活を營むは其天分とする所であ

る。故に個體の生命を犠牲にするも、尙ほ其種族若くは社會の爲に努力するの天性を有す。母が其子の爲に一身を犠牲にするが如きは、此天性の幼穉なるもの、一である。果して然らば人類の社會的なる性情は其天分に契へるもの、本心と稱せらるゝは之が爲である。

之に反して個體生存の欲に驅られて社會の福祉を傷害するが如きは人類本來の天職に背くもの、私心と名けらるゝは之が爲である。然れども個體生存の欲も、社界生存の欲も、人類には固有にして、孰れを本、孰れを末と定めるとはできぬ。何となれば個體を離れたる社會はなく、社會を離れたる個體はないから、個體の強健は社會の強健を誘起し社會の劣弱は個體の劣弱に影響する。

個體の福利となる場合、則ち其健康、其資産其教育、其生活等に注意するも、社會の福祉と其發達を害せざる限りは、正善の行爲たるを失はぬ。但だ人類は本來社會的なるものなるを、其天分を忘れて軀殼の欲に陷溺するより、社會を傷害するに至る、是

に於て私欲となるのである。

象山の所謂心即理の心とは本心のとて、禪にも之を本心本性と命名してある。

七十三、吾人の意見。象山の此説を其儘に繼承して更に其濫奥を發揮したのが王陽明である。陽明が心とは吾人が前章に解説したる良知で、又之を性とも謂ひ、理とも謂ふ。

其主宰の處に就て説けば便ち之を心と謂ひ、其稟賦の處に就て説けば便ち之を性と謂ふ。

とあり、又

心の本體は即ち是れ性なり、性は即ち是れ理なり。

心の體は性なり、性の原は天なり。

とあるから、天にありては命、人に賦しては性、身の主宰としては心、皆同一の理である。

理とは法則の意で、天にありては諸惑星が其軌道を失はずして廻轉し、春夏秋冬の四序

を亂さざるが如きは其法則である。地にありては風雨露雷の起滅より昆蟲草木の榮枯に至る迄一も天則に法らぬ者はない。是れ即ち理である。此理の人心に賦せられたるは理性にして是非曲直を知り、正邪善惡の判別をなす心作用である。之を本心、道心、天理、良知、良心、佛性、本性、心性等と名づくるのである。天の理は即ち人心の良知、良知は即ち天の理なり、法則なりと謂ふも誣言ではない。

吾人は嘗て下の如く論じた。

自然の法則は精神の法則に外ならぬ、何となれば現代多くの學者が一致して唱ふる所に由れば

自然の勢力は宇宙現象をして井然たる秩序あらしめ、物質は自ら法則に従ふて目的に適へる組織を成す。

といふ。實に宇宙の現象が現象界として成立せんには個々の事物は相互に必然的な關係がなくてはならぬ。若し個々の事物が何等の連絡もなく磊々として瓦礫を散

じたるが如くならば宇宙は秩序もなく、法則もなく紛々擾々として混沌の状態と爲る。従つて吾人が見るが如き現象界は成立せぬ。譬へば親子夫婦兄弟の關係があり連鎖が無ければ家族なる現象は成立せず、又大小百八の珠玉を一貫する線が無ければ數珠なる一物は成立せぬが如くてある。

然らば此等の秩序法則は何物の所産なるか、這是吾人の理性に具はれる秩序法則に外ならぬ。古來専門の學者が攻究したる結果に従へば、天體相互の調節あり規律あり秩序あり、太陽系には太陽惑星相互の調節あり、規律あり、秩序あり、個々の惑星には惑星自體の運行に確乎たる定律あり、地球上の庶物にありても、生物の進化あり盛衰榮枯の法則あり、無生物には無生物の運動あり集散離合の法則あり、乃至飄風の樹木を折り、烈火の廣原を焼き、洪水の人畜を漂はすに至るまで一として必然的なる法則に支配されざるは無い。然れば則ち吾人の精神活動にも亦動かすべからざる法則あるは謂ふ迄もない。即ち心理學者の期待する所は此等精神的法則の發見に在る。

吾人の精神活動に一定の法則ありて常に其法則に従て實物を考察するとせば一切の事物は精神の法則によつて規定せられざるを得ぬ。換言すれば、宇宙現象に法則あり秩序ある所以は、吾人の精神に法則あり秩序ある所以である。是れカントが萬有の法則秩序は萬有に存するに非ずして、吾人の悟性が賦與したるなり。

と考へる所以である。また西人の語に

吾人の精神は眞實を知るのみにして虚妄を知る能はず、例せば二に二を加ふれば其四なるを知るべく、其五なるを知るべからず。

というてある。見れ亦吾人の精神活動には一定の法則あるが故に、假令外界に二と二との和が五となるの事實ありとするも、吾人は決して之を認めず、理性の必然的
法則に由りて萬有を律するの眞理を道破したのである。

今試みに數學の公理に就て考ふるに、彼等は左の三項に概括する事ができる。

一、同一の物に等しき物は互に相等し。

二、等しき物を等しき物に加ふれば全體亦等し。

三、等しからざる物を等しき物に加ふれば全體亦等しからず。

此等の公理は証明を待たずして明かなるのみにあらず、証明するとは不可能である。何となれば斯の如く考ふるは理性其物の固有の性能、否法則なるが故に他の証明を待つまでもなく明々白々にして、また之を證明せんと欲するも、斯く思はるゝより外は證明の法がないのである。然り而して宇宙間の萬象は一も數理に従はぬものなく、天文地理曆數等は勿論、機械工藝美術等に至るまで、數學的法則に背馳する時は決して其眞を得るとはできぬ。殊に近世に至りては精神科學にさへ數理を應用して精密なる研鑽を遂げつゝある。這は一切の現象に普く數理の行はるゝを立證すると同時に、當該數理は理性其物の法則にして、一切の現象に普汎なるは其必然的なを示すのである。

且つそれ「物は己れ自體と同一なり」とて同一律なからんか、物體の存在を思惟する

とはできぬ。換言せば物體は同一律に依らざれば、其自體を成立せしむるとはできぬ、次に「甲なる一物ありて甲は乙なりとせば同時に非乙なるを得ず」とて矛盾律なからんか、萬有は混淆錯亂して壞滅紛糾收拾すべからざるに至るであらう、換言せば宇宙の萬象が萬象たるを得る所以は矛盾律に依るのである。復次に「甲なる一物ありとせば甲は乙なるか非乙なるか二者必ず其一に居らざるべからず」とて排中律なからんか、甲なる一物は果して何物なるかを知るとはできぬ、換言せば排中律に由らざれば、物體は朦朧恍惚として捕捉することを得ぬ。

故に同一律、矛盾律、排中律なる三原則なからんか、天は其高さを失ひ、地は其厚さを喪ひ、日月星辰は其光明を失ひ、森羅萬象は全く其自體を成立せしむる能はずして窈々冥々たるに了らねばならぬ。而して當該三大律は吾人が思想の原則にして吾人が精神に備はれる理性の原基である。されば萬有をして萬有たらしむる所以の者は、吾人の精神であると謂ふも決して誣言ではなからう。霞谷山人が

法界は吾が心なり、吾が心は法界なり。

といひ、呂與叔が

洞然たる八荒、皆我闔に在り。

というたのは、這般の理を達觀したのであらう。

次に因果の大法則に就て觀察するに、這は宇宙間の萬象に必然的なる關繫を附し、其成立上動かすべからざる規律あるを謂ふのである。故に物質界といはず、精神界といはず、因果律の透徹せざる所は無い。然り而して斯く普遍なる因果律の根柢は吾人が理性の作用に依る。吾人の理性は、本來事物の偶然に生起することを考ふる能はざる傾向を有するので、物あれば必ず其原因を探求せざれば止まぬ。吾人が因果律に於て預期する所は、一現象が必ず他の現象を生ずてふ關係なるは謂ふ迄もない。併し這は吾人が甲乙二現象の相續きて生起し又は變化したるを經驗して其中の一を思へば必ず他を聯想するの習慣となり、斯くして未だ曾て經驗せざる一切の場合にも、必

ず然らんと確信するに至つたのである。要するに各、の原因には必ず結果あり、各の結果には必ず原因ありといふは、共に主觀的信念を根據とするに外ならずして、客觀的事實としては、吾人の未だ確知する能はざる所である。是を以て因果律は吾人が理性の性能に根柢を据ゑ、聯想作用に助長せられ、主觀的信念を恃みて成立したるに相違ない。而して因果律が普遍にして必然たる所以は、一切の現象其物が因果律と同じく、本來主觀的なるに由るのである。是に於て乎カントが

吾人が事物を認知するは、既に成立したるものを鏡中に映する如く吾人の心に映ずるにはあらず。事物自體を成立せしむるは吾人の知識なり、吾人が自然界を認知するとは、吾人が悟性の作用によりて知識の對境を造るに外ならず、故に自然の法則は、吾人が立法者となりて自然界に與ふるものなり。かく自然界は吾人が之に因果律等の法則を與へて、始めて成立するものなるを以て、自然界の全局に通じて法則の行はるゝは當然と謂はざるを得ず。

と思惟したのは無理もなき次第である。

七十四、善惡の標準。以上は吾人が「禪學新論」の中に禪の唯心論を解説せんが爲に論じたる所である。而して陽明の心即理は吾人の論と頗る相似たるを見る。少しく異なる所あるは、彼の説は理を以て自然律と道德律との二を含ましむるにある。

問ふ至善は只諸を心に求めば、恐くは天下の事理に於て盡す能はざるあらん。先生曰く心即ち理なり、天下又心外の事、心外の理あらんや。曰く父に事ふるの孝、君に事ふるの忠、友に交るの信、民を治むるの仁の如き、其間に許多の理の在るあり、恐くは亦察せざるべからず。先生嘆じて曰く、此説の蔽久し、豈一語の能く悟る所ならんや。今姑く問ふ所の者に就て之を言はば、且く父に事ふるが如き父の上に去て箇の孝の理を求むるを成さず、君に事ふるに君の上に去て箇の忠の理を求むるを成さず、友に交り民を治むるに友の上、民の上に去て箇の信と仁との理を求むるを成さず。都て唯此心に在り、心即理なり。此心にして私欲の蔽なくんば、即ち是れ天理、

外面に一分を添ふるを須ゐず、此天理に純らなるの心を以て、之を發して父に事ふれば便ち是れ孝、之を發して君に事ふれば便ち是れ忠、之を發して友に交り民を治れば便ち是れ信と仁となり。唯此心に人欲を去り、天理を存する上に在りて、功を用ゆれば便ち是なり。

といふが如きは極めて痛快なる説である。吾人は道德律の基礎を求むるに心を外にしてはならぬ。此心を外にしては天下に道德律の根原は無い。且つ何故に吾人は親に孝を盡すべきか、何故に吾人は君に忠を盡すべきかを考ふるに方りて、世人は皆親の身の上に去て孝を盡すべきの理を求め、君の身の上に去て忠を盡すべきの理を求むるを當とする。而して親は吾人を生育したる故に孝を盡すべし、君は吾人を愛撫する故に忠を盡すべしといふのである。然れども親が吾人を生育したりといふも、天下の親は皆其子を生育するものでない。親として其子を捨て其子を愛せざる者は少くない。若し親の身の上に去て孝の理を求めば、無慈悲の親に對しては孝の理を求むべからず。又君は

吾人を愛撫するが故に忠を盡すべしといふも、無道の君は天下に其數多くして、卻て民の敵たる人もある。此等の君主に對しては忠の理は求むるとがてきぬ。

之に反して吾人が私欲を去りて天理を復し、良智を明かにして萬物一體の念に住する時は、之を發して父に事ふれば如何なる親にも孝を盡すべく、之を發して君に事ふれば如何に無道の君にも忠を盡すとを得るのである。朋友に交り身を修め家を齊へ民を治むるも之と同じく、外物に向て仁愛の理を求むべきでない、心内の天理の上に之を覺むべきである。故に吾人が善惡の標準は私欲に循ふか天理に従ふかに依て定まるので、道德の源泉は、吾人が清淨なる心徳にあることを知らねばならぬ。佛教に

心性は周徧にして虚徹靈通、之を散ずれば即ち萬事に應じ、之を斂むれば一念と成る、是の故に、若くは善、若しくは惡、若しくは聖、若しくは凡、皆此心に由らざるなし。

とあるも此事を謂うたのである。

七十五、王禪の心學。道といひ、教へといひ、法といふは何物ぞ、世人は草木を見ては草木なり、道にあらず、教にあらずとし、土石を見ては土石なり教にあらず、法にあらずと爲す。然れども土石草木も亦吾人が清淨なる心性内のもの、

翠竹黃華、教へにあらざるなし。

と古人も云うた。されば自己の本性を見得せば、適くとして道にあらざるなく、教へにあらざるはない。王子が

若し裏に向て尋求し、自己の心體を見得せば即ち時として處として是れ此道にあらざる無し、古に亘り今に亘り、終り無く始め無く、更に甘なまの同異あらん。心即ち道、道即ち天、心を知らば則ち道を知り天を知る。

と曰うたのは此意である。禪には之を

自己の胸襟より流出し、將ち來て蓋天盖地ならしむ。

といふのである。

陽明の心即理は極端なる唯心論ではない。極端なる唯心論は客觀の萬有を否認するに至るが故に、必ず暗黒なる懷疑に陥るべき運命を有す。陽明には絲毫も此弊はない。

夫れ物理は吾心に外ならず、吾心を外にして物理を求めば物理なし。物理を遺て吾心を求めば吾心亦何物ぞや。心の體は性なり性は即ち理なり。故に親に孝なるの心あれば即ち孝の理あり、親に孝なるの心なければ孝の理なし。君に忠なるの心あれば即ち忠の理あり、君に忠なるの心なければ忠の理なし。理豈我心に外ならんや。とある如く、事物の理を遺卻して心を求めば心も亦求むべからず、物と心とは同一存在にして、内外表裏の別あるのみなれば、事物の法則は心の理、心の法則は事物の理である。親に孝なるの理は心の全徳に備はるが故に事實上孝の存するあり、忠の法則は本心清淨の性に具はるが故に、之を發して忠君愛國の事實となるのである。

學問の道は他なし、此本心本性を體得して良知を致すにあるのみ。王子が古を好み敏に求むるとは古人の學を好み、敏に此心の理を求むるのみ。心は即ち理

なり、學は此心を學ぶなり。求むるは此心を求むるなり。孟子云く學問の道は他なし、其放心を求むるのみと。後世、古人の言詞を廣記博誦して以て古を好むと爲し、汲々然として、惟だ以て功名利達の具を其外に求むる者の若くなるに非ず。

といひし如く、王子の學は此心の學にして、心を知り心を證し心を悟り心を擴充する外には一事の剩餘もない。這是黃檗が

達磨西天より來りて唯一心の法を傳へ、直に一切衆生本來是れ佛なりと指す、修行を假らず、但だ如今自心を識り、自の本性を見る、更に別に求むる莫し。

と云うたと同一でないか。又五祖大師の本心を識らざれば法を學べとも益なし、若し自ら本心を識り自ら本性を見れば即ち丈夫天人師と名く。

といふと同一である。六祖大師は

一切の萬法は自性を離れず、自性は本清淨、自性は本不生滅、自性は本自ら具足、

自性は本動搖なし。

というたが、王子は

虚靈不昧、衆理具して萬理出づ、心外に理なく、心外に事なし。

というた。八萬の法藏も此心より出て、三千の威儀も此心より出て、六經も四書も三乗も十二分教も此心より出て、天文も曆數も、物理も化學も、法政も、美術も、文明も、進化の法則も、引力の法則も、汽船も汽車も、無線電話も無線電信も、否、萬理萬事皆此心より出たのである。

既に此心を體認して百般の事物に應ずれば

此心常に存して放たず、即ち花を觀、鳥を聽くも天機に非る莫く、柴を搬ひ水を運ぶも實際に非る莫し。

てふ境界に至る。要するに吾人の心は、靈妙玄微にして天地自然の法則を具有し、吾人が萬善萬徳の寶庫と爲る。心の大なる至れり盡せりといふべきである。

乙、知行合一

七十六、應病與藥。心即理なるを了悟し致良知の旨を體認するは、徒らに耳口の間に傳へるのではない、實に心即理を體現し致良知を實行するのである。开は恰も水の冷煖を知り、食物の甘酸を辨ずるが如く、行爲は實現せられて渾身に充滿沾被せねばならぬ。是れ王子に知行合一の説ある所以である。

知行合一説は知行並進説とも稱せられて、王陽明が三十七歳にして龍場大悟の後に唱へ出したる所で、學問上繁脞支離の弊を去り、純一なる工夫を示す爲である。陽明が此説を唱ふるは、深く時弊に感ずる所ありて其病に箴砭を下したのである。乃ち王子が語に

聖賢の人を教ふるは醫の藥を用ゆるが如し、皆病に因つて方を立つ、其虚實溫涼陰陽内外を酌み而して時々之を加減す、要は病を去るに在り。

とあつて、王子の語は與奪縱横、殺活自由なる宗師家の語録を讀むが如くてあるが、

就中、此知行並進説は應病與藥の意を含むを見る。

某今箇の知行合一を説くは正に是れ病に對する藥、又是れ某が鑿空杜撰するにあらず、知行の本體原是れ此の如し。

というて其意のある所を示し、如何なる病に與ふる藥かといへば

古人既に一箇の知を説き又一箇の行を説く所以の者は只世界一種の人あり懵々憧々として意に任せて做し去り全く思惟省察を解せざるが爲なり。只箇の冥行妄作す、所以に必ず箇の知を説て方に纒かに行ひ得て是なり。又一種の人あり茫々蕩々として懸空の思索し去て全く肯て着實に躬行せず、只是れ箇の影響を揣摩す、所以に必ず一箇の行を説て方に纒かに知り得て眞なり。

便ち一方に於ては懵々憧々として冥行妄作するのみにて思索し省察するを知らざる者の爲に知を説き、茫々蕩々として懸空に思索して何等の實行なき者の爲に行を説くので、知行の合一は二種の病痛を一時に治する力があるといふのである。世人動もすれ

ば禪を以て懸空に思索し去るものと爲す、這は大なる誤解である。坐禪は無善無惡の本體上より功夫を下して善すらなし況や惡をや、「聖諦すらなし況んや階級をや」てふ見地より本心清淨の全徳を得せしむるにある。且つ禪は一事一物の上にも善を爲し惡を去るを努むるが其本旨である。百丈禪師が

一日なさずんば一日食はず。

といはれたのは此意に外ならぬ。禪僧が喫飯の詞に

一口爲^ハ斷^{セン}ニ切^シ惡^シニ 二口爲^ハ修^{セン}ニ切^シ善^シニ 三口爲^ハ度^スニ諸^ノ衆^ノ生^ニ皆^ニ共^ニ成^ス佛^道ニ

とある。此の如き切實なる功夫を指して、懸空とはいはれぬであらう。

現代我國の學者を見るに先人の學説を廣記博誦して以て利達の資と爲すもの多く、眞に斯道を以て己が任となし、知行の並進を努むる人は稀である。他人の糟魄を嘗て活ける字書と爲る人は朝野に滿つれども東西の學説を以て吾心の血とし肉として一種獨立せる學説の體系を形成する者はない。純理的の學問は暫く措て問はずとするも倫理學

の如き實踐せざれば毫も其効なき學問さへ、倫理學者と稱する口舌の論客のみ多くして道德の實踐者を得るに難きは國家社會の爲に哀しむべきである。倫理學說の如きは己れが日用に體認して之を経験し、事實に適合して誤りなきにあらざれば害ありて益なきものである。

今の人は卻て就ち知行を以て分て兩件と作做し去り、以爲らく必ず先づ知り了て然る後に能く行ふと……故に遂に終身行はず、修身知らず。

と王子の謂うた如く、今の學者は、終身道德の何たるかを體驗せずして了るものが多いてあらう。

七十七、知行合一の眞訣。王學の心學にして往々哲學的思辨を雜へ、又汎く自然界の物理に關する論議も絶無ではない、併し王學の實踐を主眼とするが故に知行合一と謂ふも、知とは良知の知を意味して、一般なる知識の義ではない。若し知を以て普通吾人の用ゆる知識の義にとる時は不都合を生ずる。何となれば、知は向內的、求心的のも

の、行は向外的、遠心的のもので、全く異りたる二作用である。吾人は天體運動の法則を知るも天體の運動を行ふとはできぬ。又機械作製の術を知るも同時に機械を作製するとはできぬ。陽明が知行合一説は此の如く汎く適用すべきものでない、單に倫理の範圍に屬するのである。且つ行とは吾人の普通使用する行爲より其意義廣くして、精神上の働きにも適用せらるゝので、佛耶二教に

他人の妻を見て愛心を生せば、开は姦姪を行ひたるなり。

と戒めたる「行ひ」の如く解するとあるを忘れてはならぬ。王子の

未だ知て行はざる者はあらず、知て行はざるは只是れ未だ知らざるなり。

と云ひたるに依て見れば彼は眞に知るとは行ふとし、眞に行ふとは知るとと斷定したのである。

知行合一とは良知が是を是とし非を非とし、善惡曲直を知ると同時に惡を去りて善を爲し、私欲を拂ひて天理を復するをいふ。忠孝仁義の如きも口に忠孝仁義を談ずるを

知とはいふべからず、忠孝仁義を實踐して、其徳行の天理に合する味を感知したるが眞の知である。未だ一たびも孝を行はずして、吾は孝を知れりといふも、誰も信ずる者は無い。是れ王子が

眞知は即ち行を爲す所以なり、行はざれば之を知と謂ふべからず。といふ所以である。

知行合一とは知行同一の意ではない、知行並進の語は王子の屢々反復して使用した熟語であるが、其實は知行不可離といふを最も適當とする。王子が語に

知は行の始め、行は知の成るなり。聖學は一箇の功夫、知行分て兩事と作すべからず。

とあるは其意である。知行が同一なれば知の始めは行の始め、行の成るは知の成るでなくてはならぬ。陽明が眞意は左の如くである。

今人の學問は、只知行を分て兩件と作すに因るが故に、一念の發動是れ不善なりと雖

も然も卻て未だ曾て行はず便ち禁止し去らざるあり。我は今箇の知行合一を説く、正に入の一念發動の處、即ち是れ行ひ了るを曉得せんことを要す。發動の處に不善あれば、就ち這の不善の念を將て克倒し了て、須く根に徹し底に徹して那の一念の不善をして、潜伏して胸中に在らしめざるべし。此は是れ我立言の宗旨なり。

然れば王子が知行合一の眞訣は、吾人が心内に一念たりとも不善の發動するあらば开は吾人が不善を行ひ始めたのであるから、速かに其不善を去りて善に歸せしむるにある。這は大乘菩薩の戒法と其旨を齊しうする。佛の言く

若し人功德を造ること須彌山の如くなるも、一たび瞋恚を起せば皆消滅す。と、以て佛教が惡念を以て惡行と爲すの意を見るべきである。又

女人を見る時、嘲調言語戲笑するは姦欲の法を成じ淨戒を毀破す。壁外に劍聲を聞くも皆戒を汚す、若し心に愛著を生ずれば、欲法を成就し淨戒を毀破す。

とあるに徴する時は不善なる一念の發動する所、直に是れ不善の行ひと見るのである。

七十八、知行合一に關する疑問。併し知行合一の妙旨は、王門の高弟も容易に悟ると能はずして、幾多の論議を生じたのである。されば

愛(徐愛)未だ先生の知行合一の訓を會せざるに因て宗賢惟賢と往復辯論して未だ決する能はず、以て先生に問ふ。先生曰く試みに擧げよ看ん。愛曰く如今の人儘、父には當に孝なるべく兄には當に弟なるべきを知る者あり、卻て孝なる能はず弟なる能はず、便ち是れ知と行と分明に是れ兩件なり。

先生曰く此れ已に私欲に隔斷せらる、是れ知行的の本體にあらず。未だ知て行はざる者あらず、知て行はざるは只是れ未だ知らざるなり。

大學に箇の眞の知行を指して人に與て看せしむ。好色を好むが如く惡臭を惡むが如しと説く、好色を見るは知に屬し、好色を好むは行に屬す。只那の好色を見る時、已に自ら好み了る。是れ見了りて後に又箇の心を立て好み去るにあらず。惡臭を聞くは知に屬す、惡臭を惡むは行に屬す。只那の惡臭を聞く時、已に自ら惡み了る。

是れ聞き了て後に別に別に箇の心を立て惡み去るに非ず。鼻塞の人の如きは惡臭前に在るを見ると雖も鼻中に會て聞き得ず、便ち亦甚だ惡まず、亦只是れ會て臭を知らず。

就ち某人は孝を知り某人は弟を知ると稱するが如き、必ず之れ其人已れ會て孝を行ひ弟を行うて方に他、孝を知り弟を知ると稱すべし。

又痛を知るが如き、必ず己れ自ら痛み了りて方に痛を知る。寒を知るは必ず己れ自ら寒へたり、饑を知るは必ず己れ自ら饑了る。知行如何ぞ分ち得て聞かん。此は便ち是れ知行的の本體、會て私意隔斷するあらざるの。聖人人を教ふる必ず是れ此の如くにして方に之を知と謂ふべきを要す。然らざれば只是れ會て知らざるなり。此は卻て是れ何等緊切着實的の工夫ぞ。

以上の問答に徴するに知も行も陽明は心の作用に名つけて、好色を見るを知とし、好色を好むを行としてゐる。現代の意義よりせば、好色を好むは情にして好色を見るは視覚である。故に兩つながら精神内界の作用で行とは謂はれぬ。王子の所謂知行は一念の起

滅の上にて論ずるので、心即理、致良知を除却しては無意義の説となる。故に王龍溪が知は見解の謂ひに非ず、行は踐履の謂ひに非ず、只一念上より證を取る。此は却て是れ知行合一の密旨なり。

というたのは王子が

知の真切篤實の處、即ち是れ行、行の明覺精察の處即ち是れ知。

と定義した真旨に契うてゐる。

且つ寒と饑と痛との譬喩の如くなれば先行後知の意あるとも自ら察せらるる、何となれば先づ食ふの行ありて後に味を知るの知あり、先づ撲つゝの行ありて後に痛を知るの知あり、先づ觸るゝの行ありて後に寒を知るの知があるからである。然れば王子が知行合一は、知行並進と先行後知を兼ねるものと見て大差はなからう。而して此二者が一念の上に證を取るとせば、禪に修する坐禪と似たものとなる、否、一種變形の坐禪となる。さればにや陳建も

聖賢の經書……何ぞ嘗て知行合一、行うて後に知るの説あらんや。惟た禪宗の教あつて然して後、存養先きに在て頓悟後に在り、心を求むると先に在て性を見ると後に在り、磨鍊精神先に在て鏡中萬象後に在り。故に曰く行て水窮り山盡る處に至て那の時方に本來の眞を見ると。此れ陽明が知行合一、行て後知るの説の從て出る所なり。

というた。吾人は知行合一説が、現代の意味に於て、知行不可離説として最も有効なるとを信じて疑はぬ。

餘論

吾人は、上來六章に於て、王學と禪學の關繫を叙述し了りたれば、之より餘論として、王陽明が、數、其學の奧秘を聞くに禪語を用ゐたる二三の例を指摘して、本書を終らうと思ふ。陽明が諸生に示す詩に曰く

爾身各々自天真

不用求人更問人

但致良知成德業

謾從故紙費精神

乾坤是易原非畫

心性何形得有塵

莫道先生學禪語

此言端的爲君陳

道ふ莫れ先生禪語を學ぶの一句、能く彼が禪語を學びたるの證左とするに足る。

一、謾從故紙費精神

上記の詩に、謾りに故紙に從て精神を費すとあるは、禪語で

古靈の贊禪師、受業の本師に歸る。問ふ、汝何の業をか學ぶ。師云く未だ去らざる時に一如す。後に因みに本師看經する次、蠅子あり牕を撞く。師云く世界許の如く廣大なり、須く出題を要すべし、故紙を鑽て甚麼かせん。本師異なりとして之を問ふ。師云く某甲今頌あり云く

空門不肯出 投牕也太奇 百年鑽故紙 何日出頭時

經文を讀誦して其文字に束縛せられて出頭力なきを、蠅子の牕を撞くに喩へ、又經文を故紙といふたのである。

二、大道透長安

陽明が同じく諸生に示す詩に

人々有道透長安

坦々平々一直看

とあり、又

長安有路極分明

何事幽人曠不行

とあるは

趙州に僧問ふ、如何なるか是れ道。師云く墻外底。云く這箇を問はず。師云く甚麼の道を問ふや。云く大道。師云く大道長安に通ず。の問答に出づ。

三、饑來喫飯困來眠

王子が人の道を問ふに答ふる詩に

饑來喫飯倦來眠

只此修行玄更玄

說與世人一渾不信

却從身外覓神仙

とある。這は

律師あり越州大珠の慧海禪師に問ふ、和尚道を修する還た功を用ゆるや否や。師曰く功を用ゆ。曰く如何が功を用ゆ。師曰く饑來れば飯を喫し困し來れば眠る。曰く一切の人總て是の如し、師の功を用ゆるに同じきや否や。師曰く同じからず。曰く

何故に同じからざるや。師曰く、他飯を喫する時敢て飯を喫せず、百種思量す。睡る時肯て睡らずして千般計較す、所以に同じからず。とあるより出たのである。

四、金玉屑

陽明の曰く

這の一念は但た私念のみにあらず、便ち好的なるも念頭に些子を著くるを得ざれ、眠中に些の金玉屑を放けば、眼亦開き得ざるが如し。

とあるは禪に

金玉屑しと雖も眼に入れば譬と爲る。

の語に出て、六祖の

但妄想なければ性自ら清淨なり、心を起し淨に著すれば却て淨妄を生ず。と同一意なるを見る。

五、脱落

陽明が語に

學問の工夫は、一切の聲利嗜好に於て、俱に能く脱落して殆んど盡くるも、尙ほ一
種生死念頭に毫髪も掛帯せば、便ち全躰に於て未だ融釋せざる處あり。

とあるは如淨禪師の

身心脱落脱落身心

を宗として、生死透脱を示すと同じである。

六、不レ説一字

陽明が自己の語を録する者あるを聞て

聖賢の人を教ふるは醫の藥を用ゆるが如し皆病に因て方を立つ……初より定説な
し。若し一方を拘執せば人を殺さざる鮮し……但た能く改化せば即ち吾言已に贅
疣たり。若し遂に守りて成訓と爲さば他日己れを誤り人を誤る。某の罪過復た追贖

すべけんや。

と道うたのは楞伽經に佛は最初成道より涅槃に至る迄一字をも説かずとして、一切の
教跡を一掃すると同筆法で、吾言已に贅疣とは、圓悟禪師が一代時教は只是れ方便なり
といふに同じく、最後に某が罪過といふは、翠岳和尚が、一夏説法の終りに横説縦説
を罪過なりとして「眉毛ありや」と問うた公案其儘である。

七、啞子喫=苦瓜

王子が

啞子苦瓜を喫す、爾の與めに説き得ず、爾此苦を知らんと要せば、還た須く爾自ら
喫すべし。

というたのは、自證自悟すべくして言語に現はす能はざるを、禪の俗語に

啞子喫=苦瓜

といふに倣うたのである。

八、不_レ過_レ說_二心體_一

王子が

四書五經は這の心體を説くに過ぎず。

といふは禪の一切藏經は心の一字を説くに過ぎずといふより出たのである。般若に

三阿僧祇の名字は皆是れ心の異號なり。

とある。

九、非_レ有_レ非_レ無

道は見るべきありやの間に答へて、陽明が

曰くあり、有れども未だ曾てあらず。

といひ、見るべき無きかの間に答へて

曰く無し、無けれども未だ嘗て無ならず。

と曰ひ、又

夫れ有れども未だ嘗て有らざるは真有なり、無けれども未だ嘗て無ならざるは真無なり。見れども未だ嘗て見ざるは真見なり。

夫れ有無の間、見れども見えざるの妙は言を以て求むべきにあらず。

と曰ふは禪に所謂真空にして妙有、妙有にして真空で、顯宗記に

湛然常寂、應用無方、用にして常に空、空にして常に用。用にして有ならず即ち真

空、空にして無ならず即ち妙有と成る。妙有は即ち摩訶般若、真空は即ち清淨涅槃。

とあるに異らぬ。

十、本來面目

王子は良智を本來の面目として

不思議不思議の時、本來の面目を認む、此は佛氏未だ本來の面目を識らざる者の爲めに此方便を設くるなり。本來の面目は即ち吾聖門に所謂良知なり。今既に良知を認め得て明白なれば、即ち己れ此の如きの説を消_ぬわす。

と云ふた。

不思議、不思議、正與麼の時、那箇か是れ明上座本來の面目。

とは六祖の語で、父母未生已前の面目などともいふ、本心、本性の異名である。

十一、常惺々

又曰く

致知の功は即ち佛氏の常惺々、亦是れ常に他の本來の面目を存するのみ。體段工夫大略相似たり。

常惺々は

瑞巖の彦禪師、一生常に坐して毎に自ら喚て云く主人公。復自ら應諾して乃ち云く惺々著、他人の瞞を受くること莫れ。

を指したのである。

十二、騎驢覓驢

王子曰く樂みは心の本體なれば

但だ一念開明して身に反して誠なれば即ち此に即いて在あり……尙ほ何の道か得べきの問ひあるは、是れ猶ほ未だ驢に騎て驢を覓むるの蔽を免れず。

と騎驢覓驢とは自ら持する者を迷うて自ら覓むることて、禪家常用の俗語である。

即心即佛を解せざるは眞に是れ驢に騎て驢を覓むなり。

とある。

十三、應無所住而生其心

王子が

良知の體は皦として明鏡の如し、妍媸の來る物に隨て形を見て明鏡曾て留染なし。

所謂情萬事に順て情なきなり。住する所なくして以て其心を生ずとは佛氏曾て是の

言あり、未だ非と爲さず。明鏡の物に應ずる妍なる者は妍、媸なる者は媸、一たび

照して皆眞なるは即ち是其心を生ずる處。妍なる者は妍、媸なる者は媸、一たび過

て留めざるは即ち是れ無所住の處なり。

と曰ひて良知を明鏡に喩へたるも、禪の心鏡の譬喩より出てたので、
應無所住而生其心

は金剛經の語で、六祖の大悟に縁ある有名の文である。

十四、更參三十年

王子曰く

蓋し方外技術の士、未だ以て道と爲す可らず、達磨慧能の徒の若きは則ち庶幾くば之
に近し。然れども未だ言ひ易からず。足下其説を聞んと欲せば、山林に退處すると三
十年、耳目を全うし、心志を一にして胸中洒々として一塵を掛けず、而して後に以
て此を言ふべし。

這是禪家人を接する手段にして、緊要の處に至りては言詮不及なれば、更に三十年行
脚し來れと道ふ。圓悟の語に

一喝を下して曰く、且く道へ什麼の處にか落在す。更に參ぜよ三十年。
とある。

十五、衆生病故我病

王子が

天下の人猶ほ狂を病む者あり、吾れ安ぞ得て狂を病むに非んや、猶ほ喪心の者あり、
吾れ安ぞ喪心に非んや。

と曰ふは禪家に用ゆる維摩經に
一切衆生の病むを以て是の故に我病あり。一切衆生病滅すれば則ち我病滅す。
とあるより來る。

十六、無我

王子が

聖人の學は無我を以て本と爲す。と曰ひ又、

人生の大病は只是れ一傲字なり、子と爲つて傲なれば必ず不孝……諸君常に此を體せんとを要す。人心は本是れ天然の理、精々明々、纖芥の染著なく只是れ一無我のみ。

と曰うて、謙を無我としたるは、論語の無意無心無我の無我なるべきも、禪の無我より其意を深くしたのであらう。

十七、理障

王子が

爾ち卻て心上に箇の天理を尋ね去らば、此は正に所謂理障なり。

と曰ふは圓覺經の

一つには理障、正知見を礙ゆ、二つには事障、諸の生死を續く。

の文より出て、六祖の淨障に同じ。

十八、安心法

王子が無題の詩に

巖頭有石人、爲我下_ニ麟峒、脚踏_ニ被履、五十兩、身披_ニ舊衲、四十斤、任重致遠、香象力、鬢_レ霜坐_レ雪、金剛身、夜寒雙虎與_ニ溫_レ足、雨後禿龍來_ニ伴_ニ宿、手握_ニ頑磚、鏡未_レ光、舌底流泉、梅未_レ熟、夜來拾得_ニ遇_ニ寒山、翠竹黃花好_ニ共_ニ看、同來問_レ我安心法、還解將_ニ心與_レ汝安。

とある。破履舊衲は皆禪語で、衲は衲衣ともいふ。香象金剛二つ共に佛語。雙虎のと

は善覺禪師の故事であらう。善覺禪師は常に錫杖を持して夜間に林麓の間に出て、七歩に一たび錫を振うて觀音の名號を稱す。一日觀察使裴休之を訪ふ、問て曰く還て侍者ありや否や。師曰く一兩箇あり、祇だ客に見せしむべからず。裴曰く甚麼の處に在る。師乃ち大空小空と喚ぶ、時に二虎あり庵の後より出づ。裴之を觀て驚悸す。師二虎に語りて曰く、客あり且く去れ。二虎哮吼して去る。

と記してある。磚鏡のとは

南嶽懷昇禪師馬祖に問うて曰く、大徳坐禪して甚麼をか圖る。馬祖曰く作佛を圖る。南嶽乃ち一甌を取て彼の庵前の石上に於て磨す。馬祖曰く磨して甚麼をか作す。南嶽曰く磨して鏡と作す。曰く甌を磨して豈鏡と成すを得んや。南嶽曰く甌を磨して既に鏡と成らずんば、坐禪して豈作佛を得んや。

より出て、梅未_レ熟は

大梅山の法常禪師曰く、任他_カあれ非心非佛、我は祇管に即心即佛。僧あり馬祖に舉似す、祖曰く梅子熟せり。

より出てたのであらう。拾得寒山のとも會元等の書に出づ。翠竹黃花も

青々たる翠竹眞如に非るなく、總々たる黃花般若に非る無し。

の禪語より出てたらしい。安心のとは

二祖慧可大師、達磨に謂て曰く、我心未だ安からず、請ふ師安心せよ。達磨曰く心

を將ち來れ、汝の與めに安ぜん。

より出てたのである。

十九、千聖無_二心外訣_一

王子が夜坐の詩に

獨_ニ坐_ニ秋庭_ニ月色新_{ナリ} 乾坤何處更閒人 高歌度_ニ與_ニ清風_ニ去_テ 幽意自隨_ニ流水_ニ春_ニ 千聖

本無_ニ心外訣_一 六經須_レ拂_ニ胸中塵_ニ 卻憐擾々周公夢 未_レ及_ニ惺々陋巷貧_一

とある。千聖本心外の訣なし、六經須く胸中の塵を拂ふべしの二句の如き、禪偈として差問ない程である。

二十、心非_二明鏡臺_一

王子が大極巖に書する詩に

一竅誰將_ニ混沌_ニ開_{ナリ} 千年様子道州來 須_レ知太極元無極 始信_ニ心非_ニ明鏡臺_一

始信_ニ心非_ニ明鏡臺_一 須_レ知明鏡亦塵埃 人人有_ニ箇圓圈_ニ在_ニ 莫_レ向_ニ蒲團_ニ坐_ニ死灰_ニ

とある。此等二首共に六祖の偈を用ゐてあると、上章に記した如くである。

二十一、本來無一物

王子が門人を送る詩に

笠屐連年愧^レ遠求^一 本來無^レ物若爲^レ酬^一

の句がある。本來無一物より出て、一休の

何をがな參らせたくは思へども

達磨宗には一物もなし

の歌に似てゐる。

二十二、人々具足箇々圓成

王子が諸生に示す詩に

箇々人心有^二仲尼^一の句、及び人々自有^二定盤針^一

萬化根源總在^レ心の句は

禪の人々具足箇々圓成の常套語より出て、抛^二卻自家無盡藏^一沿^レ門持^レ鉢傲^二貧兒^一の句は、法華の故事であるとは上章に記してある。

二十三、迷^レ已^レ逐^レ物

王子が

己^レれを^レ忘^レれて^レ物^レを^レ逐^レふ

と數^レ言^レひたるは楞嚴經の

一切衆生無始より來、己^レれに^レ迷^レう^レて^レ物^レと爲^レして^レ本^レ心^レを^レ失^レひ、^レ物^レの爲^レに^レ轉^レぜ^レらる。若し能く物を轉せば即ち出來に同じ。

より出て、是れ亦禪語の一である。

二十四、猫捕^レ鼠

王子が工夫の間斷なきを示す爲に、猫の鼠を捕ふる喩を引用したのも禪者の常用語で、渤潭の草堂寺善清禪師、黃龍祖心禪師に參じ、風幡の語を授けられて入る所なきを

苦しむ。黃龍乃ち之に告て曰く子猫兒の鼠を捕ふるを見ずや、四足地に踞して首尾一直、目睛瞬せず、諸根順向にして擬するに中らざる無し。子誠に能く是の如く心に異縁なく、六根自ら静かにして、默然として究めば萬に一を失ふ無けれ。清是れより閑縁を屏去する歳餘にして豁然として開悟す。より出づ。

二十五、一棒一痕

王子が工夫の切實なるを示す爲に用ゐたる

一棒一痕、一擱一掌血

なる語も禪の用語で

一棒一痕、逗機、人を殺す須く血を見るべし。

力を盡して道ひ得るも一棒一痕、力を盡して道ひ得ざるも一掌一手血。などの語は人の皆知る所である。

二十六、吾心具六經

王子の心を重んずる六經を以て吾心に具はるものと爲す、

六經は他に非ず、吾心の常道なり。故に易は吾心の陰陽消息を志す者なり。書は吾心の紀綱政事を志す者なり。詩は吾心の歌詠性情を志す者なり。禮は吾心の條理節文を志す者なり。樂は吾心の欣喜和平を志す者なり。春秋は吾心の誠僞邪正を志す者なり。

といふ。這は圓悟が

一代藏教五千四十八卷も、心と説き性と説くを免れず。

といふに異らぬ。

二十七、千聖不傳

王子曰く

致知の訓は千聖不傳の秘なり。

と、禪語に

向上の一路、千聖不傳、學者形を勞すると猿の影を捉るが如し。
とあるに倣うたのである。

二十八、靈丹一粒

王子が良知に就て

人若し這の良知の訣竅を知らば、他の多少の邪思横念に隨て這裏一たび覺れば都て自ら消融す。眞箇是れ靈丹一粒鐵を點して金と成す。

というた中の靈丹云云は禪錄に多く見えて

靈丹一粒鐵を點じて金と成すか如く、至理の一言凡を轉じて聖と成す。
とある。靈丹を還丹としたのもある。

二十九、洪爐點靈

王子が

人を殺すには須く咽喉上に就て刀を著くべし、吾人の學を爲す當に心髓より微處に入るべし、自然に篤實光輝、私欲の萌と雖も眞に是れ洪爐點雪、天下の大本立つ。といへる洪爐のとは禪語に

洪爐上一點の雪、又は紅爐上一點の雪

などありて消え去り易きをいふ。

三十、運水搬柴

王子曰く

錢穀兵甲搬柴運水と雖も何れに往くとして實學に非らんや、何事として天理に非らんや。

と、禪の

神通並妙用、運水及搬柴。

溪は乃ち晝聲夜聲、便宜に運水に落ち、山は乃ち春色秋色、便宜搬柴に得たり。

とを合せて考へば、一層滋味が知れやう。

三十一、一即一切

王子が

但だ已に第二義に落つ、須く第一義上より力を着くべし。一眞一切眞。

と言ふは全く禪語である。第一義第二義は謂ふ迄もないが、一眞一切眞も、華嚴の説相に倣うた禪語である。

一即一切、一切即一。

一性圓かに一切性に通じ、一法徧く一切法を含む。

上士は一決して一切了す。

などいふのである。

三十二、正法眼藏

王子は良知の二字を指して

眞に吾が聖門の正法眼藏なり。

といふた、這是禪の

正法眼藏、涅槃妙心。

より出てたるは謂ふ迄もないが、良知良心と涅槃妙心との相似にも注意するを要す。

且つ正法眼藏とは正法眼、正法藏の二語を禪が合して正法眼藏なる成語を作つたのである。

三十三、以心傳心

王子が

此は是れ聖學傳心の要、此に於て既に明かなれば其餘皆洞然たり。

といふは儒學をも

教外別傳、以心傳心、不立文字。

と同様に取扱ふのである。

三十四、葛藤

王子曰く

古本の釋、已むことを得ざるなり。然れども多く辭説を爲さず、正に恐らくは葛藤纏繞せば則ち枝幹反て蒙翳を爲さん耳。

と。葛藤は文字言語を意味する禪語で。

葛藤を打す。閑葛藤を打す。葛藤を看取せよ。

など用ゐてある。

三十五、轉法華

王子が語に

其精微奥蘊の若きは人の思うて自得するに在り、言語の能く喩す所に非ず。後人多く文に泥み相を執するあり……却て是れ心法華に従て轉ずるなり。

とある。這は禪の言語道斷、言詮不及などの意で、法華云云のとは、六祖が法華經を

讀む僧に示して

心迷へば法華に轉ぜらる、心悟れば法華を轉ず。

といふた語を用ゐたのである。

三十六、良馬見鞭影走

王子が

諸賢皆一日千里の足、豈區々が警策する所あるを俟たんや、聊か此を以て鞭影を示す耳。

といふは、

外道あり世尊に問ふ、有言を問はず、無言を問はず、世尊據座す。外道讚嘆して云く、世尊大慈大悲我迷雲を開て我をして得入せしむと。作禮して去る。阿難尋て佛に問ふ、外道何の所證ありて稱歎し去るや。世尊曰く、世の良馬の鞭影を見て行くが如し。

より出てたのであらう。

三十七、法堂前草深一丈

王子曰く

近來同志の叙會如何を審にせず、法堂前今已に草深きと一丈なる無きを得るや否や。這は長沙景岑禪師上堂の語に

我若し一向に宗教を擧揚せば法堂裏須く草深きと一丈なるべし。事已むを得ずして汝諸人に向て道ふ、盡十方世界是れ沙門の眼。

とあるより出たのである。

三十八、逐塊

王子が

佛家人を撲ち塊を逐ふの喩あり、塊を見て人を撲てば則ち人を得、塊を見て塊を逐ふ、塊に於て奚ぞ得んや。

といへるは

塊を犬に擲つ有れば犬は塊を逐ふ、塊終に止まず、獅子に擲つ有れば獅子人を逐ふ、

其塊自ら止む。

の譬喩で、王常侍と京兆の米和尚の問答にも、獅子は人を噛み、韓獺は塊を逐ふとある。

三十九、指月

王子曰く

惟だ捕風捉影の弊あるのみに非ず、抑も且に指を執して月と爲すの病あらんとす。

這は大佛頂經に

人の手を以て月を指すに指を認めて月と爲すが如し、豈唯だ月輪を識らざるのみならんや、兼て亦指の體に迷ふ。

とありて、指月の語が、禪書に散見するは、人の熟知する所である。

四十、背覺合塵

王子曰く

已に逆憶に流るれば以て自ら其良知を蔽ふに足る、此れ未だ覺に背き詐に合するを免れざる所以なり。

覺に背き詐て合すとは、禪語の背覺合塵を轉用したので、喚んで背覺合塵と爲し、亦捨父逃逝と名く。

とあつて、本心の靈覺に背きて、私欲の塵念に循ふの意である。

——大正三年八月卅一日改版校了——

大正三年九月五日印刷
大正三年九月九日發行

禪學文庫第三編

定價金壹圓拾錢

著者 忽滑谷 快天

發行者 高島 大圓

印刷者 東京市小石川區原町六番地 佐久間 衡治

印刷所 東京市京橋區西紺屋町二十七番地 株式會社 秀英舍



發行所

東京小石川原町六番地
振替東京一五六八六
電話番町二六〇八

丙午出版社

大正文庫

明治昭代の榮光を記念し大正聖世の文教に貢獻せむがために現代第一流の宗教家學者文藝家を傾はして『大正文庫』を發行し今や全部十二冊こゝに完成す外形は電車汽車中の書籍に便に内容を處世修養の伴侶に好し——(全部完成)

- 文學博士三宅雪嶺先生著(定價五十錢郵稅六錢) **第一編 明治思想小史**
- 文學士沼波瑠音先生著(定價七十錢郵稅八錢) **第二編 此 一 筋**
- 新佛教徒同志會編(定價七十錢郵稅八錢) **第三編 來世の有無**
- 大内青嶺先生著(定價六十錢郵稅八錢) **第四編 禪の極致**
- 黑岩周六先生著(定價六十錢郵稅八錢) **第五編 予が婦人觀**
- 釋清潭先生著(定價六十錢郵稅八錢) **第六編 狐禪狸詩**
- 高島米峰先生著(定價八十錢郵稅八錢) **第七編 噴 火 口**
- 杉村楚人冠先生著(定價六十錢郵稅八錢) **第八編 ひとみの旅**
- 加藤咄堂先生著(定價六十錢郵稅八錢) **第九編 書 窓 車 窓**
- シヨウ原著堺利彦先生譯(定價六十錢郵稅八錢) **第十編 人と超人**
- 文學博士村上專精先生著(定價六十錢郵稅八錢) **第十一編 六十一年**
- 内田魯庵先生著(定價八十錢郵稅八錢) **第十二編 沈黙の饒舌**

佛敎講義録

僅に一ケ年で佛敎の大系が學び得られる、
學界空前の佛敎講義録出づ

佛敎がわからなくては日本の歴史の解釋が出来ない日本の文學も味ふことが出来ない日本文化の由來するところも知ることが出来ない従つて佛敎を知りたいといふ人は多いが唯讀三年俱舎八年では手もつけられないそこで誰にでも手つ取り易く佛敎の大系が飲み込めるやうにといふので現代有数の學者に請ふてその専門とするところの學科の講義をして貰ふことにしたのである世の徒に大家の名を列して社擧げな代作講義を掲載するが如きものと同一視するとなかれ

- 佛敎研究法 東洋大學教授 島地大等
- 佛敎概論 宗敎大學教授 加藤咄堂
- 印度の佛敎 宗敎大學教授 萩原雲來
- 支那の佛敎 東洋大學教授 境野黃洋
- 日本の佛敎 聖山大學教授 境野黃洋
- 佛敎の經典 帝國大學講師 常盤大定
- 法華經講義 天台大學教授 島地大等
- 佛敎研究法 東洋大學教授 島地大等
- 佛敎概論 宗敎大學教授 加藤咄堂
- 印度の佛敎 宗敎大學教授 萩原雲來
- 支那の佛敎 東洋大學教授 境野黃洋
- 日本の佛敎 聖山大學教授 境野黃洋
- 佛敎の經典 帝國大學講師 常盤大定
- 法華經講義 天台大學教授 島地大等
- 禪學要義 加藤咄堂
- 歐米の佛敎 フクトル 渡邊海旭
- 佛敎美術 帝國大學講師 中川忠順
- 宗敎學綱要 眞言大學教授 融 道 玄
- 基督教綱要 慶應大學教授 廣井辰太郎
- 神道綱要 東洋大學教授 足立栗園
- 其他臨時講義を増加すべし

每月一回十五日發行	一冊菊判二百頁	滿一ケ年(十二冊完結)
購 料	一ケ月分	三ケ月分
東	六十錢	一圓五十錢
合 計	五十錢	一圓
	一圓十錢	二圓
		三圓
		五圓五十錢

發行所 東京 小石川 區 原町六丁目 電話 六八六 丙午出版 社

『英朝報』記者 大住嘴風先生著
現代思想講話

定價金一圓廿錢
郵税金八錢

現代人は須く現代の思想に通ぜざるべからず現代の思想に通ぜむにはまづ其の思想の由來せる傳統を究め進んでゼームス、オイケン、ベルグソン等の如き現代思想を代表する大思想家の説くところを知るを要す著者今此等碩學の著作の全體に精緻の研究を加へ深遠なるその根本思想を捉へ來りて明快直截に講話し人をして一讀直に現代思想に通曉せしむると共に又親しく大思想家に講話し人をして自己を養ひ人生の意義を了得せしめんとす洵にこれ思想講話に一新生面を開きたるの名著

暮村隱士 久津見藤村先生著
現代八面鋒

定價金八拾錢
郵税金八錢

物平を得ざれば則ち鳴る而も著者はたゞ自ら鳴るを以て足れりとせず之を發して八面に當り散し十方に喝破すその鋒先の向ふところ女優あり倫理あり藝者あり教育あり浪花節あり哲學あり活動寫眞あり宗教あり眞にこれ多角多趣味の一大珍書

暮村隱士 久津見藤村先生著
眞人偽人

定價金壹圓
郵税金八錢

先生書を著はすこと數次而して發賣禁止の嚴命を蒙ること亦數次聊か疴癢を起して朝野の名士一百餘人を捕へ大にこれに喰つてかゝる眞人はこゝに其面目を揚げ偽人はこゝにその面皮を剥かるその論辛辣その評深刻洵に筆端風を生じて文に聲あるの概あり

堺 利彦先生著
樂天囚人

定價金六拾錢
郵税金六錢

此書は狂暴、不平、怨恨、嫉毒、殘忍、無恥、悖逆を以て世に目せらるる社會主義者が人の子として親として夫として友として將た人類の一員として宇宙の一分子として如何なる態度を持するかを其獄中生活に於て率直に露骨に赤裸々に發揮せる者之を一言にすれば社會主義者の安心を語れる者

賣文文集

定價金壹圓
郵税金八錢

帝國之節 著者の友人先輩六十餘名家が著者の人物文章主義、事業に對する長短錯落奇拔痛快の評語 序 賣文社の記、著者自ら其の事業を語る 第一編 木下尚江君を評す 第二編 子に對する態度 三、宗教とは何ぞや 四、水戸の四、寸馬豆人 五、逆徒の死生觀 六、死の趣味 三、墓見物 四、谷川の水(バーナード、ショウ原作) 第四編 告白 三、喜劇 二、クレンクビユ、大杉榮 三、飯謀人 耶蘇、高島泰之 如寒村 二、クレンクビユ、大杉榮 三、飯謀人 耶蘇、高島泰之

堺 利彦先生著
自傳赤裸の人

定價金九拾錢
郵税金八錢

佛國の革命はルソ一の『民約論』によりて點火せられ日本の教育界はルソ一の『エミール』によりて啓發せらる波瀾重疊神田貞茂の彼が生涯は彼自ら大膽にこれを告白して餘すところなし今これを譯して彼が眞面目を傳へむとするものは達識能文の堺利彦先生なり一讀してルソ一前に立てるの感を起さしむ

カウツキー先生原著
堺 利彦先生譯
社會主義倫理學

定價金壹圓
郵税金八錢

哲學界には迷妄にして頑冥なる唯心論が跋扈し文藝界には不徹底にして神秘的なる本能主義が流行し宗教界及び教育界には淺薄にして偽善なる因習道徳が唱導せらるゝ今日此の明晰透徹なる唯物的倫理觀を以て彼の家を啓き此の味を照すは譯者が深く痛快とする所なり著者カウツキーは歐洲社會黨中第一の學者を以て目せらるゝの人日本の學界と文壇とは遂に此書を無視すること能はざるべし(譯者)

幸徳秋水が最後の文章
基督抹殺論

定價金七十錢
郵税金八錢

一代の論客として知られたる幸徳秋水も誤つて天地の容れざる大道無道を企て今や遂に斷頭臺上の露と消え去りぬ其鐵窓裡に吟呻せるの間特に此一巻を著す所論痛絶快絶行文悲絶憤絶嗚呼幸徳秋水死に臨みて基督を扶殺し了せむとす抑々何の思ふ所あつて然るか多く語るに忍びざるなり秋水自ら曰はく「是れ予が最後の文章にして生前の遺稿也」と敢て滿天下の憎讀を冀ふ

最新論理學

文學士 渡邊又次郎先生著
定價金一圓廿錢
郵稅拾貳錢

本書は哲學の泰斗たる著者が學界の缺陷を補はん爲めに特に選述せる所に係り所論の明晰にして内容の整頓せる簡潔なる敘述の中に學士の卓見を洩したる所他に比を見ざる老熟の大家なり又欄外に重要な題目を掲げ卷末に英語と對照せる詳細の索引を附したるが如き讀者の便益之に過ぐるものなかるべし

筆舌

加藤咄堂先生著
定價金七十錢
郵稅金八錢

天下の大雄辯家大文章家たる著者が筆舌生活二十年の經驗を基として演説と文章との秘訣を語り模範を示したる名著にして殊にその生活實驗談は正に現代の青年を奮起せしむるに足る大文字なり

亂れ雲

村上博士序
藤井瑞枝女士著
定價金八十錢
郵稅金八錢

女史は跡見花隠先生門下の才媛にして學界の先覺文學士藤井宣正氏の未亡人なり夙に文才と俠氣とを以て知らる「亂れ雲」一編集むる處二十餘章四百五十餘頁諷刺教訓皮肉或は鋭き觀察或は隠れたる温情あらゆる方面を輕妙洒脫なる筆を以て大膽に且つ痛快に描寫し實に一部の現代世相史を成す

新氣運

「無我愛」首唱者
伊藤證信先生著
定價金八十錢
郵稅金八錢

斷然傳習と教權の束縛より脱却して世の罵詈訕笑輕侮憎惡の中に立ち臆面なく忌憚なく無我の愛の根本眞理を吐露して以て混沌たる現代思想界に一道の新氣運を誘導せむと試みたるもの!

廣長舌

三宅雪嶺先生序
高島米峯先生著
定價金七十錢
郵稅金八錢

加藤咄堂先生曰はく「米峯今胸中鬱勃の氣を呵して『廣長舌』一篇を著す其の言ふ所は世事に疎なる學者輩の企て及ばざる所にして其の論ずる所は肉を刺し骨を通して當世人士の肺腑を刺る洵にこれ堂々警世の大文字」と

惡戰

加藤弘之先生序
高島米峯先生著
定價金八十錢
郵稅金八錢

著者曰はく「これ僕が半生の惡戰史なり父なく母なく學なく識なく殊に加ふるに資金なく後援なき探一貫の青年が如何にしてこの生活難の世に處し來りたるかを語るは又以て現代青年諸君が新運命の開拓に資する處なきを保せざるべし」と

理想的商業

島田三郎先生序
高島米峯先生著
定價金二十五錢
郵稅金六錢

賣ると買ふとは對等なりお客威張つて商人屁こ垂れること甚だ道理なしそれ賣るに法あり買ふに道ありこの法を説きこの道を教へ以てお客様といふものゝ立場を明にし以て商人といふものゝ位置を高め而して買ふものにはうんと買へと勧め賣るものにはしこたま賣れと告ぐるものは即ちこの書なり

修養史譚

前外務大臣 伯爵 林董閣下序
東北大學 澤柳政太郎先生序
櫻井長 千河岸貫一先生著
定價金壹圓
郵稅金八錢

林伯爵曰はく「此の書を繙くに古今東西の史乘より異世同轍の事實二百對を擧げたる者にして教師これを用ゐば以て講話の資を得べく父母これを讀まば以て庭訓の料たらむ」と

前外務大臣 伯爵
林 董閣下纂譯

修養の模範

定價金七拾錢
郵税金八錢

文學博士 村上專精先生著
通俗 養論

定價金壹圓
郵税金八錢

文學博士 村上專精先生著
改訂自 信錄

定價金六拾錢
郵税金八錢

文學博士 村上專精先生著
誠のしるべ

定價金四拾錢
郵税金八錢

家庭では父母が子供にする話の種に困り學校では教師が生徒にする話材の陳腐なのに窮し寺院や教會では辯士が引用する美譚の乏しいのに窮り而して青年は讀んで自修の資とするに足る程の書籍の少ないのを歎いて居る譯者これを憂へ書を讀む毎に精神修養の模範とするに足るやうな美談逸話を翻譯摘録して遂にこの書を成すに至つたのである。此の書は世の宗教家教育家及び父兄青年諸君の前に此の書の發行を報告することとなつたのは實に無上の光榮である。

古聖實踐の芳躅を辿り前賢研究の結果を收め苟も規箴とするに足るべき名論金言は悉くこれを援引して依て以て極めて平易に修養の理論を説明し苟も模範とするに足るべき善行美譚は悉くこれを蒐録して依つて以て極めて明快に修養の方法を叙述す恐らくはこれ斯界未だあらざる精到完備の修養書たらむなり。

これ博士の著にして又實に博士が信仰の告白なり言々已の實驗を語り句々心の奥底を披瀝すまづ筆を「人生の目的」に起して「目的の成否」を明にし「實在と我れ」「佛陀と我れ」の關係より「自力と他力」の異同に及びて之を結ぶ五章廿七節説いて至らざるなく述べて盡さざるなし進歩せる佛教學者の見解は此書によつて窺ふべく敬虔なる佛敎信者の態度は此書によつて知るを得べし。

誠は實に人生の基礎をなすものにして政治も實業も宗教も道徳も教育も凡て此の根底の上に立たざるべからず今や村上先生古今東西の事例を引いてその然る所以を詳記せらるる苟も誠を體得して眞の人たらんと欲するものは此書を讀め。

文學博士 村上專精先生著
女性 訓

定價金四十錢
郵税金六錢

スタンフォード大學總長
マクドナルド博士原著
中村 平先生譯
人物の修養

定價金五十錢
郵税金八錢

ウキリヤム、ハイド氏原著
鈴木 泰太郎先生譯
處世 自己測量

定價金五十錢
郵税金八錢

黑岩 周六先生講演
人生 問題

定價金七拾錢
郵税金八錢

本書の内容は天職中庸質素謙節操の五訓を以て女子座右の箴言となすにあり多年女子教育に經驗を重ねたる村上博士はよく女子の缺點を摸み來りて之を訓誡すその親切實に至れり盡せり凡て世の淑女たらむと欲する者は必ず其の座右を離すべからざる珍書なり。

澤柳前文部次官特に長文の序を草す其の一節に曰く、「ジョルダン博士は當今世界有数の學者にして北米第一流の人物なり且外國人中最も深厚なる同情を我日本及日本人に寄せらるる紳士なり我國人がその所説その意見を知らむと欲するの情並に之を知ること依て利すること尠からざるは言を待たず：我日本人は本書に對し尊敬と同情とを表し以て博士に報ゆるところあらんことを希望す」と。

これ米國に於ける最新の處世術なり最新の修養法なり而して又實に最新の記術法に成れる名著なり今移して以てこれを我邦現代の社會に薦めむとするもの他なし吾人が惡徳邪僻の鞭朴人格完成の砥礪立身處生の嚮導社會道徳の軌範として眞に得難き大教訓たるを以てなり來れ青年卿等がこの生活難の世に處して新しき運命の祕庫を開くべき鍵はこゝにあり。

人生とは何ぞや是れ千古の疑問なり哲人之を説き碩學之を論じて而して懷疑の雲益々密に苦悶の人愈々多からむとす然るに現代思想界の泰斗黒岩先生自ら人生問題に達着して疑問の源泉を探り大に其深趣を得て茲に此書あり叙ぶる所神の有無に始まり人生の悲觀樂觀に終る眞に天籟の妙音なり世の悶ある人疑ある人速に來つて此福音に接せよ庶幾くは平穩と満足と活力とを得て温く且つ光ある人生に觸着することを得ん。

退耕錄
東北大學總長
澤柳政太郎先生著
正價金壹圓
郵税金八錢

著者の序文に曰はく「官遊十數年其間人よりも多く云ひ多く論じたるも尙ほ腹ふくるゝ心地を忍んで言はざりし者多し」と知るべし本書は先生が實歴上百戦の問題に逢着して滿腔の所感を披瀝したるものなることを諷刺あり教訓あり感奮あり痛罵あり氣焔あり理窟あり警拔にして透徹せる觀察あり大膽にして穩健なる斷案あり言はんと欲する所は言ひ盡くし現代の青年諸君は須く一讀せざるべからず

死後の生活
フエヒネル先生原著
文學士 平田元吉先生譯
定價金五拾錢
郵税金八錢

本書は現世の事實を基とし最高の詩的想像を參へ或は歸納的に或は類比的に未來生活を縱横に叙述したる詩と科學との靈妙なる融合にして此書によれば千里眼幽靈等の不可思議なる現象も容易に解釋することを得敢に本書は親愛者を失びし人死生の疑惑に苦しめる者の無二の慰藉となり一般の讀者に津々たる興味を配ち又學者研究者に豊富なる暗示刺激を與ふるや疑ふ可からず

強肺病全快術と肺病全快談
杉村縱横先生譯編
定價金九十錢
郵税金八錢

本書前編は歐米に於ける最新の肺病根治法にして親しく譯者が實驗してその効果を收めたるもの後編は日本現代の名士が肺病全快の實驗談にしてこれによつて從來不治の病と定められたる肺病も必ず全快すべきものなることを立證せられたり世の醫師に弄ばれ賣藥に欺かれたる人々は本書を繕いて天來の福音に接せよ

南半球五萬哩
文學博士 井上圓了先生著
定價金九十錢
郵税金八錢

南半球を一周し赤道を四過し濠洲南河南米の各洲は勿論北は北極海より南はマゼラン海峡まで行程實に五萬哩の大旅行を試みて其の間の山容水態國情民俗の珍奇怪異を記して遺憾なし挿畫五十錦上更に花を添ふ

活佛教
文學博士 井上圓了先生著
定價金壹圓拾錢
郵税金八錢

明治の宗教界思想界を震撼せしめたりし「佛敎活論」は完成す僧侶の活躍寺院の興隆期して待つべし眞にこれ死佛敎をして活佛敎たらしむるの福音

國民と宗教
帝國大學教授 高楠順次郎先生著
文學博士 松本文三郎先生譯
定價金七十錢
郵税金八錢

本書は國民と宗教との關係を述べたる論文に非ずして著者が該博なる學識と深厚なる同情とを傾注して日本人が國民的生活の理想と宗教的生活の理想とを詳説せられたる新著也苟も日本の國民たる者日本の宗教家たる者は一讀せざるべからざる佳書たるのみならず行文は通俗平明なる講話體なれば又以て演説講話の好模範たるべし◎附録として研究上修養上極めて重要な論文數種を收む悉く學界の珍

釋尊の研究
文學博士 松本文三郎先生譯
文學士 羽溪了諦先生著
定價金壹圓
郵税金八錢

本書筆を釋尊以前の婆羅門敎の理想に起して釋尊當時の印度諸學派の狀態より進んで釋尊の根本思想に説き及び以て釋尊の世界觀人生觀生死問題の解決及解脱の方法を明にし更に釋尊の涅槃に移りこゝに著者の全力を傾倒して詳に涅槃の意義を解し具に東西學者の謬論を破る誠に敎界及學界に於ける尊重すべき一大新研究なりと稱すべし

彌勒淨土論
京都帝國大學文科大學長
文學博士 松本文三郎先生著
定價金壹圓
郵税金八錢

宗敎學上殊に佛敎史上理論實際の兩方面に涉り極めて重要な地歩を占むるものは「淨土の思想」なり而して其半面は「阿彌陀淨土」の闡明によりて光輝を放てるも他の半面は「彌勒淨土」の埋没によりて全然暗黒に歸すこれ豈佛敎史上の一大缺點にして又實に佛敎界の一大憾事ならずや松本博士多年の遺著を傾けその專攻する學科の立脚地より「彌勒淨土」の由來淵源を詳論し博士の舊著「極樂淨土論」と相待つて茲に佛敎の淨土思想研究は完璧を成せり何人か又此の新研究を味はずして恣に佛敎の淨土思想を談せんとするものぞ

ポール、ケラス先生著
學習院教授鈴木大拙先生譯
阿彌陀佛
定價金三十五錢
郵税金六錢

阿彌陀佛とは何ぞや是れ佛教の根本問題也ケラス博士その彩筆を揮ひ殆ど小説的結構を以て通俗に之が解釋を試む宜なりその歐米讀書界に好評噴々たることや弊社曩に十年博士と居を同しうし最も博士と親善なる大拙先生を煩はして此和譯を得たり豈啻に佛の有無に惑ひ心の不安に悶ゆる人のみこれを讀むべしと言はむや

東京帝國大學講師
文學士 常盤大定先生著
釋迦牟尼傳
定價金七十錢
郵税金八錢

佛傳の大部を占むるものは神秘なる傳説なり世人或は直にこれを抹殺して顧みざるべしと雖是等の傳説が古來深く佛徒の頭腦を支配せるより見ればその裏に何等かの意義を有せざるはなかるべし此著は主として是等の傳説の起原を尋ね意義を究め南北兩傳大小兩系の相違を比較對照し以て此の千古の大聖釋迦牟尼佛の眞面目を傳へむとするに在り

文學博士 遠藤隆吉先生著
孔子傳
定價金四十錢
郵税金十二錢

その涉獵極めて廣汎にその材料極めて豊富にその觀察極めて銳利にその論斷極めて適確なるは勿論殊に各編各章到處に博士獨特の奇想と先哲未言の結論とに接するを得るは洵に本書の特色として天下に誇稱するに足るところ

高等師範學校講師
互理章三郎先生著
王陽明
定價金一圓五十錢
郵税金十二錢

哲人王陽明もまた凡人吾等の如く事毎に理想と現實との衝突に逢うて悲觀し懊惱したりし也しかも能く自ら百般の問題を解決し盡くして遂に悟徹の妙境に入る豈偉ならずや本書はこの王陽明の人格を主題として其の實生活と學説とを併叙し依つて以て凡人が如何にして哲人たるを得しかの歷程を明にし吾等が修養の範としたる者なり

東洋大學講師
境野黃洋先生著
補聖德太子傳
定價金五十五錢
郵税金八錢

佛教史家として夙に令名ある境野先生が其の燃犀なる史眼と圓熟せる文才とを傾倒して日本文明の開拓者日本佛教の教主たる聖德太子の事蹟を敘述し併て當時社會の政教習俗の特色を發揮したる名著にして文章の明快論斷の適確實に他に其の匹を見ざる所

大内青帶先生序
高島米峰先生著
一休和尚傳
定價金九十錢
郵税金八錢

元日に觸體を振廻はして人の度階を抜き末期に薨を啼つて梵天に捧けた彼一休後小松帝の皇子として九重雲深きところに榮華の夢を見やうともせず一笠一笠ただ平民的教化のために一生を送つた彼一休痴か狂かはた一大偉人か彼が眞面目そは本書の上に躍動して居る

曹洞宗大學教授
忽滑谷快天先生著
達磨と陽明
定價金壹圓拾錢
郵税金八錢

本書は王禪二學を比較對論して禪學の精髓を發揮すると同時に王學の眼目を密開して餘蘊なく進徳の工夫修養の方法爲學の用心精神鍊磨人格養成等一として備はらざるなし眞にこれ精神界の指南針にして亦實踐道徳の指導者たり

明楊起元評註
加藤咄堂先生和譯
和譯維摩經評註
定價金七十錢
郵税金八錢

本書は明の楊起元が評を加へ註を施して斯經の哲理と文學とを闡明したるものを更に加藤咄堂先生が平明暢達な文を以て之を和譯し傍訓を附して通讀會解に便ならしめしもの世の佛を學び禪を談せむと欲する者には勿論講習本として亦最も適當なり

加藤咄堂先生著
原人論講話
 定價金六十錢
 郵税金八錢

佛教典籍多しと雖も之れを儒道二教の教義と比較して佛の嶄然一頭地を抜く所以を明にせるもの此の原人論に過ぎたるはなし著者今獨得なる通俗平易の筆を以て叮嚀懇切に此の原人論を講述し且つ近代思想を以て批評を加へ髓頭には添ふるに古人の解説を以てしたれば佛教の大意と人生問題の解決とは此の書によりて知ることを得べし

加藤咄堂先生著
通俗講話の理方法
 定價金九十錢
 郵税金八錢

通俗教育の必要日に過りてしかも通俗に講話し得べき人幾人かある本書は多年の研究と豊富なる経験とを有する加藤先生が如何にせば通俗に講話して聽者を感動せしめ得べきかの理論と方法とを極めて親切に解説し多くの例話を擧げてその使用法を示されたものなれば教化の秘訣雄辯の奥義講話の資料收めて一巻の中に在り苟も講壇に立たむと欲する人一たび本書を繕かむか忽にして一箇理想的の通俗講話者たるを得む

東洋大學講師
 釋 清 潭先生著
寒山詩新釋
 定價金五十錢
 郵税金八錢

是れ佛か是れ仙か是狂漢か得て解すべからざるものは寒山士なり是れ韻語か是れ詩語か是れ佛語か得て解すべからざるものは寒山詩なり宜なり千古の疑團牢固として抜げざることや著者精深雄大の學と才とを以て一筆勾斷彼が面目ここに於てか露出す寒山詩禪を知らんと欲するものは須らく此書を以て指南車となすべし

東洋大學講師
 釋 清 潭先生著
詩新釋
 定價金五十錢
 郵税金六錢

本書、漢は唐宋元明清五朝の高僧に涉り和は虎關以後絶海義堂に至る大凡七十餘人の名詩を新釋したるものなり其詩雄渾なるもの高古なるもの典雅なるもの勁健なるもの婉麗なるもの清秀なるもの幽淡なるもの之れに悉く字解と讀法と評論とを付し平易を旨として深切を極む和漢高僧詩篇を釋義して此の如きもの恐くは曠前なるべし

慶應義塾大學教授
 忽滑谷快天先生評釋
和名士參禪集
 定價金五十錢
 郵税金六錢

本書は日本に於ては後醍醐天皇花園天皇龜山天皇の聖帝より北條時頼北條時宗武田信玄上杉謙信前田利家楠正成等古今の名臣支那に於ては唐の宣宗皇帝宋の太宗皇帝等の諸帝より黃山谷蘇東坡白樂天張無盡斐休等の碩學が參禪せる佳話を蒐め且和漢禪匠に關する逸話美談を合せて之に批評を加へ學道の正路を示し在家參禪の資糧に供する者にして讀者をして坐ながら古今の鴻儒碩學と禪を商量し名僧大德の錯鍵に接するを得しむ

マクス、ミユラー博士原著
 文學士 清水友次郎先生譯
宗教學綱要
 定價金五十五錢
 郵税金八錢

清水學士佛教大學に教授として宗教學を講ずるや近代稀有の宗教學者マックス、ミユラー博士の原著を講本とし隨つて譯し隨つて教ふ今これを補訂潤飾して以て世に公にす蓋し邦文の宗教學書としては唯一無二の真書なり

第三高等學校教授
 文學士 野々村直太郎先生著
宗教と倫理
 定價金五十錢
 郵税金八錢

正にこれ新宗教論なり新道德論なり而してまた實に人生問題最後の解決書なり世の靈と肉との饑渴に悩める者知と信との衝突に苦しめるもの若しくは夫の舊宗教と舊道德とに厭けるものは速に來つてこゝに無上の安樂地を見出せ。附録には二宮尊徳翁の宗教論を評す

眞宗補教 北條蓮華先生著
眞宗の教義
 定價金二圓
 郵税金十二錢

眞宗は實に日本佛教の精華にして又實に日本佛教の最大勢力なり本書は博識篤學を以て聞えたる北條師が多年の蘊蓄を傾けて宗祖親鸞上人を中心とし其師法然上人と其資蓮如上人との教義を信仰上より研究したる結果を組織的に叙述したる者なり他力教の秘奥を探り本願寺の盛なる所以を知らむとする者の必讀を冀ふ

ア、エフ、ステンツラ！先生原著
ドクトル、フィロソフ、エー
萩原雲來先生譯補
梵語入門
定價金壹圓
郵税金八錢

一部人士の梵語を學ぶ者あるも彼等は成な歐語の梵文典を使用すされど
歐語梵文典を用ゐんは第一歐語を學ばざる可からざる不便あり第二價格
低廉ならず以上二種の缺點を補ひ梵文典に指を染むるの初歩たらしめむ
がために創めて本書を公にす自今以後苟も英字母二十六を讀み得る人は
僅少なる代價を拂つて悉く梵語を學ぶを得べく梵本を讀むを得べし
著者南天楞伽島に入りスマンガラ僧正の會下において巴利語を修むること
と多年其平生手記する所と迦旃延以下原語の文典と歐洲人の手に成れる
巴梵兩語の語典とを併せ參考し以て本書を成すに至れり叙述の前後には
多大の注意を拂ひて簡より繁に入り易より難に進むの方法に従ひたれば
初學者にして巴利語並に梵語を修めんとするものには良好の伴侶たるべ
し

文學博士高楠順次郎先生闕
曹洞宗大學教授
立花俊道先生著
巴利語文典
定價金壹圓
郵税金八錢

悉曇阿彌陀經とは古來日本に傳はりたる梵文阿彌陀經即ち極樂莊嚴大乘
經なり特に悉曇と冠語せしは新體梵字に簡げんが爲なり梵文に加ふるに
漢字羅馬字音を附し脚注には馬博士の訂正本との異同をもあげ終りに訂
正本、辭書、唐秦二譯を掲げたり學者此の書によらば悉曇學の一端を窺
ふに易からん

慈雲尊者眞筆
高楠順次郎先生序
阿彌得壽先生著
悉曇阿彌陀經
定價金壹圓
郵税金八錢

「上宮聖德法王帝說」はその記事切實その文詞醇古多く寧樂巴往の記録を
取つて正史の闕を補ひ誠に史家必讀の書たること今こゝに贅するを須
す而して狩谷掖齋先生の「證註」に至つては詳説を折衷し正誤を辨別して
先人未發の見解甚だ少からざるは史家の夙に嘆服するところしかも尙多
少の遺漏あるを免れざるなり然るに我が平子鐸嶺先生博覽強記にして史
眼犀利掖齋先生の未だ見ざるを見未だ言はざるを言ひ誤れるを訂し足ら
ざるを補うて錦上更に花を添ふ敢て之を史家と佛家とに薦むる所以なり

平子鐸嶺先生遺著
補校法王帝說證註
正價金一圓
郵税金八錢

この二書は共に筆記書入れ等に便せんがため本文の上下に空白を存し置
きたれば學校の教科書學會の講本として最も適當なり

文學博士村上專精先生編
科註原人論
定價金十二錢 郵税金二錢
科註大乘起信論
定價金十六錢 郵税金二錢

著者曰はく「形に於ては恐らく既刊東洋史中の最も小なるものたるべか
らむも學生を養くる點に於ては或は最も大なるものあるべきを信じて疑
はざるなり」と

高島米峰先生著
學生參考
東洋史
定價金十三錢
郵税金二錢

古今東西の偉人数名を捕へ其の時代を語り其の性格を論じ其の功過を
明にす觀察警拔にして行文微妙今の偉人の眼に映じたる古の偉人の眞面
目は躍如として技に活動す人若し偉人とは如何なる者か偉人は如何にし
て修養したるか偉人は如何なる事業を爲せしか偉人は死後に何を遺せし
か社會は如何に偉人の死を觀しかを知らむと欲せば冀くは此の偉人の偉
著に問へ

文學博士 三宅雪嶺先生著
訂增
偉人の跡
定價金壹圓
郵税金八錢

博士の學殖富瞻に博士の見識卓越に博士の文章超凡なるを世既に定評あ
り今此學と識と文とを傾倒して此著を作す政治を論じ宗教を説き文學を
語り人物を評す其の筆の向ふところ流れては清渺盡きざる大河となり數
じては續紛限りなき飛沫となる小泡か激湍か蓋し近代稀有の快著也

文學博士 三宅雪嶺先生著
小泡十種
定價金四十五錢
郵税金八錢

博士の學殖富瞻に博士の見識卓越に博士の文章超凡なるを世既に定評あ
り今此學と識と文とを傾倒して此著を作す政治を論じ宗教を説き文學を
語り人物を評す其の筆の向ふところ流れては清渺盡きざる大河となり數
じては續紛限りなき飛沫となる小泡か激湍か蓋し近代稀有の快著也

文學博士 三宅雪嶺先生著

明治思想小史

定價金五十錢
郵税金六十錢

日本の大思想家三宅雪嶺先生今や思想の最高境に立つて明治思想の變遷を語るまづ明治以前の思想界に筆を起して維新の思想に入り進んで最近四十五年間の政治經濟學術道德宗教教育社會等の各方面に亘り深刻の觀察を逞しうして對切の結論に到る今や大正維新の風雲に際會せる日本國民は明治年間國運の大發展が果して如何なる思想の産物なりしかを知らずして依て以て第二の維新を大成せざるべからず果して然らば此書これ眞に大正國民必讀の書

文學士 沼波瓊音先生著

此筋

定價金七十錢
郵税金八十錢

現時俳壇の飛將軍、沼波先生の新著なり。先生曰はく、「この書に、大知識大感想ありて、天下の士、必ず一本を求めよとは言はず。たゞ書中、或物あつて存す。この或物は、或人には輕んぜられんも、或人にはゾクゾクと嬉しがらるゝなり。其の嬉しがりそなたの方にのみ、これを侷む。」と本屋曰はく、「輕んずるも可、嬉しがるも不可なし。たゞ買ふ人の多からむことを、切望に堪へず。」と

新佛教徒同志會編

來世之有無

定價金七十錢
郵税金八十錢

吾等の死後はどうなるか地獄があるか極樂があるか抑々又吾等の靈魂は滅するの滅しないのか元來吾等に靈魂などいふものがあるのか無いか凡そ此くの如きの難問題に關し現代各方面の名士二百數十人の解答を得てこれを滿載したのが本書である古來の大疑問も本書一たび出づるに及んで忽ち雲散霧消するであらう

高島米峰先生著

現代青年論

定價金十五錢
郵税金二十錢

本書は著者が其會社の青年に向つて講演せるもの、筆記にして各種青年會などの施本として最も適當なり内容目次左の如し
一、青年の力―二、今の青年は依頼心が強―三、今の青年には氣概がない―四、今の青年は成功を急ぐ―五、今の青年は一事に精しくなくて多岐に勞する―六、今の青年は思想が羸弱である―七、今の青年は信仰が乏しい―八、今の青年は同情が乏しい

禪の極致

大内青巒先生著
結城素明齋伯齋
定價金六十錢
郵税金八十錢

不立文字の教理も、文字に依らざれば知ることも能はず。以心傳心の妙諦も、言語を離れては傳ふること能はず。但惜しむ、古來禪を説くもの、徒に難解の語句を弄して、人をして愈々出て、愈々迷はしむること。大内先生學深く徳高く、教理二面に於て、眞に現代の達人たり。殊に先生、平談俗語を以て、幽玄の理を説き、深遠の法を語ることに、殆ど天下獨歩、而して本書は即ち先生得意の作、禪の極意、正にこれに盡きたりと稱するも、敢て溢美にあらざるなり。附録「五位頌講話」また先生獨創の見識を以て、謙遜に講ずる、蓋近來の大文字なり

予が婦人觀

黒岩周六先生著
定價金六十錢
郵税金八十錢

進歩的にして却て稍保守的の檢束あり古きが如くして實は極めて新しき趣味を有する黒岩先生の婦人觀はトルストイ的の絕對貞操觀に配合するに經濟的獨立の實際問題を以てし種々様々の方面よりして斷案の片鱗を示しつゝ遂に人をして成程と承服せしむる老巧親切の文を爲す眞に現今婦人問題の燈明臺也世の年頃の娘その父母及び女子教育家の精讀を冀ふ

新佛教

記者 壹月、咄堂、我觀、米峰、黃洋、縱橫、秋畝、大拙
雜誌
一冊十六錢
半年分一圓十錢
一年分二圓四錢

「新佛教」は自由討究傳説排斥の大義に基き吾人の全精神を満足しつべき新信仰を鼓吹し今日の時世に適應すべき新道德を扶植せむとするものなり
「新佛教」は光明を求め大道を傳ふ法を賣り道を講くものにあらず
「新佛教」は自主獨立能く言ふべきを言ひ語るべきを語る他の保護の下に踴躍して言ふべきを言ひ得ず語るべからざるを語るが如き者にあらず

狐禪狸詩

釋 清 潭 先生著
定價金六十錢
郵税金八十錢

今世何ぞ夫れ狐禪狸詩の多きや著者大獅子吼猛然として起ち狐禪の窠狸詩の窟一蹶して之を壞る其の毫端に上りしもの實に此の一書なり今や裝成りて人間に横行す世の狐禪狸詩に太平なる者は讀むも詮なしたゞそれ狐禪狸詩に不平なる者のみこれを讀むべし作詩壇上別に一新生面を開き人をして詩禪一味の妙境界に遊ばしむ

釋清潭先生主筆
月刊 漢詩
一年分五十錢

釋清潭先生を中心とする漢詩國談社の機關雜誌にして毎號「作詩法講話」「三體詩講話」「陶淵明集講話」及び社友の作品を掲載す
別に漢詩漢文の添削代作等の規定あり切手五錢送付せらるれば規則掲載の「漢詩」一部贈呈す

土屋鳳洲先生著
晚晴樓文鈔
定價金八十五錢
郵税金八錢

本書は一代の鴻儒文壇の巨匠たる土屋弘先生の文集にして表あり説あり辨あり序あり記あり碑あり傳あり書あり贊銘あり類跋あり凡そ漢文の諸體備はらずといふことなし苟も漢文を學ばむと欲するものこれを模範とせば又良師なきを憂ふるを須むざるなり殊に明治時代の碩學文豪辭を極めて各篇に讚評を加ふ卒然巻を開けば天下の文星一堂に會して道を談じ文を論ずるの偉觀を成す綠陰深處にこれを繕かば涼風自ら起つて神氣清爽を覺えむ

村上專精先生序
高島米峯先生著
噴火口
定價金八十錢
郵税金八錢

著者心内に鬱積する熱火今や轟然として爆發しこゝに礫となり砂となり灰となりて四方に飛散す之を慘狀と言ふべきか之を偉觀と稱すべきか著者自らこれを知らずたゞ著者はその舊著「廣長舌」「惡戰」等無比來つて本書の愚論惡文更に一段の進境あるを確信するのみ

文學博士村上專精先生主筆
月刊 人道講話
一冊七錢五厘
一年分八十二錢

「人道講話」は村上先生の人道講話を連載する者
「人道講話」は教育と宗教と道徳との三面を有す
「人道講話」は精神の涵養を以て教育の本領とす
「人道講話」は人道の實踐を以て宗教の要務とす
「人道講話」は父母の孝養を以て道徳の大本とす

記者 松本博士、内藤博士、新村博士、上田博士、小川博士
月刊 藝文
一冊廿二錢
半年分一圓廿錢
一年分二圓卅錢

「藝文」は京都帝國大學教授及び其他學者の研究創作を發表する機關雜誌也
「藝文」は東西兩洋の學術文藝に對し最謹嚴深刻の批判を下さむとする者也
「藝文」は關西思想界の中心として兼て關東の思想界を風靡せむとする者也

「東京朝日」記者
杉村楚人冠先生著
ひとみの旅
定價金六十錢
郵税金八錢

長い足、鋭い眼、明な頭、太いペン、而して此書成る。しかも山水の景を描かず、風月の樂を語らず、専ら現代を寫し、人間を論ず。會て、洛陽の紙價を貴からしめたる「大英遊記」以來の名文にして、又會て、發賣禁止の嚴命を蒙りたる「七花八裂」以來の奇著なり。

加藤咄堂先生著
書窓車窓
定價金六十錢
郵税金八錢

天地の秘奧を探り、人心の機微を明にす、乃ちこゝに天籟あり、地響あり、人籟あり。これによつて世界の知識を求むべく、これによつて古今の徳澤に浴すべし。内に在りては書窓の良師、外に出ては車窓の善友、一卷の書また尊貴なるかな。

學習院教授 鈴木大拙先生著
帝國大學講師 スエデンボルグ
定價金五十錢
郵税金八錢

神學界の革命家、天界地獄の遍歴者、學界の偉人、神秘界の大王、古今獨歩の千里眼、精力無比の學者、明敏透徹の科學者、出俗脫塵の高士、之を一身を集めたるをスエデンボルグとなす。吾國今や宗教思想界の風雲漸くまさに急ならんとす、精神を養はんとするもの、時世を憂ふるもの、必ず此人を知らざるべからず。これ此著成る所以。

文學博士村上專精先生著
六十年
 定價金九十錢
 郵税金八錢

これ村上博士が過去六十年間悪戦苦闘の活歴史を大膽に赤裸々に叙述せられたるものにして現代青年が以て鑑とすべき絶好の立志傳たり殊にその間に於ける佛教の盛衰消長及び教界人物に對する忌憚なき評論は明治佛教の側面史として教家の一讀を要求するに足るの實益と趣味とを具有する大文字にして眞にこれ教界未だ有らざる自叙傳なり

文學博士松本文三郎先生著
佛典の研究
 定價金九十錢
 郵税金八錢

松本博士は佛典の本文批評に於て實に日本學界のオーソリチー也多年その蘊蓄を傾けて研究せられたる佛典已に幾十人加ふるに較近燦爛その他に於て發掘せられたる佛典の研究は正に先哲未到の新説なりとす佛典の眞偽を如何に辨別し經論の精神を如何に會得すべきかに心を勞する人まづ此書を一讀せざるべからず

久津見藤村先生著
ニイチエ
 定價金九十錢
 郵税金八錢

ニイチエの研究ニイチエの理會ニイチエの祖述に於て著者の如きは邦人中未だこれあらざる所今其爛熟の想と奇峭の文とを以てニイチエの性格ニイチエの事業ニイチエの思想ニイチエの人生觀世界觀ニイチエの哲學ニイチエの理想を描出し人をして親しくニイチエに接するの感あらしむ

文學博士松本文三郎先生著
宗教と哲學
 定價金七十錢
 郵税金八錢

本書全編十有四章まづ筆を「釋尊は何を説きしか」に起し「宗教と道徳」「研究と信仰」等次第を逐うて遂に健全なる宗教の基礎は哲學的論據に在ることを説明し延いて老莊程子の支那哲學に論及す惟ふに病弱なる現代の思想界は此書によりて元氣の回復を求め得む乎

東洋大學教授土屋鳳洲先生編
評解 唐宋八家文鈔
 定價金四十五錢
 郵税金八錢

夫の唐宋八大家文が文章の模範と仰がるゝもの久し矣惜しいかな巻帙浩瀚初學の徒却つて岐路に亡羊の嘆なき能はず今我が土屋先生これを遺憾となし八大家の名文中更にその精髓五十編を選びこれに細評を加へて以て文章の結構作法を知らしめこれに詳解を施して以て故事熟語の意義を明にす學校教科の用書として甚だ適當なるのみならず地方青年獨學の良師として實に得易からざる珍籍たり

帝國大學講師 鈴木大拙先生著
禪の第一義
 定價金一圓
 郵税金八錢

禪は東洋に於ける精神界の特産なりしかも從來誤つて山林の徒のみによりに拈弄せられ活きたる人生と殆ど没交渉なるかの觀ありしは蓋し未だその第一義を闡明しその着手の處を説述することの徹底せざりしに基するものならずむばあらず著者參禪辨道三十年その實際の歷程を精叙しその所得の公案を解説し一は以て初學者の指針となし一は以て人生の苦悶を除くせむとす不立文字教外別傳の禪も本書出でゝその近代の色彩の頗る鮮なるものあるを看取し得む

内田魯庵先生著
沈黙の饒舌
 定價金八十錢
 郵税金八錢

維摩の一默その聲雷の如しといふ今や日本文壇の老維摩内田魯庵先生が沈黙の懷中に一大獅子吼を試み婦人を濟ひ文士を度し靈肉の調和を説き生活の難易を教ふその旨の懇切なるその論を穩健なる誠に人間處世の好南針たりこれを目して饒舌となしこれを評し咄哉と言はむは蓋し未だ方丈の妙諦に參する能はざるもの

スエデンボルグ著
 鈴木大拙先生譯
新エルサレム
 定價金六十錢
 郵税金八錢

此書は思想界の奇傑スエデンボルグの新基督教説にして救済には信と行とを要すること愛即ち意志は人格の基礎なること自由あるが故に善惡あること善惡あるが故に神の榮光彰はるゝこと等の諸説を簡明適切に述べたる快著

パナードシヨウ作 堺利彦先生譯
人と超人

定價金九十錢
郵税金八錢

シヨウ熱全盛の今彼の最大作の譯書出づ彼れの生命哲學彼の兩性觀彼の皮肉彼の諷刺彼の滑稽彼の冷嘲彼の熱罵悉く此一篇の中に在り
譯書内容は本文の外、譯者の序、原著の序、原著通俗版の序、シヨウの人物及著作、革命家必携及其座右銘、私が倫敦で見た人と超人(松居松葉)等あり

文學博士 井上圓了先生著
おばけの正體

定價金五十錢
郵税金八錢

本書は妖怪研究の大家たる井上博士が明治維新以後今日に至るまで日本の各地に起つた妖怪事實の中で特に珍な者奇な者恐ろしい者悽い者悲しい者憐れな者面白い者馬鹿々々しい者百三十件を調査して一々その原因を示し百鬼夜行の真相を明にした快書であつて怖がるくせに化物話を聴きたがる小供のためにも「闇靈の正體見たり枯尾花」など、悟つたつもりの大人のためにも趣味と實益とを與へること多大である

東洋大學長 大内青巒先生著
青巒禪話

定價金壹圓廿錢
郵税金八錢

この人にしてこの著ありといへばそれだけでもう澤山なりそれ以上廣告文でコケを威す必要いづこにかあるしかも試みに一二言を加ふれば平談以て微妙の法門を説破し俗語以て別傳の眞諦を闡明す題を設くる六十有餘悉くこれ天地の祕奥を探り人心の機微に觸る迷悟凡聖の如きたゞ讀者の擇ぶところに委するのみ

文學博士 高楠順次郎先生 共著
文學士 木村泰賢先生 共著
印度哲學宗教史

近刊

325

235